
恋姫無双～地味は愛すべき個性～

魔神 1 3

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫無双〜地味は愛すべき個性〜

【Nコード】

N3562T

【作者名】

魔神13

【あらすじ】

主人公はオリ主で非転生者。ヒロインの一人もオリキャラ。攻略対象キャラはどちらかと言えば地味なメンツを予定……ハムと三馬鹿の可哀想な人とか。

基本独自設定で、一刀君は蜀勢。

ただし作者は一刀君嫌い。

話のメインは政治とか経済とか組織運営とか戦術、戦略……要するに俺tueeは無し。

まず始めに（前書き）

とりあえず説明

まず始めに

主人公はオリ主で、袁紹軍所属の逢紀ほうきです。
転生とか憑依とかは関係ありません。

ただのオリ主で、チート能力は基本的に武、知ともにありません。
まあ、知の方はちょっとばかり変わった能力……特技の様な物がありませんが、それも常識の範囲で抑えたいと思います。

よって物語的には内政とか組織運営、戦略、戦術の話がメインになります。

主人公の武力無双とかはありません。

「逢紀って誰だ？」と疑問に思われた方にはこう答えましょう。
「ざんげん 讒言大好きな、揚げ足取り君だと。」

彼やその他一部の馬鹿どもさえいなければ、袁紹って天下とれたんじゃないかね？　ってくらいの人。

無論これは正史での彼の行動を些か恣意的に捉えたもので、今作の彼はちよつと違います。

どう違うのかは読んでからのお楽しみという事で。

ちなみに今作では逢紀を始め独自設定満載ですので予めご了承ください。
さい。

例えば「あれ？　原作ではこいつこの時期○○を治めてたはずでは？」とか疑問に思われる事もあるでしょうが、そこは『独自設定』という四文字でスルーしてください。

原作キャラで死者を出すかどうかはまだ決めておりません。

ただ、一言言っておくと……作者は蜀一刀はあまり好きではありません。

性格的なこともあります。蜀で彼が提案する策に穴があり過ぎるのが原因です。

「んな策を自慢げに口にするな！」です。

そこら辺を逢紀君に色々突かせてやろうと思います。

まず始めに（後書き）

次から本編

第一話 逢紀君勝負する

逢紀side

「――」

『誰が――言う事――』

「――」

『――黙れ！――バケモ――』

俺の目覚めはいつも通り最悪だった。

寝間着は汗を吸ってグッショリとした感触を身体に伝え、失った水分を補充しろと喉が騒ぐ。

寝台の傍らに置いてあった水差しを手に取り、中身を一気に飲み干す。

「ぬるい……まあ、もうそろそろ夏だしな」

渴きの苦しみから解放されたら、段々と意識が覚醒してきた。

俺の名前は逢紀、字は元凶、ゆえあって真名は無い。

今年で十八になる美男子だ。

……。

……………。

……………はい、すいません、嘘つきました。

基本的に俺は没個性な顔立ちです。友人からは良く『残念一歩手前

の顔』と評されます。

……あ、いけない、せっかく補充した水分が目から零れてきた。

で、その没個性な顔立ちの俺が今現在何処にいるのかというと、荊州の端っこのとある街にある水鏡塾というところの宿舎だったりします。

水鏡塾というのは水鏡先生のやっている私塾だ。本名は司馬徽、通称は『ほわわ先生』である彼女が運営するこの私塾は基本的に官僚を目指す『女学生』の為の物なのだが、俺は特例として籍を置かせてもらっている。

特例の理由は俺の今は亡き両親が関係しているのだが、それは割愛しよう。

重要なのは、俺がここで諸々の学問を学び、天下泰平の為に頑張っているという事だ。

意識の完全覚醒を終えた俺は、何度繰り返しても慣れない全身を覆うこの不快感を振り払うべく、寝台から起き上がり服をいそいそと着替えた。

普段から良く着ている紺地の袍服を纏い外へ出ると、まずは井戸へと向かう。

宿舎に囲まれた中庭にある小さな井戸には先客がいた。

「お、早いな田豊」

「ん？ ああ、逢紀か。君も早いな。朝食までまだ大分時間があるぞ」

そう挨拶を返してきた俺の友人田豊は白面の貴公子という言葉が似合い過ぎるほど似合い過ぎる美男子だ。身長も俺よりちよつとだけ高く、後ろで一つにくぐられた長い緑髪と色白な肌が、老若男女を問わず見る者を魅了する。

これで顔を洗った直後の水も滴る何とやらを見せられた日には……
……うん、同性として殺意がわいてくるね。

「気のせいかな寒気が……」

「夏風邪だな」

「いや、もっと禍々しい何かが」

「夏風邪だ」

「こう、負の情念が凝り固まったような」

「夏風邪」

夏風邪で押し切った俺は顔を洗うべく井戸から水を汲み上げようと思ったが、面倒だったので田豊が使った桶の水を利用することにした。

バチャバチャバチャと。

ん？ 何故に田豊は顔を真っ赤にして口をパクパクさせているのだろうか？ 勝手に水を使ったから怒っているのか？

随分と短気な奴だ、軍師志望のくせに。

そう言えば、何でこいつ男のくせに水鏡塾に通えるんだろう？ 俺と同じで特例という奴か？ 親が昔中央で役人やっていたが、腐敗政治に嫌気がさしてこっちに移り住んできたとは聞いたが、詳しい事は尋ねていないので良く分からんな。

「ほ、逢紀、君はもうちょっと――」

「あ、田豊先輩に逢紀先輩だ」

「あわわ、おはようございます」

田豊が何か俺にいちやもんをつけようとしてきた時、俺の宿舎とは井戸を挟んで反対側にある宿舎から、二人の少女が姿を現した。
変わった帽子にちんまい身体、愛くるしい所作は水鏡塾の女生徒の共通装備。

「おう、諸葛亮ちゃんに鳳統ちゃんか。おはよう」

塾の後輩である彼女達の前では無様な真似は出来ないと悟ったのか、田豊は口ごもる。

それを幸いに、俺は彼女達の為に井戸の水を汲んでやる事にした。面倒だが、これも先輩としての務めだ。まさか異性である彼女達に、俺達の使用後の水を回すわけにもいかないし。

その後俺達四人は、朝食までの時間潰しとして近くの東屋にて象棋で遊ぶことにした。

遊ぶといってもこれは兵学の基礎訓練でもあるので皆表情は真剣である。

横では田豊対鳳統の対局が行われているが、諸葛亮との対局に四苦八苦している俺にはそちらに意識を向ける余裕はない。

「よし、車で卒をいただくぞ」

「はわわ、じゃあ私は士をこっちに」

……四半刻ほど時間が過ぎたあたりで二つの対局に決着がついた。勝者は、

「ふう、何とか先輩としての面目躍如かな」

「あわわ、負けてしまいました……」

田豊と、俺――

「……無念」

「はわわ、勝っちゃいました」

——ではなく諸葛亮だった。

うんアレだ。

惜敗という奴だ。

僅差の敗北、実に名勝負だった。

「うわ、これは酷いな。惨敗じゃないか逢紀」

「ち、違うんだこれは！ たまたま！ たまたま今日は調子が悪くて！」

盤上を確認してげんなりしている田豊に、俺は必死に言い訳する。

「いや、諸葛亮側に八割以上兵力が残っているのに調子云々は関係ないだろう」

「ぐっ」

「本当に君は相手が何かしら失敗しないとボロ負けするな……」

「あ、相手の弱みに付け込むのが俺の戦法なんだ！」

「はわわ、先輩、それあんまり自慢になりません」

「ぐふっ」

諸葛亮の一言でとどめを刺される俺。

鳳統の憐れむような視線が逆に痛い。

く、くそこうなったら、田豊や鳳統に勝って名誉挽回だ！

「……はい、これで君は二連敗だね」

「あわわ、これで三連敗ですね」

……何これ、いじめ？

普通に勝った田豊はともかく鳳統はわざわざ俺の将の駒だけ残して

他を全滅させるとか……泣くぞコラ！

「ふ、ふふふ、もはや俺に残された最後の勝機はただ一つ！ さあっ！ 剣を取れ鳳統よ！ 水鏡流護身術の稽古をつけてやる！」

「うわ大人げない上に男らしくないな」

「何気に一番弱そうな雛里ちゃんを狙ってくるあたりが逢紀先輩らしいですね」

「あわわ、どうしよう」

「ふははははっ！ ほざけほざけ！ 人間最後に勝てばよいのだよ、勝てば！」

「あわわ！ 勝っちゃいました！」

第一話 逢紀君勝負する（後書き）

用語解説

袍服——着丈の長い、裾の広がったゆったりした衣服で、百官、知識人達の普段着

象棋——中国版将棋。ルールは知らない。将の駒は将棋という王将。

水鏡流護身術——現代で言う痴漢対策系の護身術。戦場ではほぼ役に立たない。ちなみに雛里は塾内女子最弱。

第二話 逢紀君仕える

逢紀 side

冬が来た。

今年の冬は何処も例年より寒いらしいと行商人のおっちゃん達が噂していた。

漢の中でも荊州は南方に位置する為ある程度寒くても平気だが、北方にある幽州とかでは恐らく凍死する者が大勢出るだろう。

本来なら南方や中央より暖を取る為の薪が輸出されるのだが、中央の朝廷がまともに機能していない為それも望み薄だ。

それにあまりに寒いと冷害が起こり、北で主に栽培されている麦系統の穀物が育たない可能性がある。そうなれば次に起こるのは飢饉だ。これは凍死等とは違い、食糧援助の必要性から荊州にも関係してくるはずだ。

実に鬱になる話である。

……という事を俺の部屋で象棋をさしながら田豊に愚痴ったら、苦笑が返って来た。

「行商人の愚痴からそこまで推察出来るのは結構な事だな。何もそうなると思ったわけではあるまい。案外あと数日でこの寒さは消えてなくなるかもしれないぞ」

「だったら良いがな。……本当にそうなると思うか？」

「……いや、十中八九君の言った通りになるだろう。実は水鏡先生も昨夜同じような事を仰っていた。ただ、一番まずいのは幽州ではなく冀州かもしれないと」

「ああ、そうか。幽州はある程度冷害に慣れているし備えもあるだろうが、冀州は微妙だな」

「あそこは碌な太守がいらないらしい。事あるごとに無茶苦茶な税を取り立てて民を迫害しているという噂が溢れかえっている」

会話の合間にコンコンと軽妙な音を立ててさし合ってきた象棋もそろそろ終局だ。

「冀州の刺史は何をやってるんだ？　そういった太守の不正を取り締まるのが奴らの仕事だろう？」

「本来備えに回されるべき穀物や薪を買う代金の一部が誰の懐に消えているのか……実に分かりやすいね」

「はあっ……鬱だ」

「こうなってくると各州を治める州牧という役職が新たに設けられるという話も現実味を帯びてきたよ」

「そんな話があるのか？」

「父の友人がまだ中央に何人か残っていてね、そこから漏れてきた話だ」

「なら信憑性は高いな。何だ、中央も色々と考えてるんじゃないか」

「ふつまさか。新しい官職を設ければ、それを売り払って金儲けをしている皇帝とその側近たる宦官の懐が暖かくなるという算段だよ。断じて北部の民の『暖』の為ではない。まあ、一部の心ある官僚が俗物刺史を潰す為に後押しはしているが」

「本当に鬱になる……っと、これで俺の勝ちだな」

まだ互いに駒はかなり残っているが、盤上を良く見れば詰んでいるのが素人でも分かる。

本日十三局目にしてようやくの初白星。

いや、本当に田豊は強いわ。

……そう、田豊が桁外れに強いだけであって、俺が弱いわけではない。本当だよ？

諸葛亮や鳳統にも負け越してるけど、あいつら何か規格外何だもん、

仕方ないよね。何で世に言う秀才たちが八年かけて学ぶべき事を三年で終わらせてんの、あいつら？ あれか、普通に八年かけた俺を馬鹿にしてんのか？

「ふむ、やはり二十五手目が失策だったか」

「そだな、あれが無ければお前の勝ちだったろうさ。冒険心を出し過ぎたな」

「……いや、普通ならあの程度の失策でこうまであっさり負けないんだがな」

「はっはっは！ 相手の失点を自分の得点に変えるのだけは得意なんだよ俺は………いかん、自分で言ってる虚しくなってきた」

馬鹿話をしながら駒を並べ直していると、来客があった。

諸葛亮と鳳統だ。

「はわわ、その、あの、逢紀先輩、田豊先輩、二人きりの所お邪魔してすみません！」

「ん？ いや、別にかまわないが？」

何で二人とも申し訳なさそうな顔を田豊に向けているんだろう。

あれ？ 田豊が何か不機嫌そう。さっきまで和気藹々と象棋さしてたのに何故だ？

……まあ、良いか。

「あわわ、えっと水鏡先生がお二人をお呼びするようになって」「水鏡先生が？」

何の用だろう。

今日は来客があるから講義も休みにすると仰っていたのに。

「とにかく行ってみるとしよう、逢紀」

「あ、ああ」

二人連れだって部屋を出ると、部屋に残った諸葛亮達の声が僅かに漏れ聞こえてきた。

『ねえ雛里ちゃん、やっぱり逢紀先輩達って付き合ってるのかな？』

な、なんだってー！？

『うん、間違いないよ朱里ちゃん。あの二人の間には余人を寄せ付けない空気を感じるもん』

いやいやいやいやいや待て！ 待つんだ！ いたいけな少女達よ！

付き合う付き合わない以前に俺と田豊は男同士で……って、まさか！？

あれか、最近水鏡塾内に出回っている『男同士のアレコレ』を描いた艶本が原因か！？

水鏡先生が自ら街の本屋を廻って買い揃えたというあの悪魔の書が！？

絶句して部屋に否定に戻ることすら思い浮かばない俺。

横を見ると俯き表情を隠す田豊。

だがな、田豊よ。

頬が真っ赤なのまでは隠しきれてないぞ。

うん、よく分かるぞその気持ち。

お前もやり場のない憤りを感じてるんだろう？

同性愛云々を噂されて嫌にならない奴なんかないもんな。

「行くぞ、田豊」

「――ッ！」

怒りのあまり田豊があのだ二人に暴力を振るいに行ったりしないよう、彼の肩を抱くようにして俺は水鏡先生の元へと歩き出す。

肩に手をまわした瞬間、ビクンと身体を田豊が震わせた所からして、やはり怒り心頭で爆発寸前だったのだろう。我ながら良い判断だった。

「水鏡先生、逢紀と田豊です」

「あ、やっと来た。入って入って」

「では、失礼します」

水鏡先生の執務室には三つの大きな家具がある。

二つは両側の壁に備え付けられた本棚で、残るは馬鹿みたいに大きな執務机である。

田豊とともに入ったその執務室内に人影は一つ。

水鏡先生ではない。彼女の姿は机によって特徴的なとんがり帽子以外全て隠されている。いつものことながら、あれでどうやって書類などを書いているのかさっぱり不明だ。

「あの、水鏡さん。こちらのお二人が？」

おずおずとした態度で口を開いたのは、俺達より先に執務室にいた少女だ。

歳は俺達よりやや若いかな？

地味なおかつぱ頭と、派手な金色の鎧が何やらちぐはぐな印象を俺に与える。

いや、よく見ればかなり美人で胸もこう、実り過ぎっちゃった感じ

で……ゴクリ。

唾を呑みこんだら凄じ白い目で田豊に睨まれた。
くそっ、男ならあれに反応するのは当然だろうが。こいつは枯れて
いるのか？

「はい、そうですよ。私の自慢の教え子その一と、あまり自慢で
きそうにない教え子その一です」

どっちがどっちななんて聞かないぜ。

田豊の名誉の為にな。

俺って優し

「あ、ちなみに自慢できないのが逢紀君です」

……。

……俺って優しさに飢えてるんだ、最近。

さめざめと泣いている俺を尻目に、おかつば美人と水鏡先生は会話
を進める。

「まあ、お宅に推挙できそうなのはこの二人くらいですね」

「そうですか。伏龍と鳳雛と噂されている二人の方は……」

「うーん。自慢の教え子その二とその三ですか？ 彼女達は確かに
卒業に必要な単位を取り終えていますけどまだ幼いですし、人生経
験が足りませんので、あと二年は外に出さないつもりなんです」

「そう……ですか。なら仕方ありませんね。はあ、麗羽様に何て言
い訳しよう」

「あはは、ご苦勞様です。でも、この二人なら確實にお宅の力にな
りますよ」

「片方は自慢ができないのに？」

「自慢できないのは性格と顔と身長と身体能力と甲斐性と生活態度

と性癖だけです。文官としての能力はまあ、十分に合格点です」

「は、はは、そうなんですか、それはまた……」

あれ、いつの間にかおかつぱさんに視線を向けられてる。

そんな熱い視線を向けられても困る。俺には百人の恋人がいるんだ。脳内に。

「じゃあ、ま、そういう事で。君達も良いよね？」

え、何が？

「構いませんよ。会話の流れから仰りたい事は分かりましたし、その鎧でそちらの方の身元もはっきりしてますしね……それに僕は逢紀と一緒に何処にだって」

んんん、まずいぞ。

田豊は理解してるらしい。

ここで俺だけ分かりませんというのは恥ずかしいな。何とか誤魔化さねば。

「逢紀君はどうですか？ 彼女達に付いて行きますか？」

どうもおかつぱお譲さんが何処かに行くのに付き添いみたいなのを水鏡先生に希望したようだな。何処に行くのかは知らんが、美人のお供を断るほど俺は甲斐性無しじゃない。

う、うんつと咳払いをしてから、おかつぱお譲さんの手を取り、キラリと光る（光ってるよな？）白い歯を見せながら俺は答える。

「無論喜んで！ この逢元図、貴女の為ならば例え地の果て空の果てでも付き従って見せましょう！ そう、例えそこが地獄だとして

も！」

いや、言ってみて初めて分かった。

俺に臭い台詞は似合わない。

机の向こうから水鏡先生の爆笑が聞こえてくるし。

おかっぱさんも困ったような顔してる。

そのおかっぱさんが優しく俺の手を振りほども、困った笑みのまま告げた。

「地獄は少々大袈裟ですけど、まあ、目的地はほぼ地の果てですから、一緒に頑張りましょう！」

「はい！……で、結局どちらに？」

日帰りは無理っぽいし、着替えとか用意しないと――

「冀州にある？という街です！」

この日、俺と田豊の袁家への仕官が決まり、着替えの用意は引越し準備に変わった。

……今の冀州とか地獄より酷いんじゃない？
可能な限り食料と医薬品を荷物に詰め込んどこう。

第三話 逢紀君旅をする

逢紀side

あの電撃仕官から早三月が経過した。

そろそろ寒さが和らぐべきこの時期に、俺は洛陽から？へと向かう袁家一行の中に身を置いていた。

袁家一行と言っても家族旅行程度の規模を想像してもらっては困る。流石は世に名高い名門袁家。家臣団と私兵、使用人から臨時雇いの荷物持ちまで含めると三千人を超える大所帯なのだ。

家財道具一式詰め込んだ使用人達が操る荷馬車数百台がゴトゴトと音を立てながら悪路を行き、その前後左右を袁家私兵の騎馬隊と歩兵隊が固める。

あ、ちなみに俺はお荷物よろしく荷馬車の甕の上に乗っけてもらっている。

何というか……物凄く……臭う。調味料か何かの甕らしい。

……他の家臣の連中は大抵馬なのに、俺は調味料の上。

俺だって馬には乗れるけど、残念ながら馬の数の都合で一人一頭というわけにはいかないので仕方ない。使用人の皆さんは良くて狭い御者台、普通は徒歩、悪ければ大荷物背負いながら徒歩なのであまり文句も言えないし。

まあ、これも新参者の下っ端なら当然の待遇か。

同じ境遇のはずの田豊は馬だけだな……。

あ、あれだよ。あいつ一応水鏡塾の主席だったし、あいつがあくまで特別扱いされているだけで、別に俺が殊更ぞんざいな扱いをされているわけではないのだよ。

……本当だよ？

袁家に仕官することになって向かった洛陽で、主である袁紹様に初めて挨拶に行った時ついいうっかり「あ、ここに来る前に市で見かけた曹操とかいう可愛い女性と一緒に変わった髪型ですね。真似をなされたんですか？」とか言ってしまった事は関係ないよ。

あれから一度も袁紹様にお会いすることを許されてないのも無関係だよ？

誰にともなく心の中で言い訳していると、一際冷たい風が吹いた。乾いた大地が砂埃を舞い散らす。

「……ううつ、寒いな」

「本当に寒いですねえ。まあ、北に向かってるんですから当然なんですけど」

「でも、そろそろ暦の上では春ですよ。やっぱり今年は例外的な寒さ何じゃ……よし、こうなったら顔良さん、人肌で温め合って」

「あ、麗羽様が呼んでますから失礼しますね」

ああ！ 何て事だ、この旅唯一の癒しが去って行ってしまった！！
軽快に馬をとばして前方のやたらと金びかで派手な馬車へと走り去っていった顔良の背中を、俺は絶望の眼で見送った。

あ、顔良ってのは俺や田豊を水鏡塾まで勧誘しに来たおかつば美少女のことだよ。

彼女のわりかし地味めな美貌のせいで、俺がこの寒中行軍に巻き込

まれたといっても過言ではない。

俺と一緒に袁家に仕官することとなった田豊は、文醜という名のや
や男の子っぽい美少女と馬を並べて何やら楽しげに会話している。
けっ、美男子殿はお手が早いこって。

「いやあ、田豊は本当に男前だよな」

「それは……褒め言葉かな、文醜殿？」

「一応褒め言葉だぜ。美人とか可愛いとか言われないなら、もっと
服装に気を使ったら良いんじゃないか？　アタイが言うのもなんだ
けどさ」

「華美は嫌いでね。機能性を求めたら、こうなった。おかげで同僚
の阿呆にはまるで同性のように扱われる毎日さ。……いや、待てよ、
あいつまさか本当に僕の事を」

「あゝ華美が嫌いってそれ絶対麗羽様の前で言わない方がいいぜ。
一発でクビにされるかも」

「ん？　そうか、忠告感謝する」

会話内容は遠くてよく聞こえないが、きっと逢引の予定とかを話し
合っているに違いない。

美男子爆発しろ！

貴様の真名を脂ぎった中年オヤジの間に広め回ってやる！

等と田豊を呪っていて初めて気付いた。

「俺、田豊に真名を呼ぶこと許されてないな……」

と言うより、あいつの真名自体知らない。

「……………はっ、さらに良く考えると、俺今までの人生で真名を呼ぶことを許されたこと一度もないじゃんか!？」

恩師である水鏡先生や、小憎たらしい後輩はわわとあわわも、三か月前の別れの時でさえ真名を預けてくれなかった。
え?　もしかして俺、彼女らに嫌われてたの?

「そう言えば田豊ってさ、何でアタイの事を真名で呼ばないんだ? 洛陽で斗詩と一緒に預けただろう、アタイの真名」

「……同僚に真名の無い奴がいてね」

「ああ、そいつに気を使ってんのか」

「真名を預ける場合は大抵交換のようになるから、受け取るだけで返せない者は辛い。水鏡塾でもその辺は皆理解していてね。皆本当は預けたがっていたんだが、我慢してもらったよ」

「じゃあ、アタイもそれに倣うとしますかね。斗詩とか他の皆にも伝えとくわ」

「助かるよ……ん?　例の阿呆が何やら落ち込んでいるな。ちょっと行ってくるよ」

「はいよ。アタイは麗羽様や斗詩の様子を見てくるよ。何か麗羽様がまた無茶言ってるっぽいし」

友達いない歴が年齢とか、俺の人生灰色過ぎじゃね? とかうなだれていると、田豊が近づいてきた。

「どうした逢紀?　元気がなさそうだが?」

「な、なあ、田豊よ。俺達って友達か?」

「うん？ まあ、そうなるな」

「そ、そうか、良かった……じゃあ、これからもずっと、一生友達で」

「一生は……困るな」

え！？ 何で！？

もしかして俺って切り捨てられる予定なのか！？

『ふっ、貴様はしよせん僕の踏み台でしかなかったのさ』的な感じで捨て去られる運命！？

「ほら、僕達も結構長い付き合いだし、もしかすると将来的には――」

「い、嫌だああああっ！ す、捨てないでくれ！ 俺を捨てないでくれ田豊！！ 俺を一人にしないでくれええええええっ！！」

「はあっ！？ 急にどうした逢紀！？ うわ、よせ襟を掴むな、落ちる！ 本当に暴れるな！ 周りの皆さんがやたらと微笑ましそうな視線を向けてくるだろうが！！ あ、あ、ああああっ！！」

……この後仲良く固い大地との邂逅を余儀なくされた俺と田豊は、後続の足を止める結果となり、顔良さんに酷く怒られましたとさ。

後悔はしているが、反省はしていない（キリッ）。

だって、友達欲しいもん。

よし、今度、田豊を俺の奢りで色街にでも連れて行こう。

男友達との友情を深めるにはそれが一番の方法だって、死んだ爺様がそう言ってた……気がする。

田豊 side

……こいつ、また何か阿呆な事考えてるな。

急に凜々しい顔つきになった逢紀を横目に、僕はため息をつく。
長い付き合いだから分かる事なのだが、こいつがこういった表情をする度に大抵阿呆な事をしでかすので胃が痛い。

痛む胃に眉をしかめながらも、僕は逢紀に話しておくべきことがあったので声をかける。

「逢紀。君が気にしていた件についてようやく情報を手に入れたぞ」
「俺が気にしてた……ああ、袁紹様が？に行くことになった経緯か。だって、不自然だもんな。汝南袁氏と謳われた名門袁家の人間が行くべき場所じゃねえよ、？は。河北の中ではまあまあの大都市だが、最近はかなり寂れて来てるっていう噂だしな」

「ああ、文醜殿の話では今回の太守就任人事はどうやら宦官に押し付けられたらしい」

「宦官か……そう言えば、袁紹様は何進大將軍の配下として奴らと敵対していたな。今回の人事はつまり、何進大將軍の勢力を洛陽から追い出そうってことなのか？」

「ああ、そうだ。宦官どもは袁紹様を袁家とは縁が無い僻地に、そこを復興させるという名目で追いやり、その力を削ぐようとしているようだ」

「んな人事、なんで引き受けてんだよ袁紹様は」

「……河北に平安をもたらせるのは、名門袁家の人間以外にいないという宦官の甘言に乗せられたらしい」

「マジですか？」

悲しい事に事実である。

僕の態度からそれを察したらしい逢紀が、酷く重いため息をつく。

「んで、碌に知り合いもない地へ赴任することになった袁紹様を氣遣い、顔良さん達が新しく家臣を迎える事を勧め、その結果俺達に白羽の矢が立ったと？」

「その通りだ。僕達の役目はまず、現地で私腹を肥やしているであろう小役人どもの排除のための尖兵だな」

「自分達の利権を奪われる事を恐れる俗物との対決とかやってらんねえ……」

うげえっ、と甕の上でのたうち回る逢紀。

そんな情けない彼の姿に僕は思わず苦笑する。

「あまり情けない事を言わないでくれよ、逢紀。僕は君に期待しているんだから」

「主席様が俺の何に期待するんだよ？」

「……物事の『欠陥』を見抜く才に、だよ」

「あんまり役に立ちそうにないだろ、それ。万能の天才である諸葛亮とかの方が絶対良いじゃねえかよ」

不貞腐れたように呟く逢紀に、僕は心の中でそれは違々と反論する。

『欠陥』を見抜く才。

これほど怖ろしい物はない、と言うのが僕の偽らざる意見だ。

昔から逢紀のその才を凄い物だと僕は感心していたが、この旅を通して単なる「感心」から「畏敬」や「畏怖」へとそれは変貌を遂げた。

その理由は、洛陽を出る際のやり取りにあった――

洛陽から？へと出発するための準備は、僕達が洛陽に到着してから顔良殿が主導してすぐに整った。

その準備の最終確認段階で、新参者である僕や逢紀が呼ばれて意見を求められた際に僕は『問題ない』と答え、逢紀は『これはまずいと答えた。

何がまずいのか問うたら『持っていく糧食が少な過ぎる』と言われた。

そこで顔良殿と確認してみたが、僕は少ないとは思わなかった。

洛陽から？までの道程を三ヵ月から四ヶ月と踏んだ顔良殿が用意させたのは、三千人が三ヶ月補給なしで行軍が出来る糧食だったのだ。予定通り行軍が済めば、糧食は調度目的地に着く辺りで無くなり、例えば行軍が幾らか遅れても途中で街によって買い足せば十分である。それが僕達の意見だった。

そんな僕達に向かって彼はこう呟いたのだ。

『売ってくれる保証は無い。そもそも売り物があるかどうかすら分からない。もし、売ってくれても……怨まれる』

顔良殿は、首を傾げた。

だが、僕は背筋の凍る思いをした。

思い出したのだ。

僕達が向かう北部は『飢饉』の危機にあると。

まだ実際に飢饉がおこっているわけではない。

だが、その兆候として今年の冬は例年よりかなり寒い。

冷害が起こる可能性は高く、実りは少ないはずだ。

農作物の生産者たる農民達は、それを文字通り肌身で感じているだろう。

そんな彼らの不安はただ一つ。

『自分達は飢えずに来年を迎えられるだろうか？』だ。

少しでも頭の回る者なら、食糧を備蓄するのに奔走するだろう……
重税を払った後の、なけなしの銭を手に。

そんな中、他所者の僕達が突然やってきて、三千人分の食料を買い漁って行ったらどうなるか？

一日分の糧食で約一万食。一月分で三十万食。

例え幾つかの街で分けて購入しても、その街に住まう者たちの負担は計り知れない。

いや、計り知れないどころか、それが原因で確実に多数の餓死者が出るだろう。

その事を知っているであろう地元の商人達は果たして他所者の僕達に食糧を売るか？

金を積みめば売るだろう。

金に物を言わせて食料を買い漁った僕達に街の人々がどういった感情を抱くか？

間違いなく、食い物の怨みだ。

怨んだ結果、何が起るのか……。

そこまで説明してようやく顔良殿は顔色を変えたが、それでも震える声で、

『私達が払ったお金で、他所の州から食料を買えば……』と反論した。

なるほど、漢全土から物資の集まる洛陽に住んでいれば、そういった考えも浮かぶだろう。

その反論に対して、逢紀がどう更なる反論を加えたかと言うと――

ガタンッ！！　バリンッ！！

前方からそんな物音と怒号が聞こえて来て、全体の行進が止まる。そして物思いにふけていた僕の意識も、現実世界に引き戻された。横に視線を向けると、逢紀がうんざりした表情をしている。

「また止まったな。今度は何だい、逢紀？」

「大方、荷馬車の車輪の軸が折れて荷台から甕が転げ落ちたんだろうよ」

「……これで本日六台目か。そろそろ旅に出てから潰れた馬車の数在三桁の太台に乗るな」

「まともな太守のいない地の街道が碌に整備されていないのは分かり切ったこと。整備されていない街道は容易に悪路へと変貌し、荷

馬車の車輪と人や馬の脚を潰す」

「だから利益重視の行商人達も数を減らし、街には近郊からの物資しか入らなくなる、と」

前方にあった金ぴかの派手な馬車から、さらにド派手な金ぴかの鎧を身に纏った豪華な金髪女性が降り立ち、金切声をあげながら事故現場へと歩き出し、それを顔良殿と文醜殿が慌てて追いかけていった。

「……だから、俺は言ったんだ。民間の物ではなく、耐久性に優れた軍の輜重隊が使っている荷馬車を用意した方が良いと」

「……僕もそれには賛成したんだけどね」

二人の意見を伝えに行った顔良殿が持ってきた主の返答は、こうだった。

『華麗なる私の軍勢に、武骨な軍の荷馬車など似合いませんわ！
おゝほっほっほっ！』

その晩は、逢紀と二人で朝まで自棄酒を飲んだ。

僕たちの明るい未来は、どっちだ？

第三話 逢紀君旅をする（後書き）

恋姫ではあまり行軍途中のあれこれが書かれていないので、一応書いてみました。

袁紹が洛陽を出ることになった理由などは独自設定です。

原作で何故彼女が洛陽にいなかったのか、分からなかったのもので。

第四話 逢紀君仕事を始める

逢紀side

俺達一行が？に到着して半月が経った。

？到着の際には、民衆が新たな太守をこぞって大歓迎……等と言う事は無く、事前に伝令を送っていたにもかかわらず出迎えたのは下級官吏数人だけだった。

民は皆家に閉じこもり、大通りには浮浪者の死体だけが転がっていた。

その事に対して我らが主である袁紹様はかなりご立腹のようであったが、俺からすれば？の民や官吏の反応は予想の範囲内だった。むしろ、石を投げつけられなかっただけましである。

ここ数代、？の太守は？の街に災いしか持ち込まなかったのだから。

先々代は民衆から搾り取れるだけ税を搾り取り、城に三つも新しい蔵を建て……酒毒に脳をやられていたという先代は、街中で美女を見つければその身の貴賤や年齢を問わずに城へと連れ込み、翌朝になって死体を街中に放り捨てていくという蛮行を繰り返していたらしい。

そういった事情を顔良さんが袁紹様に詳しく説明すると、意外な事に袁紹様は、

『きいいッ！ 何と醜悪な真似を！ 華麗であるべき私の街を荒ら

し、可愛らしい民たちを苦しめるなんて許せませんわ!』

と言う風に、歴代の太守の無能と悪行を批難し、民への憐憫の情を見せた。

贅沢大好き我儘娘ではあるが、どうやら他人の悪行やそれにより被害を被った者の事まで目に付かないほど愚かではないようだ。

他人の振り見て我が振り直せの精神はこの際置いておこう。

で、そういった初期の混乱から立ち直った袁紹様と家臣団は早速、?
の復興に向けて仕事を開始しようとしたのだが……全く捗らない。

原因は元から?にいた地方官吏たちが、袁家の面子に全く仕事を回さないのだ。

理由は二つ。

一つ目は、袁家が?や冀州という土地について全くの無知で、今仕事を回した所で碌な結果にならないと考えているから。

二つ目は、自分達の既得権益を侵されたくないから。

ちなみに、一つ目の理由を挙げて反抗しているのが沮授という名の皮と骨だけみたいな爺様とその一派で、二つ目の理由を胸に秘めてのらりくらりしているのが郭図とかいう肥満体のおっさんとその一派だ。

袁家家臣、沮授一派、郭図一派を人数で比べると、一、三、六となる。

うん、つまり、あれだ。

半分以上の官吏が腐ってるんだこは。

これでは例え沮授一派に袁紹様や俺達が認められても、実権を握ることは難しい。

実権を握る為に郭図一派を牢に放り込むのは簡単だが、明確な罪状やその証拠もなくそんな事をしでかしたら、袁家に難癖をつけたくてたまらない中央の宦官どもを喜ばせるだけ。

「よって我ら袁家家臣が今すべきことは、与えられた職務を忠実にこなして沮授一派に認められる事と、郭図一派に名を連ねている糞どもの粗探しなのだ!!」

「……と意気込む俺の職務は何でしょう？ はい、田豊君」

「書庫管理だろう」

「はい、正解。より正確に言うと、書庫管理を任されている沮授一派の中級官吏の部下その四くらいだね。ちなみにその一からその三は沮授一派の振りした郭図一派で、現在は中級官吏が休憩中なのを良い事にどっかで怠けてる。んで、書庫管理の主な仕事は書庫内の書物の整理や、それらの書物を資料として読みたがってる官吏達を目的の物が保管されている場所にまで案内する事及び、貸し出しや返却時にその旨を利用者と共に記録すること……以上！」

ざっと説明すると、田豊が驚きに眼を見開いていた。

「職務内容はともかく……同僚については……本当なのか？」

「隠れ郭図一派かどうか微妙だな。だが、まともな官吏じゃないのは確かだ。偉い人が書物を借りに来たり返しに来たりした時は、率先して我先にと動く癖に、中級以下の官吏に対しては貸出記録帳に記すまではやっても、実際に書物を片づけるのは俺に押し付けてくるし……一応規則では、記録帳に記した奴が戻さないと駄目なんだが……」

「規則違反だが、重罰に処すほどでもなく、下手に騒げば沮授一派との間に亀裂が生じる……か」

「そういうこと」

「……袁家の地位向上にまるで役に立ってない役職な上に、四方を敵に囲まれた君の不遇は良く分かった。分かったから早く昨年度の出兵記録が眠る場所に案内してくれ」

へいへい、と頷きながら、俺は田豊を五つほど並ぶ書庫の内、最も手前のその中へと案内し、奥から三番目の書棚まで連れて行った。

はあっ……鬱だ。

かつての同期の桜は今や、袁家筆頭武官文醜付き軍師とかいう大仰な肩書を持っているのに、俺は書庫の案内係。

何処で道を間違った？

「何処も何も、宦官嫌いで有名な袁紹様の髪型をかつての大宦官の孫である曹操殿のそれと同じに扱うどころか、その紛い物呼ばわりすれば道の一つや二つ簡単に逸れるさ。あの後、僕達が袁紹様を宥めるのにどれくらい苦労したと思ってんるんだ貴様は？」

「ですよね。でも、心の声を読むのは止めてくれ」

目的の書類を手に入れた田豊に貸出記録帳を差し出して、借りる書物と自分の名を記して貰い、俺も書庫管理として貸出記録をつける。そして忙しげに去りゆくその背中を見送った。

「さて、これでまた暇になったな……」

基本的に書庫管理は誰かが借りに来るか、返しに来るか、或いは新しい書物を納めに来るまで仕事が無いのだ。

え？ 書庫の資料を読んで、？についての知識を蓄えたらどうかって？

馬鹿言うんじゃないやありませんよ。

書庫管理の下っ端である俺にそんな権限なんてありません。

重要軍事機密とかになりうる領地の現状を記した書類を閲覧できるのは、それ相応の身分や地位にいる人だけです。

俺が読めるのはせいぜい、カビが生えた農学書や、云十年も前に何処ぞの誰かが詠んだ詩集とかだよ。

水鏡塾にあった図書室とは訳が違うんですよ、ここは。

自分の置かれた現状を再確認して凹んでいると、

ガッン！

と何かが頭に当たった。

「イタタタッ……何これ？ 竹簡？」

何故俺の頭部を竹簡が強打？

と疑問に思い、竹簡が飛んできたと思しき方向に目を向けると、何やらこちらを見てニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべている文官が四名。

内三名は書庫管理その一からその三だが、残る一人。中央にてふんぞり返ってでかい鼻穴をピクピク膨らませているデブは誰だ？

「おい、袁家の下っ端。それ、書庫に片づけておけよ！」

ええっ！？

何で俺が！？

お前の横にいる誰かにやらせろよ……。

と、心の中で抗議はしたが、一応職務ではあるので竹簡を手に取り書庫へと足を向けた瞬間、

ガッン！

後頭部に再び衝撃が走った。
コロンと床に落ちて転がる、竹簡。

「ついでにそれもな！」

仕方なく拾おうとして、

ガッン！

それも拾おうとして、

ガッン！

「くっくく……おいおい、大切な書簡を何で落とすんだよ！ 全く愚図過ぎるぞ！ これだから無能な袁家の姫様の家臣は使えないんだ！」

「ですよねえ、本当、あいつが来てから私達の仕事が全然捗らなくて困ってるんですよ」

「きっとお姫様へのゴマスリしか学んでこなかったんでしょう」

「とっとと汝南に帰ってしまえば良いのにねえ」

そう言い捨てると、四人はゲラゲラ笑いながら去って行った。

……あれか？

これはひょっとして、イジメというやつか？

いきなり？にやってきた袁家への幼稚な反抗心からの暴挙？

落ちつけ、落ちつけ俺。

ここであの糞どもに殴りかかった所で、返り討ちが関の山。

ならば、どうする……暴行されたと訴えた所で証拠は無い。
これでは袁紹様に縋っても、郭図一派の重鎮……もしくはその子息
と思しきあのデブを罰せられるとは思わない。

罰せられ無いどころか、むしろ俺が悪人として陥れられるのがオチだ。

何せ奴の周りを固めていたのは、表向き沮授一派の振りをしている連中である。となると、あいつらの嘘の報告を聞いた沮授一派まで『濡れ衣を着せてまで邪魔者を排除しようとする卑劣な袁家』の敵にまわりかねない。

むしろ、それが奴らの狙いだろう………本当にただの幼稚な嫌がらせだった可能性もあるが。

だが、許すわけにはいかない。

何故なら奴らは、愚弄したのだ。

我が主——袁本初様を。

「忠誠心から臣下の礼を取ったわけではない……だが『一度臣下の礼を取った以上、どのように扱われようとその御方に揺ぎ無き忠誠を捧げ、主の万難を排除する為ならばその身を喜んで贅とせよ。それが逢家の男児の生き様である』か……ふざけた家訓だと昔は笑ったが……親父の遺言くらいは守るさ」

必ず奴らに報いは受けさせる。

その為武器は経った今、手に入れた。

手の中の竹簡とそこに書かれた題名を目にして俺は一人、高らかに勝利の笑いを響かせる。

今の俺に、敗北の二文字は無い。

何故なら――

「俺は逢元図――他人の失敗に付け入らせたら天下一の極悪人なのだからな」

第四話 逢紀君仕事を始める（後書き）

書庫云々の設定はほぼ捏造です。

この世界ではそうなんだ、という気持ちで読んでください。

中級官吏は中間管理職、主人公は新入社員、田豊は役員の末席辺りと考えてください。……何でこんなに差が開いた？

あと、主人公の役職がヘボイのは、他の作品みたいに序盤からいきなり太守とかになって権力が大き過ぎるのはどうなんだろう？とか、作者が思ってるせいです。

第五話 田豊さん観察する（前書き）

ちよつとグダグダ？

第五話 田豊さん観察する

田豊side

僕が逢紀の異変に気付いたのは、昨年度の出兵記録を書庫に返しに行った時のことだった。

「ええ、仰るとおりです。優れた詩というのは蔵一杯の黄金に勝るとも劣らない価値があると私は愚考します」

「だろう！ そうだろう！ 古人の詠んだ詩は、下手な財宝より貴重だ。その事が分からぬ俗人が多過ぎるのだ今の世の中は！」

「まさしくその通りです！ どうでしょう、今度書庫にある幾つかの詩集を宝物庫に移すよう掛け合ってみては？」

「うむ。それも悪くないな。詩はもっと尊重されてしかるべきだ。

詩と同じ美術品である絵画も宝物庫に納められているのだ、無理な事ではあるまい。その時はぜひ君も同行してくれ」

「喜んでお供します」

「いやあ、それにしても驚いたな。袁家は奢侈にしか興味のない俗人の集まりだという悪評ばかりを耳にしていたが、君の様なしつかりとした文化人もいたとは」

「お褒めにあずかり光栄でございます」

……。

……。

……うん、最初この光景を目にした時は、疲れがたまって幻覚を見ているんだと思ったよ。ヤバイ、働き過ぎたってね。

だってあの逢紀が殊勝な態度で、書庫管理を任されている沮授派の

中級官吏と詩について歓談しているとか、現実により得るわけないじゃないか。

朝飯前に人を喰う。

詩を詠むくらいなら愚痴をこぼす。

そんなふざけた態度こそ、奴の本質であるはずだ。

でもまあ、現実になんという事態が起こったからこそ僕が思い悩む事になるわけなんだよね。

あの阿呆、今度は一体全体何を企んでいやがるのか？

次に逢紀の奇行を目撃したのは、その二日後の事だった。

どうにも奴はその日非番だったようなのだが、やたらと城内を歩きまわっていたのだ。

後で聞いた話では、何やら城内の全部署に差し入れの様な物を持って行っていたらしい。それはどうやら逢紀が荊州を旅立つ際に荷物に詰め込んだ保存食の乾物だったようである。差し入れを貰った各部署の官吏達からは派閥を問わず結構感謝されたようだ。

まあ、それも当然である。乾物は物によってはかなりの高級品だし、

飢饉の兆候が見えるせいで食料関係の物価が日々上昇の一途をたどっている現状では最高の贈り物だろう。

ただ、何故あいつがそんなご機嫌取りのような真似をしたのかがさっぱり分らない。

あれは他人のご機嫌より、自分の家の米櫃を気にする男だ。歡心を買う為だけに食糧をばら撒くはずが無い。

更にその六日後、またもや非番だったらしい逢紀を大通りに面した書店で見かけた。

僕は最新の軍学書が並んでいないか確認しに来ていたのだが、奴はどうにも古臭い詩や、カビの生えたような雑学書等が並ぶ一画を熱心に眺めていた。

時折、手にしていた竹簡に何やら書物の名前を書き記していたようだ。

書物の名を書き記し終えたら次は店主と会話を始め、店主に物凄く渋い顔をされていた。

長い話話し合った挙句、逢紀が店主の懐に何がしかの金をコソコソと入れた事によりようやく耳打ちをしてもらえ、目的の情報を聞き出せたようだ。

その後店を後にした逢紀の後を気になって尾行してみれば、彼は大通りの書店どころか裏通りにある盗品を扱っているんじゃないかと思える薄汚い店にまで顔を出して、最初の店と同じ行動を繰り返していた。

今度新たに書庫に納入する品の目録でも作っていたのだろうか？

とか私が首を捻っていると、今度は書店ではなく、宝飾品や骨董品といった奢侈品を扱う店にまで顔を出す始末。

贈り物か？

贈り物なのか！？

だ、誰に、何処の女に貢ぐ気だ！？

許さん！ 許さんぞそんな事は！！

目を覚ませ逢紀！ 君は女狐に騙されているんだ！！

顔良殿か！？ 文醜殿か！？ どちらにせよ僕以外に――ゲフンゲフンッ！！

……まあ、奢侈品に関する店では会話途中で顔を真っ青にした店主に追い出され、何も買えていなかったようだし良しとしよう。

書庫巡りの翌日、？周辺の兵站状況がここ数年どう推移してきたか調べる為に書庫に立ち寄ったら、そこには逢紀しかいなかった。

もしかすると、また他の連中は仕事を怠けているんだろうか？

残された逢紀は手にした書物を一心不乱に読みふけている。

いや、あれは読みふけているのではない。内容を見比べているのだ。手にした書庫目録と、机に置いた貸出記録帳、それと……昨日書店で彼が持っていた竹簡を。

僕が来た事に気付いた逢紀は特に慌てるでもなく———手にしていた物をそっと背後に隠す。

その事に不審を覚えたが、それ以上に僕の気を引いたのは彼の額に出来た小さなコブであった。書棚から落ちてきた竹簡がぶつかったのだと逢紀は言うが……まず嘘だろう。

僕にも秘密、か。

親友……あるいはもっと親密な関係であるといっても過言ではないこの僕に、隠し事。

何と腹立たしく、許し難い所業であろうか。

いつか相応の『報い』を受けさせてやる。

とか決意していたら、書庫管理と宝物庫管理の中級官吏が連れだつてやって来て、僕に軽く頭を下げた後、逢紀と密談を始めた。

「色街」とか「私の奢り」や「可愛い娘」といった聞き捨てならぬい単語が耳に入って来たが、心優しい僕はいつの日にか阿呆に受けさせるであろう『報い』を三倍にするだけで許してやることにした。

事件が起こったのは、その三日後の夕暮時であった。

僕が文醜殿の執務室で部屋の主と書類整理をしていると、城内に慌ただしい空気が満ち溢れ出したのを感じ取ったのだ。

これ幸いにと書類整理を放り出して、状況把握を免罪符に執務室の外へと飛び出す文醜殿。

それを追いかけた僕が目にしたのは、屈強な袁家の兵に拘束されて謁見の間に引きずり出された四人の官吏の姿であった。

その内三人は逢紀と同じ書庫管理の下級官吏、もう一人は確か郭図の右腕と目されている上級官吏で、審配とかいう名の肥満体の男である。

玉座に座る袁紹様に対し「無礼な!」とか「横暴な!」とか口汚く罵っている審配と、顔を蒼白にしながらおどおどしている下級官吏達。

共通しているのは、こういった目にあう身に覚えがあるという意識が表情の片隅に浮かんでいる事であろう。

それに対して、袁紹様はただ「お黙りなさい!」と一喝するだけ。

後は全て横に控えていた顔良殿任せ。

多分、これから何をするのか袁紹様ご本人は知らないんだろうな、という推測が普通に立つ辺り僕も袁家に馴染んできた証拠だろう。

任された顔良殿が述べたのは、書庫や宝物庫に納められているはずの品に関する横流しの嫌疑が彼らにかけられているというものであった。

謁見の間に集まっていた多くの上、中級官吏の間にどよめきが走る。

「証拠はあるのか！」

「そ、そうだ！ 証拠はどうした！」

それに対して顔良殿が挙げた証拠は、管理業務に携わる者が犯行に手を貸したのは間違いないという単なる状況証拠と、横流し品をそうと知らずに買い取ってしまったらしい店主たちの「面体を隠し、高貴な服を纏った肥満体の男から買った」という曖昧な証言だけだ。これでは彼らに罪ありと断じるのは難しい。

「皆騙されるな！ これは我々を排除せんとする袁家の策略だ！」
「皆で力を合わせてこのような横暴、撥ね退けようではないか！」

騒ぎ立てる四人に釣られて、周りの官吏達の袁紹様や僕達を見る目が険しくなり始めた時、彼らは現れた。

「静まれ！ 静まるんじゃ！」

「……」

沮授と郭図である。

両派閥の長の登場。

終わった。

袁家の負けだ。

これで四人は解放される。

そういった空気が流れる中、沮授と郭図は――

「袁紹様！　こたびのこの者どもの不始末、とても許せるものではございません！　嚴重に処罰いただけるよう何とぞお願い申し上げます！！」

——『頓首』という頭額をもって地を叩き、君主への直訴や、重い謝罪に用いる激しい礼とともに、四人の断罪を促したのだった。

袁家家臣、沮授一派、郭図一派全ての者がその光景を嘩然と見守る中、僕だけは謁見の間の入り口から顔を覗かせている『阿呆』^{ほうき}へと目を向けた。

……忍び笑いを漏らしている場合か、こら。

これが貴様の企みの結果だというのなら、どういう事かきっちり説明させてやるからな……いつぞやの『報い』を受けさせながら。

ブルリツと身を震わせ、辺りをきよろきよろと確認しだした逢紀^{えもの}を尻目に、私は心の中で暗い笑みを浮かべた……。

第五話 田豊さん観察する（後書き）

次回、逢紀君の自白タイム。

第六話 逢紀君捕まる（前書き）

視点変更によるテンションの落差に注意してください。

第六話 逢紀君捕まる

逢紀 side

あの憎き悪徳役人四人の首が城門前に晒されたのは実に痛快だった。

斬首と聞けば厳罰過ぎないかと思う者もいるだろう。

だが、俺からすれば、今なお飢えの恐怖にさらされている民たちを慮りもっと惨めな死を与えても良かったのではないかと思う。

何せあの後行われた袁家、沮授一派、郭図一派による合同調査の結果、彼らが横流しで得た金銭の総計が、？近辺に散在する幾つかの村々が一冬飢えず、凍えずに済むほどの額だったと判明したのだ。

そういう調査結果が出た以上、奴らを庇おうとする者は無くむしろ積極的に厳罰を求めてきた。

中には罪人の一族郎党全てを斬首とか物騒な事を口走っていた奴もいたが、流石にそこまでは……という事で一族郎党に関しては全私財没収の上で追放という事に落ちついたのだが……ある意味これ斬首より酷くね？

このご時世、無一文で放り出された奴らの末路何て『悲惨』の二文字ですよ。

判決を受けた本人達だけは最後まで罪を全否定、あるいは一部認めて残りは否定といった事をしていたが、庇う者が誰もいなかった以上それは無駄なあがきである。

そして、判決が出たその日の内に罪人の首はあっさり落とされ、一件落着。

袁紹様を馬鹿にした奴らに報いを受けさせるべくここ数日奔走してきた俺の努力はこうして実った。

そう、見事に実った。

実ったのだが――

「なあなあ、田豊？」

「なんだい逢紀？」

「……何故に俺は簀巻きにされているのかな？」

「それはね、君が逃げ出さないようにするためだよ」

「……何故に俺は謁見の間でお前や袁紹様、顔良さん、文醜さんに囲まれているのかな？」

「それはね、今回の事件のあらましを、君に拷問を加え――っと間違えた、尋問して聞き出す為だよ」

「……何故に顔良さんは俺に向けてドデカイ戦鎚を振りかぶっているのかな？」

恐る恐る尋ねた問いに対する田豊の答えは、

「それはね……………プチッ……………という事さ」

柔らかかつ爽やかな笑みとともに発せられた。

プチッ？

…………え、やだ、何それコワイ。

プチッてどういうこと？

何されんの？

何しちゃったらプチッされるの俺？

助けを求めるように、視線を走らせるが——うん、駄目だ。

四面楚歌だ。

戦鎚を構える顔良さんは控えめな美貌を申し訳なさげに歪めつつも構えを解かない。

文醜さんは「なあなああ斗詩ィーこれが終わったら一緒に飯食いに行こうぜー」何て感じで、俺の運命の行きつく先には寸毫の興味もなさそう。

袁紹様に至っては……多分これから何が行われるのか、何故自分がここに呼ばれたのかすら分かっていないっぽい。しきりに面倒くさげにため息ついている。俺を助けるどころか、さっさと終わらせて欲しいような空気を「田豊さん、私忙しんですの、とっとと終わらせなさい」あ、言葉にして言っちゃったよ、この人。泣くぞ俺。

「畏まりました袁紹様。では、早速」

袁紹様に向かって優雅に一礼した田豊が、ポンと俺の方に手を置いて……告げる。

「さあ、逢紀……………プチッされなくなったら、洗いざらい全部吐け」

速攻で頷き、土下座して全てゲロリしましたが……………何か？

誇り？ 矜持？ 男としての威厳？

何それ？ 喰えんの？

『顔良殿、昨日の四人の官吏による横流しの一件、事件が発覚するに至るまでの絵図を裏で描いていた者がおります』

私の執務室でそう田豊さんが唐突に告げてきた時、私の胸には、

――やっぱり。

という思いがあった。

有能な文官や軍師に比べるとあまり察しが良くないと言われる私にだって、あの事件の経緯があまりに不自然で私達袁家に都合よく事が運びすぎだったのは分かった。

だから田豊さんに黒幕の存在の有無を教えられた際には、特に疑うことなく信じられたけど……容易に信じられなかったのは、その黒幕の正体だった。

『……逢紀さん、ですか？』

『ええ、間違いありません。あの阿呆です』

逢紀さん。

田豊さんと同じ水鏡塾の元塾生で、水鏡先生の推挙で田豊さんと一緒に袁家に仕官してきた文官。

でも、正直言って彼が今回の黒幕だというのは田豊さんの勘違いじゃないかな？

逢紀さんは確かに文官としてそれなりに優秀そうではあったけど、

特別にこれと言って光る物があつたわけじゃないし……むしろ外見、仕事ぶりともに地味だ。

水鏡塾での成績も平凡極まりなく、水鏡先生直々の推挙がなければ、袁家が彼を雇う事は無かつただろう。

洛陽から？にかけての旅程に関する助言を求めた際に重要な駄目だしはしてくれたが……やってくれたのはあくまで駄目だしと理由説明だけ。一番面倒だった計画の練り直しに関しては全て田豊さん任せという怠けっぷり。

おまけに麗羽様の機嫌をそこねるような発言を出会い頭にしてしまう粗忽者で、田豊さんという存在がありながら見目麗しい異性に鼻の下をあっさり伸ばしてしまうだらしない人。

そんな彼が？全体を震撼させたあの大事件を引き起こしたとは到底思えない。

そうはつきりと田豊さんに言ってみたが、

『審問会を開けばすぐに分かります』

と言いつ返された。

それで仕方なく麗羽様や文ちゃんも呼んで、簡単な審問会を開く事となり、

『顔良殿は戦鎚を構えていてください。それだけで、奴は自白します』

という要請に従ってみた結果が――

「さあ、逢紀……………プチッされなくなったら、洗いざらい全部吐け」

「すみませんでしたああああああっ！ 全部自分がやりました命だけは、プチッだけは勘弁してください！！」

——これだ。

簀巻き状態のまま土下座してひたすら謝る逢紀さんに、私や麗羽様、文ちゃんの三人は呆氣にとられてしまった。

唯一こうなる事を予想していたらしい田豊さんは「うんうん、人間正直が一番だ」とか呟きながら満足げに頷き、土下座したままの逢紀さんから事の詳細を次々に吐き出させていく。

「いやねえ、あの審配とかいうデブをぶっ殺そうと決意した時、奴が書庫に返しにきた竹簡を見て疑問に思っただんですよ、はい」

「ふむ、疑問？」

「何であのデブ、何処の誰が詠んだとも知れない無名な詩を借りてたんだらうって」

かつて宦官の中では珍しくまでも有能だった蔡倫による製紙技術の改良により、現在の漢では重要な書物は大抵紙で出来た『本』として纏められている。

有名な詩人が詠んだ詩も、大抵は本として纏められている。

だから、竹簡に書かれている詩というのは……大昔に書かれた歴史的価値のある作品……もしくは書いた本人すら紙を使うのはもったいないと思う程度の『へボイ』作品という事……だよな？

でも、それがどうしたんだらう？

「書庫管理に回されて気付いたんだけどさ、やっぱり読む書には人

の個性が出るんだわ。田豊なら軍学や？の軍備に関する資料。顔良さんなら治安維持や恋愛関係のあ、ちょ、やめ、プチッしないで！」

ハッ！ 私ったらつい……。

「……で、袁紹様は人心掌握や美容、美術、宝石、貴金属関係、文醜さんは武術に食い物」

「なるほどな。つまりお前には審配デブが詩を嗜む人間には見えず、それを借りていたという事に不審を覚えたという事か」

「その通り」

ああ、なるほど。

確かにあの人には似合わないよね。

私がそう納得している間にも話は進む。

「デブが似合いもしない詩を借りていくのは何故かを考えた時、自然と小悪党の犯罪の定番である横流しが頭に浮かんでな」

歴史的価値のある書は言うに及ばず、貴重な紙で出来た最近の書も本屋に売ればそれなりの値段になる。

小悪党の小遣い稼ぎにはぴったりかもしれない。

「とりあえず貸出記録帳調べたら、その竹簡の貸し出し記録は一切なし」

「証拠として残るのを恐れて書かなかったという事か」

「そうだろうね。下っ端その一から三の協力があれば、貸出記録を残さない貸出も可能だし、横流ししてもすぐにはばれない——ここ数年だれも読もうとしない書の判別も楽だったろうよ。ただ、今回だけは記録が無い事が裏目に出た」

「貸し出された記録が無い竹簡の返却は、君の疑念を更に強めてしまったか」

「強めたどころか、確信したさ。だから、後はどうやって証拠を集めて奴を追い詰めるのかに腐心したんだよ」

そう言った逢紀さんがふっと口だけで嗤う。

ちよつと驚いた。

普段は人畜無害そうなこの人でもこういった表情をするんだと。

そして気付く。

いつの間にか謁見の間に満ちる空気が変わっている事に。

さっきまでは審問会だ何だと言っても和気藹々としたものだったのに、今は何だか胸に圧迫感すら覚えそうだ。

私の横で詰まらなそうな表情をしていた文ちゃんも、首を捻りながら眉をしかめている。

麗羽様は……流石というか……えっと……お変わりない。

そんな中、逢紀さんと田豊さんは実に楽しそうに会話を続ける。

「やってやる！ やってやるぞ！ ……」と意気込んだは良いけど、

よく考えたら俺デブの名前すら知らなくてさ、仕方なく城内の全部署総当たりしてようやく調べがついたんだよ」

「……差し入れはそれを不自然に思わせないためか」

「うん。おかげであのデブ何ら俺を疑うことなく『はっはっはっ、ようやく世の中の仕組みを理解できたようだな！ ま、俺に気に入られたかったら今後も尽くせよ』とか盛大に勘違いしてくれたよ。まあついでに各部署にどれだけ、沮授一派や郭図一派が配属されるのか知リたかったし、あと一つ確認しておきたいことがあったんだよね」

「ほう、何だいそれは？」

逢紀さんはしかし意味深に肩をすくめるだけで、それには答えなかった。

「後は街の書店を片っ端からあたって、横流しされたツぽい中古本を見つけては竹簡にその題名記入して、店主にその本を誰が売りに来たのかを尋ねる。大体口を濁されたけど、金を幾らか掴ませたら半分以上は教えてくれたよ『顔を隠したデブ』だったって」

「竹簡に記した横流し候補と書庫の目録、貸出記録帳を比べた後、実際に書庫に確認に入り横流しされた本がどれくらいあるのか調べたのか」

「あ、やっぱりあん時何見てたのかバレてたか……まあ、そうやって何日もかけて地道に調べた結果、俺の適当なやり方でもかなりの数の本が書庫から消えている事を確認出来たんだよ。最初から人海戦術で書庫を調べれたら楽だったんだけどな……俺にそんな権限なかったし……面倒だった」

権限が無い。

そう、私の目の前にいるのは、仕官したての下級官吏。

なのに、今私は彼とその相棒が醸し出す雰囲気呑まれ、言葉を失っている。

「まあ、横流しの確認が取れたら後は簡単さ。その一からその三に『アニキ、アニキ、今日も審配様と可愛い娘に会いに行くんですかい？　良いな、良いな羨ましいな』とか言いつつ上手く取り入って奴らがデブと色街とかに繰り出す予定とかを聞き出して、それと上手く出会っちゃうように、あらかじめ仲良くなっていた沮授一派の上司を色街へと誘う」

「……沮授一派に属しているはずの自分の部下と郭図一派の重鎮が一緒にいる所を『偶然』目撃してしまった君の上司は、彼らが裏切ったか元々敵側だったのでは疑う。ふふっ……その翌日にでも君が上司の前で、書庫から幾つかの本が消えている事に首を捻りでもしたら大変だね。『もしかして……』の思いと共に上司は自分で書庫を調べて顔面蒼白、その後こっそり沮授一派の人員を動かして詳しく街の書店などにも調査を行う……その結果があのだ夕暮れの騒ぎという事か。道理で謁見の間に現れた沮授殿があっさり連中の罪を認めたわけだ」

あの事件にはそういう背景があったのかと私が一人慄いていると、クイクイと文ちゃんが私の袖を引っ張って来た。

どうにも困った表情をしている。
どうしたんだろう？

「なあ、斗詩。アタイ馬鹿だから良く分かんないんだけどさ。逢紀

が自分で調べ終わった時にアタイらにそれを知らせてくれりゃあそれで良かったんじゃないのか？」

「……うん、それでも罪は立証できるかもしれないよ文ちゃん。でもね、それだときつと沮授さん達は自分達の仲間だと信じている書庫の三人を庇う為に、最後まで抵抗してたと思う。だって、誰だって信じたくないもん仲間に裏切り者がいただなんて。それも、昨日今日来たばかりの新参者に指摘されて初めてそれに気付いた何て事、絶対に認めたくなんかないはずだよ」

「そっか、だから逢紀は沮授爺さん達になるべく自然な形でそれに気付かせて、自分達の手で調査をさせて罪を認めさせやすくしたのか」

うんうんと頷く文ちゃん。

すると、いつの間にか簀巻き状態から脱した逢紀さんが、文ちゃんに拍手を送っていた。

「正解ですよ、御二方。あの爺さんには『生真面目』という『欠点』があったので手を焼きましたよ。下手に触るとものすごい反発を食らうその欠点を、今回は逆に利用して自分達の手で膿を出させたんですけど……疲れました」

『生真面目』かあ、私もたまに言われるなあ。

でも、私の場合は麗羽様や文ちゃんがあまりに不真面目過ぎるから余計にそう見えているだけだと思う……。

「ん？ あれ？ でもさあ逢紀」

「何ですか、文醜さん？」

「沮授爺さんが奴らの罪を認めた理由は分かったけど、郭図のおっさんは何であっさり認めたんだ？」

文ちゃんは普段抜けている分、たまにこうやって鋭い所がある。私と文ちゃんの疑問に満ちた視線に逢紀さんが苦笑する。

「最初、あの謁見の間で挙げられた罪状に対する証拠の内、横流し品を買い取った店主達の証言を覚えていますか？」

「証言ですか……えっと、確か『肥満体の男から買い取った』……でしたっけ？」

「はい、ではこの？の街で『肥満体の男』と言われて誰を真っ先に思い浮かべますか？」

「……あ！」

『肥満体の男』で真っ先に思い浮かぶのは、審配さんではなく郭図さんだ！

どちらも肥満体ではあるが、派閥の顔と、その右腕では知名度も重要度も違う。

特に郭図さんは政敵である沮授さんがガリガリに痩せているせいもあって、余計に太いという印象が強い。

「このご時勢、あんなにぶくぶく太れる人間は権力持った悪徳官吏か、金を持った大商人だけでしょう。商人の方は？の食糧や経済事情のせいかせいぜい恰幅が良いと評するくらいのが二、三人いるだけ。悪徳官吏だってたかが地方官吏じゃあそう多くありません。城

内の全部署見回っても、あそこまでひどい肥満体は奴らだけでしたよ」

「じゃあ『肥満体の男』という条件に当てはまる郭図さんは、下手に審配さんを庇えば自分にも横流しの容疑がかかると……むしろ、自分こそが真犯人だと誤解されるのを恐れて」

「証拠が胡散臭かろうが、審配を犯人として断じることにより、確実な保身を図ったわけです。ようするに、蜥蜴の尻尾切りです」

「うへえ、やな話。でもよ、悪党同士最後まで庇い合う可能性もあったんじゃないの？」

舌を出してうんざりしている文ちゃんに、逢紀さんははっきりと首を横に振った。

「ありません」

「それは……彼らが物欲という弱い絆でしか結ばれてなかったからですか？」

「それもあります。ですが、もっと重要な事があります」

「重要な事？」

「はい。彼らにはもはや自分達が不法に得た財産や特権を保証してくれる庇護者がいなかった事です」

彼らの庇護者……そうか！ 歴代の悪徳太守だ！

「彼らがどれだけ悪事を重ねようと罷免されなかったのは、歴代の悪徳太守に利益の幾らかを供与することでその地位を確約して貰っていたからです」

悪徳地方官吏は悪徳地方太守に、悪徳地方太守は悪徳刺史に、悪徳刺史は悪徳宦官（宦官は宦官で良いかも？）に貢物をする事で、その悪行を許されてきた。

だが、今度この？に太守として赴任してきた麗羽様は、今までの悪徳太守とは違い地方官吏からのお目こぼし願いなど聞き入れる筈もない。

本人の太守としての有無は能力はともかく『？を袁家の力で華麗に立て直す』という志だけは本物なのだから。

「自らの庇護者がいなくなった事を理解して悪事を自重し、過去のそれらの隠蔽に奔走していた郭図からすれば、庇護者がいなくなった事を理解せずに従来通りの悪事を重ね私腹^{デブ}を肥やそうとする審配は相当目障りだったでしょうね」

確かに邪魔だろう。

自分を巻き込みかねない悪事を平然とやる人間なんか消えてくれた方が都合が良い。

まして、実際に審配さんは小者臭い失敗を幾つか重ねている。

顔だけ隠して肥満隠さず（隠せるものでもないが）、書店に売りに行くとか……せめて誰か人を使おうとは思わなかったのかなあ？

それに店で買い取ってもらえなかったと思しき詩の書かれた竹簡など、何処かで処分してしまえば良いのにわざわざ戻しに来た挙句、袁家の下っ端を虐める為に返却を押し付けてその結果悪事が明るみ

に出るとか小者過ぎる。

最後には、せっかく敵側に潜り込ませていた人間と平然と人目に付く場所に行き、それを目撃される。

悪事を行う事に慣れきっていて油断があったのか……悪事を自分の手で直接行う事に酔っていたのか……他人など信用できないと思っていたのか……元々そういう失敗にすら気付けない無能だったのか……或いはその全部か。

「デブの『欠点』は明白で、そこを突くのは楽でしたよ。ご自慢の身体以上に肥大化した自尊心からくるあり得ないほどの『楽観的思考』……自分は世界に愛されていて、失敗や挫折などありはしないとでも考えてたんですかね？ 自分の足元があっさり掬われるとは思ってもなかったようで隙だらけでした」

さあ、他に疑問はございますか？

と私達に講師然とした態度を取る逢紀さんに、その横であきれる田豊さん。

文ちゃんがノリノリの態度で「はい、逢紀先生！」と手を挙げる。

「今までの話にあの四人のもう一つの罪状、宝物庫からの横流しが全く触れられていないんですけど、そこんところはどうなんですか？」

本当に文ちゃんは、妙な所での確な質問をする。

……そこに疑問を抱いていなかった私が馬鹿なわけじゃないよね？
よね？

「良い質問です、文醜さん。花丸を上げましょう。宝物庫の横流し
に関してですが、あれは――」

逢紀さんは、太陽のように朗らかな笑みを浮かべていった。

「――完全な濡れ衣です♪」

「「へ？」」

間拔けな声が私と文ちゃんの口から洩れた。

ぬ、濡れ衣？

で、でも、そうだとすると犯人は誰なんだろう？

審配さん達は横流しした品の総額があまりに多かった為に斬首になったけど、その大半は宝物庫関連の品だ。

つまり、本当に死罪に値する罪を犯した人物が何処かにいるはず。

「彼らは宝物庫の品には一切手を出していません。彼らに宝物庫を自由にする権限はありませんでしたから、当然ですね。街の奢侈品取扱店でも、宝物庫から流れたらしき品は一切見つかりませんでしたし、店主達に『デブが何か売りに来なかった?』と尋ねても顔を真っ青にして追い出されるだけで、何も聞き出せませんでした」

「じゃ、じゃあ何で審配さん達にそんな嫌疑が……」

「……『誰か』が知り合ったばかりの宝物庫管理の責任者にお宅は大丈夫でしたか? と尋ねた結果、幾つかの宝物の消失に気付いた責任者が、これもあいつらの仕業に違いないと誤解し……憶測で嫌疑をかけることくらいあるかもしれませんね」

「誤解と憶測で……」

「はい。それに加えて、宝物庫の横流ししていた真犯人が、これは調度良い。自分の罪をこいつらにひっ被せてしまえと画策し、証拠の幾つかをでっち上げるかもしれません」

「でっち上げ……で、でっ、その真犯人は誰なんですか!？」

「いや、斗詩、落ち着け。この流れで言ったらどう考えても犯人は郭図のおっさんじゃん」

「……え、あれ、嘘……私ひよっとして文ちゃんに先に犯人当てられた?」

逢紀さんが「良く出来ました」って拍手してるし……私ひよっとし

て文ちゃんより頭悪い？

う、うわあああっん！

「何やら顔良さんがイジケ始めましたが……まず間違いなく、宝物庫に関しては郭図でしょうね。宝物庫管理の下級官吏を抱き込める器量と権力、横流しした証拠となる宝物を？にとどまらせないよう指示する程度の気配りや、売り払った店主達にしっかりと口外無用と脅しをかけておく慎重さはデブにはありませんでしたし」

「でもよお。だったら郭図のおっさんはどうするんだよ？ 無罪放免でほったらかしか？」

「いえいえ、しっかりと裁かせてもらいますよ」

「ん？ 証拠は無いんだろ」

「はい『横流し』の証拠はありません……ですが」

いじける私を無視して続けられていた会話が途切れ、逢紀さんが口元を手で隠す。

でも、隠しきれてない。

明らかに……八重歯を覗かせ嬉しそうに笑ってる。

「無実の者に濡れ衣を着せるべく証拠をでっち上げた——『讒言』を行った罪と証拠なら今すぐにでも、揃えて見せましょう！！」

そう豪語した逢紀さんは突然その場に膝をつき、麗羽様に見事な拝礼をして見せた。

「袁紹様、この逢元図、伏してお願い申し上げます！　どうかこの私に、今回の一件を調査し、裁く為の役職と権限をお与え下さい！　必ずや、御志におんこころざし適う結果を出して見せます！！」

逢紀さんの直接心臓を揺さぶられるかのような激しい嘆願に、袁紹様は腕組をしたまま答えない。

たぶん今までの話の流れは理解しているとは思う。

うん、本当に多分、ぎりぎりの線で。

でも、そこからどう最適な答えを出せばいいのかは……分かっていないようだ。

私だってそんなの分からない――

「斗詩さん、貴女はどう思います？　私はこの地味で冴えない男の願いを聞くべきですか？　それとも無視すべきですか？」

――いのに、そんなこと聞かれても。

困って文ちゃんに助けを求める視線を送っても、あっさり逸らされ、田豊さんは君の好きにしろ的な曖昧な表情を浮かべるだけ。

当の本人である逢紀さんは、拝礼したままピクリともその姿勢を揺るがさない。

本当に、どうしよう？

逢紀さんは多分田豊さんが言ってた通り、能力的には凄くて、それなりの役職に就かせても十分結果を出すと思う。

でも、人間性はどうかろう？

大きな権力を与えても大丈夫だろうか？

それを悪用して、とんでもないことを仕出かさないだろうか？

しかし、今みたいに小さな権力しかなくても彼はきつとまた無茶をする。

だったらいつその事好きにさせる方が、効率が良いような……。

うううっ、難し過ぎるよう。

「斗詩さん？ 貴女は先ほどから何処で悩んでいますの？」

「ですから、麗羽様。逢紀さんが権力を貰った途端悪い事を仕出かして麗羽様に迷惑をかけないか、私には自信が無くて……」

「はあっ？ まったく貴女という人は、私が聞いているのはこの男の願いを聞くべきかどうかであって、この男の私に対する忠誠心や道徳心ではありませんわ」

「へ……？」

つい呆けた声を出す私を尻目に、麗羽様はビシリと逢紀さんを指差す。

「このように見事な拝礼を取る者に、貴女は二心があるの？ それより、何より、この袁本初が己の臣下に容易く裏切られるような無様な者に見えますの！？」

普段の奇行を鑑みれば、見える、と言いきっても問題ない。

でも。

いま、こうやって、

気高く胸を反らす袁紹様には、

確かな『気品』と『威』があって、

だから、

私は――

「麗羽様、この者にどうか相応しき役職と権限をお与えください」

田豊side

「ならば宜しいですわ。逢元凶！冀州魏郡太守であり？の城主たるこの袁本初が貴方に『魏郡監査』としての役職と、それに伴う諸々の権限を授けますわ！！この一件だけでなく、魏郡全ての官吏

の不正を徹底的に洗い出し、華麗なる袁家の支配する地に相応しくない愚劣で醜悪な者どもに相応しい報いを与えて見せなさい!!」

「御意!!」

「田元皓!」

「はっ!!」

「魏郡監査を補佐し、一刻も早くこの地を華麗に復興させなさい!」

「御意!!」

「……宜しい、ではこれにて審問会を終了いたしますわよ」

「」「はっ!!」「」

……あれ? 何だろうこの暑苦しいノリは?

僕の当初の予定では、阿呆^{ほうき}を適当にいじめて終わるはずだったのに。

……どうしてこうなった？

まあ、良いか。

謁見の間を退席した僕と逢紀は、人気のない廊下で一旦足を止める。

「逢紀……この展開も君の計算通りか？」

「いや、流石にここまで……せいぜい、お褒めの言葉とかもらえたら良いなと思ってた。郭図を潰してやる宣言は、完全にその場の勢いに背中押されちゃった、テヘリ」

「まあ、そんなところだろうとは思ったが、どうせ、郭図は潰すつもりだったのであろう？」

「勿論、でなきゃあわざわ奴が『讒言』を行うように仕向けたりなんかしないさ。奴を裁く権力を俺が手に入れるのが遅いか早いかなだけの差さ」

「だったら問題ないな」

「ああ、問題ない」

そう言って二人で顔を見合わせ、ニタリと邪な笑みを浮かべ合う。

「田豊、郭図は二つの『間違い』を犯したよ」

「へえ、君の前で二つも間違いを犯すなんて、自殺行為だねえ」

「一つは、『蜥蜴の尻尾切り』のつもりで仮にも自分の右腕だった男切り捨てた事だ。つまり、奴はあくまで蜥蜴ではなく人間、切り落としたのが尻尾ではなく右腕なら……じゅうぶん致命傷になりかねない傷さ」

「次に切り捨てられるのは自分じゃないかと疑い始めた小心者が、奴の悪事に関する情報片手に派閥替えを試みるか……出血死の可能性大だね」

「ああ、そして、二つ目は」

「二つ目は？」

僕の問いに、逢紀が珍しく……本当に珍しく、混じり気のない幸せそうな笑みを浮かべて、言った。

「……『俺達袁家』の実力を低く見誤り、尻尾切りで満足しただろうと愚かで甘い幻想を抱いた事さ」

『俺達袁家』か。

悪くない。

うん、悪くないな。

謁見の間で見せた袁紹様の小さな、それでいてはつきりとした『王器』を思い出しながら、僕と逢紀は再び廊下を歩き始めた。

――その日からおよそ半年の間、？の城門前には絶えず新しい首が並べたてられ、その中にはぶよぶよと醜く膨れ上がった物もあったという。

第六話 逢紀君捕まる（後書き）

……どうしてこうなった？

逢紀君のテンションがやたら高い。

袁紹様が何か名君っぽい。

監査に関する格好いい役職名が思い浮かばなかった。

第七話 逢紀君部下を得る

逢紀side

ふふふゝんふふゝん楽しいな♪

わゝるゝい官吏の首チョンパ♪

うゝなれ必殺伝家の宝刀ゝ私財没収!!

「いや、逢紀、君は何朝っぱらから物騒な歌を歌ってるんだい？」

「お？ 何だ田豊かおはよう」

「ああ、おはよう。で、何でそんなにご機嫌なのかな？」

「んふふ、俺達が今どこにいるのか分からんか？」

「……君の執務室だろう？」

そう！

その通り！

俺の……俺だけの執務室！

俺だけの執務机、俺だけの本棚、俺だけのええっと、そう、観葉植物！

「いやさあ、文官としては自分の執務室を持つの一つの憧れじゃん」

「まあ、そうだね。武官でいえば將軍と呼ばれるのとおなじくらいかな？」

半年もの長きにわたり外道どもを各地から一掃し続けたご褒美として与えられたこの執務室。広さこそは上級官吏達のそれには及ばな

いが、中級官吏が持つにしては立派な部類だ。

そもそもたかが中級官吏は程度では、個人の執務室など持てない。

ああ、ちなみに今の俺の役職は『魏郡監察吏』という。

前の『魏郡監査』というのは袁紹様が割と勢いで適当に名付けただけだったらしいので、顔良さんが仕事内容に沿うちゃんとした名前に変えてくれた。

扱いとしては中級官吏で朝議の類にも要請が無ければ参加できないが、直属の上司は太守である袁紹様ということになるので、袁家筆頭武官の文醜さんや次席武官の顔良さんでさえ俺には命令できないのだ。無論田豊や筆頭文官の沮授でさえも不可能。えっへん。

あ、沮授の爺と袁家はしつかり和解しましたよ。

腐れ官吏を容赦なく処刑する俺達の果断極まりない姿を見て、俺達が？を良くしようとする気概を感じ取ってくれたらしい。

どちらかというと俺も田豊も文官としては軍事畑よりなので、内政や外交面に強いあの爺の存在は大助かりである。
ただ……。

「沮授の爺の趣味はどうにかならんのか……」

「ああ、お見合い設定か。まさか君も？」

田豊、お前もか。

「今月に入ってもう三人も紹介されたぞ……全部断ったけど」

「僕なんかこの五日で八人だ」

あ、何か負けた。

く、悔しくなんてないんだからね！

数など問題ない！ 量より質だよ、質！

「俺は結構綺麗系を紹介されてるけど、お前はどよう？ 可愛い系？」

「ん？ 可愛い系というより……筋肉質な野生系だな。まあ、如何にも武官らしい武官達だった」

よし、勝った！

田豊の表情から察するにこいつが紹介された武官の女性達は、腕力あっても何処か清楚で女性的な魅力に富んだ顔良さんとかとは違い、明らかな脳筋山猿女だ。

「ぼ、僕のお見合いがそんなに気になるのかい、逢紀？」

「ああ、すつごく気になるさ」

男としての勝敗的にな。

「そ、そうか、うん、気になるか。だが安心してくれ、僕は――」

『逢紀さん、いらっしゃいますか？』

お、顔良さんだ。

「はいはい、貴女の逢元図はここにいますよ」

入室を許可したらすぐに、扉が開き、金ぴか鎧の顔良さんが入って来た。

ただ、何だか物凄く申し訳なさそうな顔を田豊に向けている。

「あゝお取り込み中でしたか？」

「……………いや、構いませんよ。どうやら大切なお話のようですし、僕はこれで失礼させてもらいましょう」

そう言つて、田豊は足早に去って行つた。

顔良さんが「あうゝ悪いことしちゃったな」と頭を抱えているがどうしたんだろう？

まあ、良いか。

せっかく田豊が気をきかせて俺と顔良さんを『個室』で『二人きり』にしてくれたんだ。この絶好の機会を逃す手は無い。

「お茶でも淹れましょうか？」

「あ、結構です。話はすぐすみめますから」

「まあまあ、そう仰らず」

「いえ、本当にすぐすみめますし、私この後沮授さんの所にも行かないやいけませんし」

おのれ爺、お見合いを押し付けるだけでは飽き足らず、ここでも俺の邪魔をするか。

「でも、少しくらい時間取れませんか？」

「……はあっ……少しだけでしたら」

「よっしゃあああつ！　じゃあ今すぐお茶淹れてきますね！　この間私財没収喰らわせた外道が所持していた催淫効果のある――あ、そうじゃなくて、こうほど良く体温を高めるお茶……を……」

何処からともなく戦鎚を取り出した顔良さんが、ブンブンと素振りをし始めました。

成人男性の股ぐらを下からガツと振り抜く感じで。

慈悲なき死神の如き目が言ってますね。

それ以上口を開けば『プチッ』するぞって。

え？ 俺の返答？

そんなの決まってるじゃないですか。

たかが婦女子に脅されたくらいでこの逢元図、自分の信念をそうそう曲げたりしませんよ。

徹底抗戦です！

「じゃあ、本題に入りますから土下座を止めて顔をあげてください」
「了解であります、顔良様！」

……信念は曲がらなくても、腰とか膝とかは結構簡単に曲がるんだよね。テヘ。

「じゃあ私は例の子を、沮授さんの所から連れてきますね」

「ええ、お願いします」

「結構気難しい子ですから、あんまり変な事しないでくださいね」

「はっはっは、天下に名高き紳士の一人たるこの俺が、いつ変な事などしました？」

最後の質問は曖昧な笑みと共に無視されちゃった。

多分、具体的に俺がやらかした変な事を思いつかなかったんだろう。それも当然、だって俺は真面目が取り柄の常識人だから。

「……それにしても……俺にもとうとう部下が出来るのか。感慨深いもんだねえ」

監察吏として俺は結構な数の人間を動かせる。

文官武官を問わず、捜査協力は依頼できるし、警吏を最大五十人まで自分の指揮下に置くことを許されている。

だがしかし、彼らはあくまで監察吏として俺が持つ権力に一時的に従っているだけであり、俺の直属の部下というわけではない。事が終われば元の部署に戻さねばならないのだ。

「でも……今回の急な人事異動は何なんだろうね？」

今回俺の部下にと回されてくる少女は最近袁家に仕官してきたばかりなのだが、何でも大層気難しいらしく、今まで回って来た部署では必ずと言っていいほど周囲の人間との間に問題を起こし、その都度の部署に回されてきた問題児らしい。

そんな奴とつと首にしてしまえと俺は思うのだが、顔良さんいわく性格に問題はあっても文官としての能力は『超』が付くほど有能で、手放すには惜しい人材とのことだ。

「まあ、あの沮授の爺の知り合いからの推挙らしいし、能力は確かなんだろうが……何故にこの時期、俺の部下なんだ？」

袁紹様が治める魏郡の掃除はついこの間完了した。

俺が本気で他人の粗探しを始めたらまあこんなもんさって自慢できるくらい、一気に官吏達の不正を暴いて処断してやったのでもはやこの魏郡に私腹を肥やすだけの豚はいない。

しかし、狩るべき豚がいなくなったせいでこの数日、暇で暇で仕方が無く手持無沙汰な時間が多い。

だから、わざわざ俺に部下をつける必要は無いんだが……？

「……面倒事押し付けられた？」

いやいや、まさか、そんなわけ……ないよね？

「きつとあれだ、前に田豊が言ってた州牧とかいう奴に袁紹様が選ばれて、支配地域が一気に広がるからとかそういうことだ」

断じてここが問題児の掃き溜め扱いされているわけではない！

「……まあ、どんな理由であれ、俺にとっては初めての部下だ。大事にしてやろう」

顔良さんの話ではまだ幼さが抜け切れていないらしく、その幼さからくる性に対する潔癖な考えや歪んだ知識とかが問題となり、周囲の大人達と反発しあうことが多いとのこと。

そこら辺をきっちり俺が理解して歩み寄ることが出来れば、きっと良好な関係を築けるはずだ。

同じ職場で毎日顔を突き合わせることになるんだし、まかり間違っても険悪な仲にはなりたくない。

ブルッ！

ん。いかん。尿意が。

でもそろそろ、顔良さんが例の部下を連れてくるはずだし……。

ブルブルッ！

い、いや、ここは尿意を優先すべきだな。

初めて会ったばかりの部下の前で「ちょっと厠に」とか言いたくない。

彼女らが来る前に、さっさと行って、さっと済ませて来よう。

なあに、走れば物の数秒で厠だ。

何の問題もない。

——そう思ってた時期が、俺にもありました。

——走って飛び出した廊下の曲がり角で、ゴツツンコ。

――仰向けに倒れて後頭部を強打する顔良さん。

――その上に覆いかぶさるよう倒れ込む俺。

――その一部始終をポカンとした表情で目の当たりにする猫耳付きのかぶり物をした小柄な美少女。

――急速に活気づいた尿意に思わずごそごそと両手を股間にやる俺。

――後頭部を強打して朦朧とする意識のまま身体を無理に起こそうとした顔良さんの胸（クソ固い鎧で完全防護）が、俺の顔に押し付けられる。

——ポカンとしていた美少女の意識が再起動し、現状の正確な把握を開始する。

その結果。

一瞬の静寂後に。

悲鳴が、城内全体に響き渡った。

「い、いやあああああああああああああつ！！！！変質者
あああああああああつ！！誰か！誰か助けて！！！！顔良将
軍が犯されるうううううううううううううううう！！！！」

その後駆けつけてきた城内の守備兵に対して少女が、

「すぐに監察吏様を呼んで下さい！ 近くに執務室があるはずよ！ 白昼堂々女を襲うような下種な官吏は一刻も早く処分して貰わないと！ 首チョンパー——いいえチ○コチョンパの刑よ！」

とか命令してた。

無論、俺に名乗り出る勇氣は無かったけどな。

第七話 逢紀君部下を得る（後書き）

祝、初めての部下。

第八話 逢紀君率いる（前書き）

ちよつとシリアス。

第八話 逢紀君率いる

逢紀 side

我ら袁家が魏郡を治めるようになって一年が過ぎた。
これが何を意味するのか？

そう……冬を越えたのだ。

ただ、何の犠牲もなく冬を越えたわけではない。
魏郡全体を通しての餓死者は千八百人余り。

凍死者は五百人と少し。

飢えて賊となり果てた者達の略奪行為による死者は三千二百人。

賊討伐における敵味方を含めた戦死者の総数は二千五百人、内訳は
袁紹軍二百、賊軍二千三百。

食糧難が原因と思しき病による病死者は……五千人を超えた。

総計一万を軽く超える魏郡の民が、この一冬で命を落としたのだ。

当然俺達だって様々な手段を用いて、一人でも死者の数を減らそう
とした。

だが、そんな俺達の涙ぐましい努力を嘲笑うかのように、現実是非
情だったのである。

餓死者を減らそうと文醜將軍が率いた袁家の私兵千人からなる買い
出し部隊は、俺が外道な官吏達から伝家の宝刀私財没収で巻き上げ
た金品を資金源としてかなりの食糧を洛陽や南方の各州から買い取
って来てくれた。

しかし、それでもやはり昨年の冷害による凶作を補い切ることは出来なかったのである。

凍死者の数は昨年より寒気が穏やかであったこともあり、例年に比べても大分少ないのだが……他所の郡や州から流れてきたばかり流民たちにまでは備蓄していた薪が行き渡らなかったのだ。

街の城壁にへばり付く様に建てられた貧相な掘立小屋の中から、少しでも暖を逃がすまいと身体を丸めたまま息絶えた彼らの亡骸を運び出す際に見せた兵士達のやるせない表情が、今なお俺の脳裏をよぎる。

賊討伐における味方側の死者が圧倒的に少ないのは、何も袁紹軍が殊更精強であったわけではない。

ただ単純に、賊軍が弱かったのである。

まともに食えず、飢えて、やせ細り、もはや賊に身を落とすしかないという悲壮な決意と共に、今まで田を耕してきた鍬を武器として立ち上がった彼らに、装備や兵糧の調達と毎日の調練だけは欠かすことのなかった袁紹軍が苦戦する理由は無かった。

けれど、この賊討伐は袁紹軍の肉体ではなく、心に大きな傷を負わせる結果となる。

討伐を主導し、実際に何度も戦地である巨大な戦鎚を振り回して勇戦した顔良さんは全ての賊討伐が終わって？に帰って来た日以降、十日もの間自室から出てこなかった。

籠ってから十日後に、袁紹様の説得でようやく出てきた顔良さんは「もう……大丈夫です」と言い切ってはいたが、俺の目はそれが痛々しいやせ我慢であるという事を見抜いてしまった。

こういう時は他人の『弱点』を否応なく察してしまう自分の才能が恨めしい。

食糧難からくる病による病死者。

これはあくまで直接的な死因が病気であったというだけで、彼らの大半はもし病気にかかることが無かったとしても結局は飢えて死んでいただろう者たちばかりだ。

彼らを病死者とし、決して餓死者として扱わないのは民を飢えさせたいという外聞の悪さを誤魔化す為……というより、俺達文官の心の均衡を保つためであった。

餓死より病死の方が「これは死者達の『天命』だったのだ」と納得しやすく、諦めやすい。

下手に彼らの死を自分達の無能が招いた結果だと思い込むようなことがあれば、良心の呵責に耐えきれない者が続出していた可能性があるのである。

事実、農業関連の部署に配属されていた元沮授派の何人かがこの冬に首を吊った。彼らの遺した遺書を読んだらしい沮授の爺さんは深く刻み込まれた眉間の皺を揉み解しながら酷く重いため息をつくだけで、何も語る事は無かったという。

悲劇が日常となった、あの地獄の冬をくぐり抜けた俺達が得た物は少ない。

逆に言えば、失うばかりの日々から少ないながらも得た物もあったのだ。

それは、？の街を俯かずにつまみすぐ前を見て歩く民達であったり、大地に根を張って畑を賑わす麦の穂だったり、派閥や部署の垣根を超え手を取り合う文官達だったり、過酷な訓練に愚痴一つこぼさず励む兵士達だったり……。

一つ一つは、小さいが、それは魏郡全体としての確かな『成長』であった。

そして、成長した俺達が、今何処で何をやっているかというと――

「チ○コ上司。兵の布陣が完了したわよ」

「了解って……その呼び方何とかならない？」

――袁紹軍五千を率いて、魏郡に接する冀州内のある郡へとやって来ていた。

遠征軍の主将は顔良さん。

俺は何故か彼女の軍師兼副将で、そんな俺の副官として数ヶ月前に俺の直属の部下となった猫耳少女の荀？ちゃんが配属されている。

「あんたなんかチ○コ上司で十分よ。それとも何？　もっと酷い呼び方が良いの？　その方が興奮する？　ああ、やだやだ、何で私がこんな気落ち悪い特殊性癖の男の部下をやらなきゃいけないのよ」
「そりゃあ、荀？ちゃん性格悪くて他の部署追い出されたせいじゃない？」

「うっさい死ね！！　ちゃんづけすんな！！」

上下関係を見殺したこの物騒な会話にももう慣れた。

流石にこう毎日やっていけば、飽きが来るぐらいである。

心底嫌そうな顔をしている荀？ちゃんに肩を竦めながら、俺は今に至る経緯を思い起こす。

あれは、冬の終わりが近いある日のことだった。

？城内に二つの訃報が届いた。

？に接する二つの郡の太守が死んだのだ。

だが、訃報といってもそれはどちらかというと凶報ではなく、吉報の類として？では扱われた。

なぜなら、片方は長年の不摂生が祟った病死で、もう片方は物見遊山の湯治に出かけた際に賊の大軍に襲われてのこと……と死因こそ違えど、その二人は悪政を敷き、それぞれの郡の無辜の民を苦しめていた悪徳太守だったのである。

そこに存在するだけで害となる奴らが消えてくれた為、少しは近隣の情勢もましになるのではないか、新しく赴任してくる太守が善政を敷いてくれるのではないか、という希望的観測が広がったのだ。

だが朝廷から早馬でとある命令が届き、事態が思わぬ方向に転じる。

何と、太守の座が空いたその二つの郡の新たな太守を、袁紹様が兼任するようという命令だったのだ。

これに対し袁紹様は『おゝほっほっほっ、中央のお馬鹿さん達もようやく私の素晴らしさを理解し出したのですわね』とご満悦。

文醜さんも『タダでくれる何て、太っ腹じゃん』とか樂觀的な事を口にしていた。

だが俺、田豊、顔良さん、沮授の爺、荀？ちゃんのある程度知恵の回る五人は、揃ってため息をつき、顔良さんの執務室で秘密の話し合いを行った。

『これってつまりあれだろ、厄介事を俺らに押し付けて来たんだろ？』

『まず間違いないね』

『うううっ……麗羽様、敵が多いから』

『まあ、今回ばかりは袁紹様だけのせいではないわい。恐らく、太守が賊に首を取られるような物騒な土地に、誰も赴任したがらんかったんじゃろ』

『当然と言えば、当然よね。河北の今の荒れ具合は、漢全土に知れ渡ってるんですもの』

それから数日後、謁見の間へと呼び出しがかかり、嫌な予感を覚えながらも行ってみると、怒り心頭といった様子の袁紹様が地団駄を踏んでおり、それを顔良さんと文醜さんが必死に宥めていた。

苦虫を噛み潰したような表情でそれを傍観していた田豊に詳しく話を聞くと、どうやら袁紹様が新たに太守を兼任することとなった郡にその旨を伝える使者を送ったのだが、その使者達は亡き悪徳太守の下でこの世の春を謳歌していた愚物どもに追いつかれてしまっただけらしい。

そして、その後謁見の間で開かれた会議により、朝廷の命を蔑にし、

郡を不法に私物化している『賊徒』どもの討伐が決議されたのであった……。

そこまで思いおこして、俺は眼前の光景にため息をつく。

だだっ広い荒野に堂々と布陣し、陽の光に槍先を煌めかせている『賊徒』の数は七千人とこちらよりやや多い。

とは言っても、お世辞にもその布陣は洗練されているとは言えず、戦意にも乏しそうだ。

たぶん今まで碌な訓練も施されてこなかったのだろう。

戦意が乏しいのは、この戦いにおいて自分達に正統性も大義もない事を一兵卒ですら知っているからなのかも知れない。

それでも上から戦えと言われれば、戦わなければいけないのが兵士の悲哀という物か。

「それにしても……何で俺が副将で、軍師なんだ？ 俺って監察吏だよな、ただの。大拔擢過ぎじゃないこれ？」

「……ふんっ、別に拔擢でも何でもないわよ。自分の尻は自分で拭きつけてことでしょう」

首を捻る俺を、苟？ちゃんが鼻で笑う。

「どういふこと？」

「どうもこうもないわよ。目の前の馬鹿どもが何で朝廷の命令を無視してまで、袁紹様の赴任を拒否したか……その理由の大半があなたにあるからに決まってるじゃない。悪徳官吏……最近では官匪って言うらしいけど、その官匪達から蛇蝎のごとく嫌われ、地獄の獄卒よりも恐れられている『監察吏様』が袁紹様の赴任と共にやってくるなんて、彼らにとっては死刑宣告にも等しいわ」

「いや、死刑宣告ってそんな……」

「知ってる？ あんた最近河北四州の官吏の間で『斬首の逢紀』って呼ばれてるのよ」

え、何その物騒な二つ名？

「……俺、一度もそんな呼ばれ方してないんだけど？」

「本人前にして悪名で呼ぶほどの馬鹿はいないわよ」

あ、やっぱり悪名の類なのね。

ちよっと、しょんぼり。思わず肩がぐりと落ちてしまった。

「もう片方の賊徒どもの討伐に文醜さんや田豊が行ってて人手不足だったのかなあ……とか俺は思ってたんだけど……そういうオチがあったのね」

「別にオチでも何でもないわよ。面白くないんだから」

「泣いて良いですか？」

「駄目よ。あんたの涙が落ちた先の大地がかわいそうじゃない」

「とうとう涙まで汚物扱い！？」

等と漫談を繰り広げている内にとうとう事態が動き出した。

敵軍の動向を目視で探っていた物見から連絡が入る。

「敵、賊軍鋒矢の陣に移行しました！」

「そうか御苦労。後曲本陣の顔良將軍に伝令、敵はこちらの予想通り突撃を敢行する模様、事前の作戦に沿って行動されたし」
「はっ！」

伝令が後方の本陣三千の所に走り去るのを見送りながらも、俺は前曲二千の手綱をしっかりとることに集中する。

横で詰まらなそうな表情をしていた荀？ちゃんが眉をしかめる。

「敵は馬鹿なのかしら？ こっちより人数が多いんだから、慎重に包囲陣をひけばいいのにわざわざ危険性の高い攻撃系の陣形を取るなんて？」

俺は荀？ちゃんの言葉に、首を横に振る。

「馬鹿っていうのも間違いじゃないけどさ。あいつらには一つ、大きな『弱点』があるのさ」

「弱点？」

「そう、時間をあまりかけられないっていう弱点だよ」

「……？ 普通時間が弱点になるのは兵糧に不安を抱える遠征軍である私達の方じゃないの？」

「俺のいう時間は兵糧とは無関係さ」

「じゃあ、何のなのよ？」

「荀？ちゃんは何で賊徒が籠城策を取らなかったか分かる？」

俺の試すような物言いに、荀？ちゃんが顎に手を添えて考え出す。

「……援軍の当てが無いから……じゃ、ないわよね。援軍なんてなくても単純にこちらの兵糧切れを待てば良いんだから……籠城策を取らなかった……籠城策を……取れなかった？ その理由、あ、そ

うか、あいつらは民衆の武装蜂起を恐れているのね！」

「その通り」

ある程度知恵のある官匪達は自分達がどれほど民衆から怨まれているのかを良く知っている。

だから、籠城なんかしようものなら内部から門が開けられる可能性が高いと察したのだろう。その為にわざわざ城を捨てて野に布陣したのだ。

「このまま睨み合って、無為に時間が過ぎるのも奴らは恐れている。時間が経てば経つほど、俺達袁紹軍がこの地を悪政から解放しに来たのだという噂が各街や村々に浸透して武装蜂起の可能性が高まる。そうなれば、彼らの敗北はほぼ確定で、待っているのは無残な死だ」

ゆえに賊徒は短期決戦を選び……その焦りを見抜いていた俺達に、敗北を喫するのだ。

「敵軍、突撃を開始しました！」

「よし、前曲全軍に通達、焦らず歩調を合わせながら可及的速やかに後退」

「焦らず可及的速やかかって無理じゃない？」

「ちゃんとそういう訓練もしてるって。顔良さんの保証付きだから大丈夫……後退しつつ、敵軍が弓矢の射程に入り次第、迎撃を開始するぞ」

賊徒は焦り過ぎた。

戦の始めは基本的に遠距離からの矢の応酬である。

勝敗を決するまでの時間に気を取られるあまり、そんな戦の常識まで忘れるとは愚かといかない。

「敵先鋒、射程に入りました！」

「射程に入った敵陣の先端部に集中して矢の雨を降らせろ！」

俺の号令に従い、一斉に放たれた二千本近い矢が敵の鼻っ面を強襲する。

当たった矢は三割も無さそうだが、構わない。

矢で殲滅する必要などない、少しでも敵の突撃速度を緩めれば良いのだ。

「後方の本陣が動き始めたわ。予定通り私達が引きずり込んだ敵の横腹を殴りつけるようね」

苟？ちゃんの淡々とした報告に、俺は頷く。

「これは、勝ったな」

俺達が最初に立てた作戦というのは単純なものだった。

ただでさえ相手に劣る兵数である自軍を更に二つに分けて、少ない方を敵眼前に晒す。

短期決戦を望む連中からすれば、目の前に御馳走をぶら下げられた様な物だ。畏かもしれないと疑ってみても、つつい跳び付かずにはいられない。

後は、跳びついて来た敵をより奥へと引きずり込みつつ数を削り、前方の二千に気を取られている所を後方から横へと回り込んだ三千で横撃する。

そして、矢を放っていた二千も横撃で混乱する敵軍に突撃。これを破る。

弓矢による一斉射が六度目をむかえ、流石に圧迫感を受けるほど敵軍に距離をかなり詰められたまさにその時、顔良さん率いる三千の

横撃が敵の横腹に決まった。

目に見えて混乱した敵軍は、速度を落とすどころか、その場で完全に止まり横撃してきた顔良さん達を迎え撃とうとする。

「前曲全軍に通達、後曲の突撃に気を取られている馬鹿どもに、目の前にも敵がいた事を思い出させてやれ——突撃だ！」

「はっ！」

雄叫びを上げながら突撃を開始する二千。

俺は残念ながら戦力外なので、苟？ちゃんや僅かばかりの護衛とその場で待機。

「……一方的になって来たわね」

二千の突撃を受けて、とうとう壊乱する賊徒を尻目に苟？ちゃんが肩の力を抜く。

何だかんだと強がってはいても、まだ彼女は幼いし、実戦に出るのはこれが初めてという事だから、かなり緊張していたのだろう。

「安心できた？」

「……笑いたいなら笑えば？ 盤上の遊戯と実戦の違いを思い知ったか小娘って」

それを言うなら俺も実はこれが初陣で、本当に策が上手くいくのか終始ドキドキしっぱなしだったのだが、苟？ちゃんに余計な心的負担をかけないよう「俺実戦に出るの慣れてますから」的な虚勢を張り続ける。

「笑いはいしなさいさ。戦場では誰だって生き残ることに必死なんだか

ら。最後までこうやって自分の脚で立って入れただけでも大したもんさ」

「……ふんっ」

そっぽを向いてしまった苟ちゃんに肩を竦めて、俺は今なお無慈悲な死を撒き散らす戦場に目を向ける。

無数の矢で一方的に削られまくった挙句、俺達が後退したただけ余計に走らされて疲弊し、更には三千の横撃の混乱が加えられ、止めに二千の突撃を受けた賊徒は既にその数を半数にまで減らしている。

多分、あと数十秒もしない内に降伏するだろう。

となると、両軍の死者数は合わせて四千くらいか……。

四千。

四千もの、貴重な人の命が、またこの大地で無為に散った。

ギリッと俺は奥歯を噛みしめる。

己が欲に溺れ――

多くの兵を死地に送った腐れ官匪ども――

首を洗って待っているよ――

『斬首の逢紀』が今行くぞ――

第八話 逢紀君率いる（後書き）

初陣終了。

次回、女神登場？

第九話 逢紀君逃げる（前書き）

女神は次話

第九話 逢紀君逃げる

逢紀 side

我が主袁紹様が新たに治めることとなった二つの郡の『お掃除』がようやく終わった晩夏の今日この頃……俺は出世した。

そう、出世したんです！

大事である以上に、嬉しい事なので二回言いました。

俺の初陣となったあの戦いにおける戦功と、その後の『お掃除』を徹底した功により『袁紹軍次席武官顔良付き軍師』の役職を正式に賜ったわけです。

これで俺も末席とは言え、上級官吏の一人に名を連ねることとなり、朝議に出席する権利……というか義務も出てきたわけですよ、はい。

ああ、監察吏としての役職も兼務してますよ。

せっかく出世したんだし、後進の誰かにそっちの席は譲ろうかと思ってたんですが……何かね、誰も欲しがらなかったんですよ。

むしろ「あげようか？」と勧めるたびに全力で拒否されました。

……何でだ？

やっぱり監察吏って嫌われる役職なんですかね。

この間、官吏達で混雑していた城内の食堂に行った時冗談で、

『悪い官吏はいねえがあゝ』

とか言ってみたら阿鼻叫喚の地獄絵図が繰り広げられましたね。

『助けてオカアちゃん！！』

『お、おら悪い官吏じゃねえだ！』

『む、娘を嫁にやるまで私は死ぬわけには！！』

って、感じで悲鳴と怒号とお皿が飛び交ってましたよ。

まあ、俺は大人ですし細かいことにはこだわりません。

ええ、こだわるつもりなんか全然ありませんよ。

俺と一緒に出世した荀？ちゃんが異動となり、部下じゃなくなったのも気になりません。

え？ 荀？ちゃんの新たな役職？

それはですね――

――袁紹軍総大将袁紹付き筆頭軍師――

——なんですよ。

……。

……。

……ど、どうしてこうなったあああああああああああああ
あああああっあああああっ!?

ど、どどどどういうこと!?!? ねえ、これどういうこと!?!?
総大将付きってだけでも驚きなのに、筆頭軍師って何さ!?!?
いつの間に俺より遥か上の立場に行っちゃったあの娘!?!?

もしかすると賄賂かと思って、監察吏としての権限を最大限行使し
て各方面に本気で探りを入れてみたりもしました。

その結果判明した苟?ちゃんの出世理由は……単純に実績の積み重
ねでしたとき。

と、いうより、彼女が重ねた実績の九割以上に実は俺が関与してい
たとかいう驚愕の事実が発覚。

そう言えば苟?ちゃん、俺が『お掃除』に必死になっている時、た
まに自分で作成した色んな事案の改革案とかを持ってきて意見を聞
いてきたな。

三つの郡を効率良く治める組織体系とか、流民保護における特別法
とか、吸収した二つの郡の軍隊の再編案とか、後は飢饉対策の為の

義倉の新設とか……。

そういった物を持って来られるたびに、とりあえず駄目だしを繰り返したんだよな、俺。

だって、あまりに改革の内容が難し過ぎて改善案とか出せないのが超悔しかったんだもん。

だからひたすら改革案の粗探しに腐心して、駄目だしされる側の苟？ちゃんに泣きが入るまで徹底して鼻で笑ってみた。

半泣きになりながら「お、覚えてなさいよこのチ○コ上司！　いつかあんたより偉くなつてチ○コチョンパしてやるんだから！！」と捨て台詞を吐かれたり、翌日には微塵も非の打ち所が無い完璧な改革案を「これで、どうよ！」と付きつけられたりしたのは良い思い出です。

本当、猫耳は有能でした。

きっと、あの猫耳は小憎たらしい後輩はわわとあわわの同類です。天才とか呼ばれる存在です。

さて。

そんな天才が、その才能に相応しい地位に……俺より高い地位に就いちゃいましたね。

俺の事を『チ○コチョンパ』したくてたまらない天才が――

あれ？ 俺の男としての人生、詰んでなくね？

そんな疑念が現実へと変貌を遂げる前になんとかしよう……真剣に出奔を視野にまで入れていた俺の前に、あの提案がなされたのはまさに渡りに船だった。

田豊side

謁見の間にて、上級官吏が一堂に会する朝議。

これは、ほぼ毎朝行われている為、結構簡単な申し送りだけで終わることも多い。

だが、今朝のそれはどうやら何か重要な案件を扱うらしい。

顔良殿や沮授殿の張りつめた表情を見て、僕はそう確信した。

ざわめく重臣たちを、玉座から立ち上がった袁紹様が睥睨し口を開いた。

「どなたか、幽州に行ってみませんか？」

謁見の間に沈黙と困惑が広まった。

幽州？

行ってみるとはどういう事だ？

使者の任か？

それとも討伐？

再びざわめきだす重臣たちを、今度は沮授殿が片手をあげて黙らせ、詳細を説明してくれた。

袁紹様が洛陽にいた頃に交友のあった友人の一人が、先頃幽州の啄郡に太守として赴任したらしい。

しかし、啄郡は去年の秋ごろに侵攻してきた異民族との戦闘で先代太守以外にも多くの高級武官や軍師が命を落とし、人手が足りない状況にあるようだ。

『白蓮さんのお宅は我が名門袁家とは違い、優秀な家臣が誰一人いませんものね。人手不足も当然のことですわ、おっっほっほっほっ！』

とは、袁紹様の言である。

ともかくにも、人材不足で頭を抱えたその袁紹様のご友人とやらが、先日袁紹様に使者を送ってきて、家臣を客将として貸してくれないかと打診してきたらしい。

無論タダというわけではなく、もし客将を派遣してくれるなら、馬の取引に関して便宜を図るとの交換条件付きで、だ。

馬の取引。

袁家としては実に魅力的な提案だ。

何故なら、剽悍な軍馬の確保が現在の袁紹軍の急務であったりするのだから。

かつては袁紹軍もそれなりの数の軍馬を揃えていたのだが、今は最も多かった時期の半分以下しかない。

原因は、河北四州の民を地獄に叩き落とした例の飢饉だ。

あれのせいで飢えに苦しんだ農民達が、村の貴重な労働力たる農耕馬や牛を潰して腹を満たさなければならなくなったのだ。

確かにそのおかげで少くない数の命が餓死の危機から脱したのだが、牛馬を失った村は結果として労働力が激減し、生産力低下という新たな危機に直面する羽目になったのだ。

これを打開すべく、僕達は軍が保有している軍馬を農耕馬として村に無償で貸与することにした。

この策により農民達の間における袁紹様の名声は急速に高まったが、軍には輜重隊に回すだけでやっとの数の馬しかなくなり騎馬隊は解散。弱体化の憂き目にあった。

何とか解散した騎馬隊を再編すべく、僕や文醜殿や顔良殿は奔走したのだが……どうにもならないというのが現状である。

何せ、近場の河北四州はどこも似たような状況で馬不足だし、名馬

の産地として名高い涼州は遠過ぎて輸送費がかさむ。涼州産の馬で数をそろえようとしたら宝物庫が二つか三つはあっさり空になるはずだ。

馬の不足。

取り除けない頭痛の種。

上手くいけばそれが消えてなくなるかもしれない今回の提案に、袁家は乗ることにしたらしい。

「で？ どなたか哀れな白蓮さんを助ける気はありませんの？」

袁紹様がそう問いかけてくるが、重臣たちは皆俯いて顔を上げようとしない。

当然だろう。

誰だって嫌だ、こんな任務。

他家で客将として活躍しても、出世できるわけでもなし……下手に何かしらの失敗をやらかせば袁家の顔に泥を塗ることになりかねないし、最悪馬の取引が中止にでもなったら文字通り首が飛ぶ可能性がある。

ただでさえ先日、袁家では新参者である荀？殿が袁紹様付きの筆頭軍師に大抜擢され、古くからの家臣たちが内心かなりの焦りを覚えているのだ。

ここでさらに出世街道から逸れて、命の危険が転がる道に迷い込む

ような真似を誰がしたがるもんか。

面倒な割に、利が少ない、そんな任務に志願する阿呆なぞ……

「あら？ 逢紀さん、貴方が行ってくれますの？」

あ、あの阿呆何やってるんだ！？

僕から二人ほど隔てた重臣たちの末席から一步前に出て、片膝をつき袁紹様に向かって抱拳礼をとる逢紀。
皆、彼の突然の行動に瞬きすら忘れて驚いている。

「袁紹様、ぜひともその大任、私めにお任せください。必ずや袁紹様のご友人のお役に立って見せます」

「宜しいですわ。なら——」

「お待ちください！ 袁紹様！」

袁紹様の言葉を遮る不敬を犯したのは荀？ 殿だった。
彼女らしくもない慌てた様子に、また重臣たちは驚き戸惑う。

「逢紀殿はただの上級官吏ではありません！ 官吏達の不正を監視し、処罰する監察吏という極めて重要な役職に就いております！ そんな彼がこの地を一時的にでも離れるのは組織の運営上好ましくありません！」

「ふむ、確かにそうですね。では他の——」

「お待ちください！ 確かに私は監察吏の職にありますが、袁紹様の治める三つの郡に蔓延っていた官匪どもは既に一掃いたしました。多少の期間、客将として他家に赴いたとしても何ら問題はありません！」

「あら、そうなんですの？ なら、やはり——」

「お待ちください！ 監察吏はそこにいるというのが重要なのです！ 例え魔がさしかけても、監察吏の目を意識すればこそ、官吏達は不正を思いとどまれるのです！」

「それな——」

「お待ちください！ いるだけで良いのなら、つい先ごろまで私の部下として、監察吏としての仕事を補佐していた苟？殿がおられます。私が不在の間は苟？殿に代役を——」

「私は筆頭軍師としての激務で既にほかの仕事に手を回す余裕がありません」

「嘘です！ この猫耳嘘ついてます！ はわわやあわわと同格なら、筆頭軍師の仕事なんて鼻歌交じりでやれるはずです！」

「な、何が嘘よ！ それにはわわとあわわって誰よ！？ 変な言いがかりをつけないでよね、このチ○コ元上司！！」

「い、言ったな、元上司って言ったなこの猫耳！ ちょっと出世したからって偉そうにするんじゃないやねえ！！」

「偉そうじゃなくて偉いのよ！！ あんたなんかよりも遥かにね！
！それが分かったのならあんたは黙ってここに残って私にチ○コ
チョンパされれば良いのよ！！」

「くっ、貴様やはりそれが狙いか！ かくなる上は！」

「な、何よ！ 暴力を振るうつもり！？ この野蛮人！ 野蛮チ○コ！！」

「ふははははっ！ 勝てばいいのだよ勝てば！ ……ん？ 前にも似たようなことを言ったような？」

「隙あり！」

「グブハッ！ 不意打ち金的とは卑怯な！」

「勝てばいいんでしょう！？ 勝てば！？」

……あれ？ いつから朝議が子供の喧嘩に変わったんだろう？

とうとう取っ組み合いの喧嘩をし始めた二人に絶句するその他の重臣。

それにしても、あれだね。

何で逢紀はこうまでして幽州何かに行きたがるんだろうかね？

それに、荀？殿も何故これほどまでに逢紀をここに止め置きたがっているんだろう？

逢紀の方はさっぱりだが……荀？殿の方は……まさか……そういう事なのか？

貴方とは片時も離れたくないの……とか、そういう……。

上司と部下の関係がいつの間にもやら発展して……くっ、気付かぬ内に強敵が現れていたとは！

「はあっ、はあっ、あんたなんか私に逆らおうなんて百年早いだよ！」

「く、くそっ、油断したぜ……ほんと、ちょっと油断しただけだからな、これが俺の実力とか思うなよ！ あ、痛っ、痛い！ 背骨は止めて！」

うつ伏せで倒れ伏す逢紀と、その背中を踏みつけて胸を反らす荀？殿。

いつの間にか決着がついていたらしい。

……というか、逢紀よ。

君、本当に弱いな。

いや、それよりも……二人とも、気づいているのかな。

途中から空気扱いされた袁紹様、額に血管浮きあがらせてるよ。

「二人揃ってこの私を無視するだなんて……随分仲がよろしいんですのね、貴方がたは」
「……あ」

珍しく子供じみた激怒ではなく、静かなる怒りをもってにこやかに微笑む袁紹様。

ようやく事態のまずさを悟った二人だが、もう遅い。

軽く小首を傾げた袁紹様が、謁見の間の出入り口を指差して命じる。

「二人一緒に仲良く幽州に行ってらっしゃいなさい……何も心配いりませんわよ。貴方がたの頭を冷やせるくらいには、幽州の『冬』は涼しいはずですよ……おゝほっほっほっ!!」

こうして、最低半年間の幽州出向任務が駄目だし監察吏と猫耳筆頭軍師に言い渡された。

第十話 逢紀君女神に会おう（前書き）

ハムファンカモン！

星ファン……ごめんよ。

第十話 逢紀君女神に会う

逢紀side

幽州行きが決まってからの一週間は本当に大変だった。

片づけておかねければならない案件を徹夜で処理しつつ、俺がいなくなっても官吏の不正を一切見逃すことのないように仕事の引き継ぎをしたり、『……生きて帰ってくるんじゃないぞ』とか真顔で言う爺に蹴りを入れたり、目が回る忙しさの見本例のような毎日だった。

でも出発する前夜に、ささやかではあるが宴が開かれた時は流石に涙腺が緩んだよ。

食糧事情は徐々に改善されてきているとはいえ、未だ予断を許さない状況なのに……碗一杯に俺の故郷荊州産の白米が盛られていたり、一人一瓶酒が供されたり、おかずが一品ではなく三品も付いたり……随分奮発してくれたもんだ。

見送りの盛大だった。

何せ、役職を問わずほぼ全ての官吏がわざわざ？の城門前まで足を運んで、俺達の出発を見守ってくれてたんだぜ。

俺の人望の厚さが窺える光景だった。

そう、旅の同行者たる荀？ちゃんしみじみと語ったら、

『そんなわけないじゃない。あれはただ目の上のタンコブが、本当に消えてくれるのかを確かめに来てただけよ』

と鼻で笑われた。

目の上のタンコブ？

……ああ、荀？ちゃんの事か。

異例の出世速度で袁家の頂点近くまで登り詰めた荀？ちゃんは、地道に仕事をやっている他の官吏達からすれば確かに目の上のタンコブだろう。

現に、今は俺の目の上のタンコブだ。

幽州啄郡へ客将として二人が赴くことになった際に袁家内の序列に従い、軍でいうなら荀？ちゃんが主将で俺が副将、使者でいうなら荀？ちゃんが正使で俺が副使という立場になることも決定した。

……つまり、俺一人で行くよりも俺の扱いが一段階悪くなったという事である。

五百人の袁紹軍歩兵部隊に護衛されながら目的地を目指している俺達の乗り物を見比べれば、扱いの差がはっきり分かる。

荀？ちゃんは馬二頭立ての貴人が乗る為の馬車でのんびり本なんか読んでて、俺はその横を歩く馬の上でパツカラパツカラ。

一昔前までは臭いのきつい調味料の甕の上だったことを考えれば、随分と出世したものだ……なんか納得がいかない気がする。

とはいえそんな不満を口にした日には、荀？ちゃんお得意の罵詈雑言の嵐をお見舞いされるので黙って殊勝な態度をとり続けてるんだけどね。

旅自体は特に問題なく進んだ。

山賊が出没するという危険極まりない地域を通過した時でさえ、過剰ともいえる護衛の恩恵か一度も襲撃を受けずに済んだのだ。

問題があったとしたら旅の途中に寄った村々の方であろう。

袁紹様が治めている三郡以外の冀州の郡が酷い状態なのは予想の範囲内であったが、それ以上に幽州の各郡が荒廃しているのには驚かされた。

だがまあ、考えれば当然のことではある。いくら幽州の各太守が冀州のそれよりまともな性格で有能であったとしても、冷害による飢饉や異民族の侵入に対して完璧な対応をとる事など不可能なのだから。

むしろその二つが重なってしまった分、冀州よりも遥かに悲惨極まらない地獄が生み出されたと言えた。

幽州に入ってから聞いた話では、俺達が向かっている啄郡が幽州の中でも特に厳しい状況におかれているらしい。

これは袁紹様のご友人が無能なわけではなく、中央が人事決定にもたついたせいで先代太守の戦死からご友人の赴任までにかなり時間が開いたのが原因のようだ。

更にそこに人材不足が加わり、復興速度よりも荒廃速度の方が勝ってしまっているのであろう。

啄郡に入って一番最初に訪れた村は……廃村だった。

事前に手に入れていた地図には確かに村の名前があったのだが、俺達の目の前に現れたのは村を囲う半壊した土塀に、焼け落ちた民家、雑草に覆われた畑であった。

次に訪れた村には人こそいたが、皆やせ細った身体に鞭を打って鋤を振るっており俺達に構う余裕もないようであった。

護衛として連れてきた武官の一人が見るに見かねて、俺に兵糧の一部を彼らに分け与えるよう進言してきたのだが……俺はそれを却下

し、武官を叱責した。

『そんな！ 何故ですか！？』

『……あの兵糧は、？をはじめとした三郡の民が我らに納めた物だ』
『それは分かっています！ ですが、我らの前には飢えた民がいるのですぞ！』

『いや、お前は分かっている。何故三郡の民達は、未だ自分達が飢える危険がある中、貴重な穀物を兵糧として素直に納めてくれたと思う？』

『そ、それは納める義務が……』

『義務というだけなら、収穫量を誤魔化し兵糧を納めない言い訳の一つでも考えただろうよ。だがな、三郡の民達はそれをしなかった。何故か？』

『……』

『……信じてくれたからだ。我々袁紹軍を』
『ッ！』

『兵糧を納めれば、袁紹軍は必ず自分達を守ってくれる。自分達の家族を、明日を、平穩を守るべく、命をかけて戦ってくれる……そう彼らが信じてくれたからこそ、今俺達の手元には兵糧が、麦があるのだ。……断じて幽州の民の腹や、我々に偽善行為ほごしをさせる為ではない』

『……そう、ですよね』

『彼らの信賴を裏切るわけにはいかん。彼らの想いを踏みにじってはならんのだ。……だから俺は、例え麦の一粒、塩の一つまみであろうと袁紹軍の……ひいては三郡の民の為以外に使う気は無い』

『……逢紀様、私は目の前で飢えている彼らを救えない自分が……恥ずかしいです』

『今、袁紹軍に所属している官吏で己の無力を恥じた事のない者など一人もいないさ……』

武官への叱責が終わった後、少し偉そうな物言いになったと反省はしたが、後悔はしていない。

一部始終話が聞こえていたであろう荀？ちゃんも、何も言ってこなかったんだから少なくとも俺の考えと判断は間違っていない……と信じることにした。

そう無理矢理にでも信じ込まなければ、見捨てていく形となった幽州の民への罪悪感で胸が押しつぶされそうだった。

その後数日をかけて袁紹様のご友人が太守として治めている街へと辿り着いた俺達は、伝令を先に走らせていたこともありほとんど待たずに太守との面会が叶うこととなった。

俺と荀？ちゃんは正装に着替えてから、

袁家の恥とならぬよう細心の注意を払って、

謁見の間へと足を踏み入れ、

そして――

俺は――

出会った――

「遠い所をはるばるよく来てくれた袁家のお客人よ、歓迎するぞ。
私が幽州啄郡太守公孫賛だ」

――運命の人

――否

――この世をあまねく照らす……女神様と――！

この感動。

如何にして伝えようか？

言葉じゃ駄目だ。

あんな不完全なものでは、どれだけ美辞麗句を並べようと、今の俺のこの感情を目の前の女神様に理解していただけるはずがない。

ならば、そう。

行動だ。

拝礼——では普通すぎる。

抱擁——では不敬過ぎる。

あ、そうだ。

あれをしよう。

あれならばきっと、俺の想いが伝わる！

さあ、女神様よ、卑賤なる我の精一杯の想いを
ご照覧あれ！！

荀？ side

——もうやだ、？^{おうち}に帰りたい。

それが今の私の偽らざる思いよ。

幽州啄郡太守公孫贊様と面会すべく、謁見の間に踏み入るまではそんな情けないこと思ってもいなかったわ。

今回の出向任務は確かに私が望んだものではなかった。

でも、袁紹様付きの軍師になって以降毎日あの高笑いとお馬鹿な行動に付き合わされる羽目になり……正直精神的にきてたものがあったので気分転換には調度良いと割り切ることにしたのよ。

そんな単なる割り切りも、啄郡に入り各地の惨状を見るにつけ一種の使命感へと変貌を遂げたわ。この大地を私の手で蘇らせて見せると。

城門をくぐり、大通りを抜ける際にはかすかながらも復興の兆しが見え、この地を治める公孫贊様が決して無能ではない事も分かり、そんな思いはますます強くなっていくくらいよ。

それなのに。

それなのに、この馬鹿は。

それなのに、この馬鹿チ○コ元上司はああああああっ!!

「な、なあ、使者殿……」

「……荀？とお呼びください。公孫贊様」

「そ、そうか……なあ、荀？殿？」

「何でしょうか？」

「……その、彼は」

「逢紀、いえ、馬鹿が何か？」

「……逢紀殿は……何をやっているのかな？」

「……おそらく」

「おそらく？」

私はなるべく視界に入らないようにしていた逢紀^{ぽか}を……見・下・ろ・す。

そして、彼が現在進行形で行っている愚行を、一切の偏見や主観を取り除いた客観的判断をもって一言で表現する。

「犬がよくやる『絶対服従姿勢』をとっているのかと……」

絶対服従姿勢。

飼い犬がご主人様の前で良くやるあれよ。

仰向けに転がって、前脚後ろ脚を天へと突き出し、無防備な腹を晒すことで敵意が無いことを示す姿勢。

『うち、あんたのことが大好き過ぎてかなわんねん。もう、あんたの思うがまま、煮るなり焼くなり好きにして!!』という奴よ。

「そ、そうか……やはり、そうだったか。私の勘違いではなかったか」

「はい……」

「一応聞くが、あれはひょっとして冀州特有の挨拶——」

「いいえ、違います。そんな恥ずかしい誤解は死んでも御免です」

「あ、そうかすまない」

絶対服従姿勢なんてふざけた物を、初対面の相手に堂々とされた公孫贇様の戸惑いも良く分かるが、同僚にそんなことをされて潰された私の面子も慮って欲しい。

これでは、袁家の顔に泥を塗らないよう必死に挨拶などの口上を考えてきた私の方が、馬鹿みたいじゃない！

憤怒をこれでもかと詰め込んだ視線を馬鹿にぶつけてみるが、効果は無し。

それどころか目の前に転がる馬鹿は、幸福の極みといったほど満ち足りた表情をしている。

尻尾があれば間違いなく千切れるほど振りまくっていただろう。

そんな馬鹿が、不意に口を開く。

「女神様……」

ぽつりと漏れたその一言に、私と公孫賛様は顔を見合わせて困惑を深める。

女神様？

誰が？

もしかして……もしかしなくても、公孫賛様が？

……何で？

「えっと逢紀殿？」

「逢紀と……いいえ、いつその事、犬とお呼びください！」

「い、いや私にそんな趣味は無い！ 私はもっと普通の恋愛をつ……ゴホン。その、女神様というのは私の事で良いんだろうか？」

「無論でございます」

「そ、そうか。でも何故だ？ 自分でいうのもなんだが、私は普通という言葉が似合い過ぎるほど普通な人間で、特別何か秀でた才能があるわけでも、神秘的な容貌をしているわけでもないのだが？」

公孫賛様の才能の有無はともかく、確かに彼女の容貌は特筆すべき物でもない。

美人ではあるわ。

後ろでまとめた緋色の髪や、綺麗な形の顎や目鼻に均整の取れた体つき。

それらは確かに、美しいと表現するに足るものではあるのよ。でもそれはせいぜい、啄郡一とかその程度の美しさであり、幽州一とか漢一の美貌というわけではない。

そんな公孫賛様を女神と崇める逢紀の真意は何なのよ？

私と公孫賛様の問いかけるような眼差しに、絶対服従姿勢のまま逢紀は答える。

「欠けざる事、天上の陽の如し」

多分、天に住まう神様や太陽みたいに欠点が無いと言いたいんでしようけど……え、それだけ？

ま、まあ、個人の嗜好はそれぞれだし、私が文句を言う筋合いは無いのだけど……なんか納得いかないわ。

とりあえず褒められている事だけは分かったらしい公孫賛様が「いや、そんな、私……デヘヘ」とか無茶苦茶テレたり、顔を真っ赤にして悶えたりしているのも何故か見ていて腹が立つ。

どんだけ褒められ慣れていないのよこの人！

私がそんな憤懣を押し殺していると、突如謁見の間に相応しからざる高笑いが響いた。

「はっはっはっは！ 白蓮殿もやはり女子なのですな！ 随分と可愛らしい姿を見せてくれる！」

そんな言葉と共に、謁見の間に姿を現したのは蝶の刺繍が入った白くて際どい服をした美女だった。

ちなみに何処が際どいかわれれば……御大層な物を押し包んでいる胸元よ。

……死ねばいいのに。

多分公孫賛様と横に並べてどちらが美しいか人に問えば、十人中九人は彼女の方を指さすだろう、そんな美貌の持ち主だ。

……槍を携えている所からすると、公孫賛様に仕えている武官かしら？

「くっ、星、あんまりからかうな」

「何、これも褒め言葉ですよ。それにしても白蓮殿に目をつけるとはこの御仁、なかなか見る目がありますな。それにこの一点の曇りも、揺らぎもない絶対服従姿勢……素晴らしい」

感心したように頷いた武官の女が、未だ寝転がっている馬鹿の元へと歩みよっていった。

そんなに近づく、見えるわよ。何処がとは言わないけど。

馬鹿の眼前に立った、武官の女が友好的な笑みを浮かべる。

「お初にお目にかかる。私の名前は趙――」

「黙れケバイ女」

凍る空気。

「は……はははっ、すまん少々耳の調子が」

「ケバイ女の耳が遠くなろうと知った事か、邪魔だからそこを退け。」

女神様の御姿が良く見えん」

凍った空気に罅が入る。

「くっ、そこに直れ下郎があああっ！ そっ首叩き落としてくれる！」

「やかましい！！ 良いからそこを退け！！ 俺が見たいのは女神様の御姿であり、お前の汚れた下着などではない！！」

凍った空気が粉々に砕け散った！

「な、なななっ！ 嘘をつくな！ 私の下着は――」

「調練を終えたばかりのようだな。いや、恐らく昨日から下着を替えていないな」

「ぐっ、これは、昨日はつい深酒をして、今朝寝坊してしまったせいで調練に遅刻しかけて」

「大体なんだその胸元を開いた服は？ 破廉恥な」

「う、こ、これは女の色香をだな」

「そんなものは出ていない。見ろ、女神様のあの立ち姿の美しさを。ただそこに立っているだけで気品が滲み出てくるようではないか。貴様から滲み出ているのは、どちらかというと下品な――」

「う、うううう、うわああああああああああん！！」

大人びた美貌を誇っていた美女は、小娘の様な悲鳴と共に涙をぼろぼろと零し、謁見の間から逃げ去っていった。

それをドヤ顔で見送った後、再び公孫賛様へと視線を戻し、恍惚状態となる馬鹿。

そんな二人のやりとりに頭を抱えて呻く公孫賛様。

混沌の坩堝と化した謁見の間で、ただ一人冷静な思考能力を保持し続けている私が思う事はただ一つ。

——もうやだ、？^{おっぴ}に帰りたい。

第十話 逢紀君女神に出会う（後書き）

恋は盲目な逢紀君。

星の扱いが酷い……。

星にもちゃんと救済措置はとりますよ。

仲間にする気満々ですから。

第十一話 女神様春を感じる（前書き）

今回は、星の救済とハムの憂鬱

そして、お前らLOVEか？ LOVEなのか？ って感じ。

第十一話 女神様春を感じる

女神様 side

「いや、女神じゃないから私は!!」

「は? どうかされたのですか、白蓮殿?」

「……何でもない。ちよつとぼうつとしてただけだ」

「ほう、真面目が取り柄の白蓮殿にしては珍しい。まあ、この春の陽気の中では無理もない事です」

執務室で机を並べて一緒に書類整理に勤しんでいた星に言われて、私は初めて気付く。

そうか、もう春か、と。

手にしていた筆を硯の上に置き、椅子の上で上半身を伸ばす。

ポキリ、ボキツと身体のアチコチで変な音がした。

「……随分お疲れのようすな」

「まあな、春の訪れに気付かないぐらいにはお疲れさ」

窓の外に目を向ければ、柔らかな日差しの中で野良猫が日向ぼっこをしている。

何とも気持ちよさそうで羨ましい。

「メンマをお茶請けに、休憩でも……と申し上げたい所ですが、荀? 殿と逢紀殿が追加の書類を持ってくる前に今ある分だけでも何とかしておかねば、また睡眠時間を削ることになりかねませんぞ」

「分かっているさ……あの二人には容赦という言葉が無いからな」

二人揃って苦笑する。

荀？と逢紀。

あの二人と初めて謁見の間で相対した時、正直言って私はハズレを掴まされたと落胆した。

あんな馬鹿騒ぎを見せつけられれば当然だろう。

おまけにあの馬鹿騒ぎみたいな謁見が終わった後も、様々な揉問題を彼らは引き起してくれたのだ。

まず、逢紀が客将として啄郡に来た事を知った啄郡の十分の一にあたる官吏達が……家財道具を纏めて一斉に夜逃げをしようとしたあげく……城門近くで鉢合わせして大混乱を起こし、全員が門衛に拘束された。

調べて見れば、誰もかれも長年に渡りこそこそと不正を犯し私腹を肥やしている官匪であった事が判明し、次の日には逢紀が楽しそうに彼らの斬首と私財没収を進言してきた。

『斬首の逢紀』……その二つ名が、伊達ではない事を良く理解できた一件ではあったが、いきなり十分の一もの官吏がいなくなった事で、各部署で一時的に政務が滞った。

また、逢紀が斬首に勤しんでいるのと並行して荀？も問題行動を起こす。

どうにも彼女には男嫌いの気があったようで、事あるごとに男性文官達と反発しあい、その都度鋭い舌鋒で彼らの精神を破壊していくのだ。

彼女の『あんだ、不能であるだけに飽き足らず、無能なの？』という一言で大の男が零した涙の数は数えきれない。

まあ、結局何が言いたいかというと、あの二人を麗羽から預かって、

悩みのタネであつた人手不足は解消するどころかむしろ加速したという事だ。

あの時は、これは麗羽の嫌がらせか何かではと本気で疑い、彼女を怨んだ。

しかし――

「……あいつらのおかげで、私達は冬を越せたんだよな」
「まあ、それは間違いありません」

あの二人の働きが無ければ、私達がこうものんびりと『書類整理』なんて楽な仕事をしている余裕なんてなかっただろうし、窓の外の野良猫も啄郡の民の腹の中へと消えていたかもしれない。

着任早々官匪を一掃し、各部署の風通しを良くした上で作業の無駄を徹底的に省いた逢紀。

自分達が男であるというだけで、女の文官に留まらず太守の私や星まで舐め切っていた男性文官達を精神的に締め上げ、無理やり仕事に従事させた荀？。

起こした騒動は数知れないが、その分だけ確実にあの二人は功を積み重ねてきた。

特に大きかった功と言えば、荀？が立案し実行した穀物の輸入計画と、逢紀が軍師として従軍した異民族討伐戦による軍功だろう。

袁家が魏郡だけを治めていた頃襲った飢饉に対処すべく練られた食糧輸入法を更に効率化し、危険性を減らした荀？のおかげで、陸路を用いた？州、海路を用いた徐州と揚州からの輸入は無事成功を収

め、啄郡だけではなく隣接する三つの郡の民が飢え死にという末路から解放された。

未だ民は空腹に喘いで入るが今年の麦の収穫まではもつという確信……『死なない』で済むという確信があるだけに、その顔から悲壮感は大分抜けて来ているらしい。

またその時にかかった莫大な費用も、袁家と三度に分けて行われた四千頭にも及ぶ馬取引のおかげで既に回収済みというのは財政を預かる身として素直に喜ばしい。

そして、昨年の秋ごろ、例年の如く押し寄せてきた北方騎馬民族、烏桓族の侵攻を最低限の被害で抑えたのは逢紀のおかげである。荀？が穀物輸入計画や兵站の維持のため従軍できない代わりに彼を軍師として連れて行ったのだが、彼はこちらの予想以上に大きな働きをしてくれ、随分と戦いが楽になった物だ。

開戦前の軍議ではあまり献策もしてこず、正直これで軍師が務まるのかと思いつながら彼には弓隊三千を預けたのだが……この弓隊が敵に壊滅的被害を与えてくれるとは思いつかなかった。

突撃してくる敵騎馬軍団に最初の一斉射を外した時は、やはり駄目かと落胆し、私が率いる騎馬隊の力押しで何とかしようと突撃した。しかし、騎馬同士だとしても練度の高い敵軍に軍配が上がり、徐々に徐々に押され始めた。

あの時は潰走どころか最悪全滅を覚悟したのだが……それを逢紀の弓隊が見事に防ぎ、更には敵騎馬軍団を十度以上に渡る一斉射で削りに削った。そのおかげで体勢を立て直した私の騎馬隊の再突撃が上手く決まり、勝利をもぎ取れたのだ。

また、弓で馬をやらただけの烏桓族の捕虜が大量に手に入った為、私が彼らを上手く懐柔できれば長年の夢である精銳騎馬部隊『白馬義従』がつくれるかもしれない。

本当に、本当にあの二人には世話になった。特に白馬義従のめどを

たたせてくれた逢紀には――

「おや？ そのお顔、さては逢紀殿の事を想っておいでですか？」
「！？」

鋭い星の不意打ちに私は思わず、ビクンと肩を震わせてしまった。

「どうやら凶星のご様子」

「な、ななな、何を言っているのか、私にはさっぱりだぞ星」

「隠されるな。その恋する乙女表情を見せつけられれば、朴念仁すら察しますよ」

そういつて、はっはっはと笑う星。

あまりの羞恥心に私は自覚できる程顔を赤く染め上げてしまい、それをまた星にからかわれる。

だが、私だってやられてばかりではない。

たまには反撃だってするんだ。

「……そういう星はどうなんだ？」

「は？ 私ですか？ 私は別にあの様な地味な男など眼中に――」

「その服、逢紀に買ってもらったんだろう？ 良く似合ってるじゃないか」

「こ、これは、その」

しどろもどろになり、言い訳を探す星の頬に赤みが差す。

それを見て私はしてやったりという思いと同時に、少し複雑な感情を抱いたが……そちらは押し隠す事にした。

星が今着ている服は以前来ていた物と違い、胸元どころか肩や首筋

まで隠し、下の方も深い切れ込みこそあるが裾の丈は地面に付きそうなほど長い。

蝶の刺繍こそしてある物の、見る人が抱くであろう感想は以前とは真逆のはずだ。

そう、艶から清へと変わったのである。

「聞いた話によると、徹底的に侮辱された日から毎日色んな服を着て、彼の執務室を訪ねたそうじゃないか？」

「それは……あの男をぎゃふんと言わせ、私の名誉を回復させる為に仕方なくですな」

「で、結果的に何度も泣かされまくった挙句、最終的にあいつ好みの服を買ってもらったんだろう？」

「い、いや、そうではなく、私は『じゃあ、お前が趣味が良いと思えるのはどんな服なんだ？』と尋ねただけで、この服はあの男が勝手に買ってきて……」

「それ以降、毎日のように着ていると？」

「……」

とうとう押し黙ってしまった星を尻目に、私は私で勝利の虚しさを噛みしめる。

そして、それと同時に一つの焦りを覚えた。

「……そろそろ、だな」

「そう……ですな」

もうそろそろ、逢紀達を麗羽の元に返さなくてはならない。

いや、本来ならば冬が過ぎた辺りで返さねばならなかったのだが、何だかんだと理由を付けて引き延ばしていたのだ。

しかし、引き延ばし理由の種ももうそろそろ尽きる。

「麗羽本人は馬鹿だから、いくらでも騙せるが……」

「田豊とかいう文官が、袁紹殿に彼らの返還を促すよう積極的に動いているようですな」

「じゃあ、やはり……」

「五日後に控えている賊討伐等を利用して……伸ばせるとして、あと一月か、二月が限度でしょう。或いは大きな乱の一つでも起これば、話は別かもしれません」

「乱か……」

そんなもの起こらない方が良いに決まっている。

だが、幸か不幸かその予兆はあるのだ。

一時期の酷い飢餓状態から脱した漢全土の民達は、餓死という恐怖から解放された。

しかし、その代わりに彼らはとある感情を抱く事になったのだ。

それは……怒り、である。

何故自分達がこんな目にあわねばならないのか！

何故まじめに田畑を耕してきたのに、飢えねばならないのか！

何故官吏達だけが絹を纏い、ブクブクと肥え太っているのか！

飢えからくる怒りは強烈である。

既に漢全土、州を問わず各地で賊徒と化した農民の反乱が激化している。

以前は多くて一組織百人単位だったはずの賊徒が、今や大抵千人単位の大集団ばかりである。

もし、これらが全て何かを旗印として纏まりでもしたら……この世の全てを燃やす大炎となるだろう。

また、民草の噂では、天の御遣いなる者が流星に乗って現れて、乱世を治め自分たちを救ってくれるという、都合の良い救世思想が蔓延っているようだ。

これすなわち、多くの民が漢という王朝を、劉氏の天下を見限ったことに他ならない。

そして、何よりも問題なのは、中央で胡坐をかき美酒美食に溺れている朝廷の官吏達がこの事に気付いていなかったり、気付いていたとしても所詮は農民の反乱や戯言と侮り切っている事だ。

「乱世が……来るのかな」

「来るでしような、間違いなく」

星に肯定され、私はうなだれる。

はあっ、嫌だ嫌だ。

逢紀達は勿論、星も客将だしいつかは自分のもとを去るだろう。彼らが去った後、私はどうすれば良いんだろう？

「とにかく白蓮殿は、乱世に備え兵を整えておくことですな」

私の憂鬱を悟った星がそう助言してくれるが、それがどれだけ難しい事か分かっているのだろうか？

もうすぐ麦の収穫期だ。

下手に徴兵すれば農村から男手がいなくなり、収穫作業に支障が出る。

また、収穫期を過ぎても急な大規模徴兵は、大きな戦が起こるのではないかという大きな不安を民心に与えかねない。

……本当にどうにもならないな。

何処からか、優秀な将が仕官して来たり、百人でも二百人でも良いから志願兵が現れたりしないだろうか？

そんな甘い幻想を抱いてしまう自分の心の弱さが惨めに思えて仕方ない。

「……逢紀達、やっぱり返したくないなあ」

そう呟いた私の鼻を、何処からか流れてきた桃の花の香りがくすぐった。

第十一話 女神様春を感じる（後書き）

次回、あいつら登場。

でも、都合により明日は更新できません。
明後日は微妙。

第十二話 逢紀君拒否する（前書き）

まだだ、まだフルボッコ回じゃない。

第十二話 逢紀君拒否する

逢紀 side

「袁紹様の浪費癖の再発か……こりゃまた厄介な案件だ事」

「そうね……大至急対策案を考えて田豊に返信しないと、せっかく持ち直した財政が一拳に傾きかねないわ」

日差し麗らかな春の午後、俺と荀？ちゃんは公孫賛様から貸していただいている執務室で、冀州からたまに届く田豊からの悩み事相談に目を通して唸っていた。

「何でまた急に浪費癖が？ 顔良さんの話じゃあ、洛陽を出てから治ったって話だったんだけど？」

「治っていなかったってことよ。多分、今までは？復興という使命感が浪費癖を抑えていたのと、何かを買おうとしても袁紹様の眼鏡に合うような品が？には出回っていなかったってだけじゃないかしら」

なるほど、そういうことか。

だから、？復興の目処がつき、実際に市場が活力を取り戻して様々な物品が出回るようになった事により、袁紹様の中で燻り続けた欲求が一気に燃え上がってしまったのか。

「で、解決策はおありかな、荀文若殿？」

「……何かその口調ムカつくわね。まあ、良いわ。私としては兎に角、私達が戻るまで袁紹様をなるべく城内に閉じ込めて、？の街に出させないようにすることが肝要だと思うわ」

「んんんっ、それは駄目、悪手だね」

「……何だよ？」

「一度火がついた人間の欲望は、抑えつけただけでは消えないよ。むしろ、消火の機を逸したせいでより手のつけられないような大炎になる可能性が高い。それに、城に籠つても出入りの商人が何かしらの奢侈品を持ち込む可能性だってある。彼らに奢侈品を一切持ち込むな、袁紹様にそれらを見せるなんて言った日には彼らの不満と怒りを買って、？の経済がまたぼろぼろになってしまう」

俺の反論に、荀？ちゃんは悔しそうに顔を歪ませながらも「確かに」と頷く。

……いやまあ、偉そうに反論しておいて何だけど、俺に出来るのは駄目だしただだから、後は荀？ちゃん任せなんだよね。テヘ。

心の中で『頑張れ！　頑張れ！　荀？ちゃん！　負けるな！　負けるな！　ネ・コ・ミ・ミ！』と必死に太鼓叩きながら応援していると、不意に荀？ちゃんが「じゃあ」と切り出してきた。

「いっその事、外に出すっていうのはどう？　城内からじゃなくて……？から」

「なるほど。それなら奢侈品が目に入る事もないけど……名目は？」

「飢饉で苦しんだ農村の慰撫」

「最近の賊徒の激しい動きによる農民達の不安も、太守自ら出向くことによりある程度和らぎそうだな。けど、道中の袁紹様の身の安全はどうする？」

「顔良将軍が指揮する精兵千と、新兵二千を護衛に付けるわ。もしもに備えて、編成したばかりの騎馬隊三千もいつでも出動できるように待機させる」

「新兵の行軍訓練も兼ねるわけか。でも兵站はどうなる？　ちゃん

と整っているのか？ 訪問先に三千人分もの食料を供出何てさせたら、暴動、いや反乱がおこるぞ」

「大丈夫、兵站は万全よ。それに軍馬を農耕馬として貸し出したのが功を奏したのか、？ 近辺での今年の実りはここ数年見なかったほどの豊作だそうよ。おかげで兵站に回すだけでなく、義倉への備蓄も開始できるって田豊が連絡してきたでしょ」

そう言えばそうだったな、と俺は頷く。

そして、この計画に他に穴が無いか確認を開始。
すぐにとある穴に気付き、ポンと手を打つ。

「……袁紹様は気分屋な所があるが、大丈夫か？ 農村の慰撫なんて地味な仕事、途中で飽きて？に帰ったりしないか？」

「そこも考えてるわよ。訪問する村に事前に『太守様を万歳や拍手で迎えるように』と命令しておくわ。購買欲を始めとした欲望は、食欲や睡眠欲みたいな人間が生きる上で重要なものと違って、別の欲望で代替がきくはず。だから、農民達による歓迎や称賛の嵐を受け取った袁紹様は名誉欲を充足させて」

「？に戻っても無駄遣いはしなくなる、と。まあ、そこはかなり可能性としては低そうだけど、ある程度の軽減は確実だな。でも、農民の方はどうする？ そんなやらせみたいなさせて不満を募らせたりしないか？」

「貴人の訪問を歓迎するのは慣例みたいなものだし、軍馬を貸してもらっている恩がある以上、袁紹様への称賛には抵抗ないはずよ」

「もうひと押し欲しい。飢饉は太守の無能のせいだと考えている連中もいなくはないだろう。そういった奴らも喜びそうな利はないか？」

「先代と当代の区別のつかない連中も確かにいそうね。なら、彼らが街で売るために冬の間に作ったはずの籠とかの日用品をまとめて全部そこそこの値で買い上げさせるわ」

「豪儀だな。金は大丈夫か？」

「袁紹様が洛陽でやった浪費の額と比べれば微々たるものよ。それに、日用品の類はどうせ出入りの商人から買うことになるんだし、村から直接買えばそういった仲介者を省けて幾らかお得よ」

これで完璧か？

穴は、欠陥はもうないか？

何度も何度も頭の中で、今回の策に失敗する要因が無いか精査する。その結果として問題無し、という結論が出てきたため俺はふうっとため息をつく。

そんな俺の様子に、荀？ちゃんも安心したのか目に見えて肩から力を抜いた。

問題解決までの道筋が見えて気を抜いた俺達は、休憩がてらに袁紹様への愚痴で盛り上がる。愚痴といってもそれは不満や憎しみから来るものではなく、あえて言うなら手にかかる子供に苦笑いする両親のそれである。

「だから私は思うわけよ。袁紹様はもう少し――」

延々と続く荀？ちゃんの愚痴を聞きながらも、俺はこっそり胸をなでおろす。

幽州への出向が決まる前後の彼女に見えていた揺らぎのようなものが、今の彼女からは感じられなかったからだ。

何を悩んでいたかは知らないが、とにかくそれは解消したようである。

『荀？様、逢紀様、いらっしやいますでしょうか？』

荀？ちゃんの愚痴話がいよいよ佳境に差し掛かろうとした時、室外から声がかかる。

「いますよ。どうぞ入ってください」

入室を促した所、入ってきたのは俺たちの身の回りの世話をしてくれている女官の一人だった。

恭しく頭を下げる女官に、俺は用件を訊く。

「どうかしましたか？」

「公孫賛様がお呼びでございます」

「場所は？」

「謁見の間でございます」

「用件が何か聞いていますか？」

「公孫賛様の昔の御学友が訪ねて来られたので、紹介したいのとこのことです」

「分かりました。公孫賛様にはすぐに向かうとお伝えください」

「かしこまりました」

そう言って退室して行く女官を見送ってから、俺は一度荀？ちゃんと顔を見合わせる。

「この時期に御学友ねえ……」

「大方、私達がそろそろ？に戻るのを見越して、その穴埋めを呼んだんじゃないの？」

「まあ、そう考えるのが妥当なような気もするけど……」

何か無性にいやな予感がする。

予感などという曖昧かつ根拠の無いものを判断基準にしたくは無いが、どうしてもそれを振り払えないのだ。

仕方なく、俺はその場でパンパンと強く手を叩く。

シュタツ!!

一呼吸置いて何処からともなく黒装束に身を包んだ者が一名部屋に降り立つ。

かろうじて胸の膨らみから女であることが察せられるが、猫のように丸めた背や仮面のせいで、身長の高低や素顔の美醜といった情報は一切不明である。

彼女の名は張？、袁家が三郡を支配下に置いた際に情報収集を目的に雇い入れた細作の一人で、今は幽州においての俺や荀？ちゃんの目や耳となってくれている。

また、彼女は指揮官適性が高いうえに騎馬の扱いも上手く、騎馬による強行偵察、敵陣突破はお茶の子さいさい、更には武人としても十分一流と呼ぶに相応しい技量をもつという……ある意味完璧超人だ。

……ただ、袁家では細作といった裏方の役職を『華麗ではない、地味だ』とかいう微妙に頭の痛い理由で軽視する風潮があるため、彼女も正当な評価や待遇を受けていなかったりするので、ちょっとかわいそうな娘でもある。

そんな彼女を今呼んだ理由はただ一つ、公孫賛様の御学友について訊きたかったからである。

「御学友について何か分かっている事はありますか？」

「はい。門でのやり取りを配下の者が見ておりました。名は劉備玄德。公孫賛様と同年代の少女で、盧植塾において机を並べて学んだ仲のようです。連れが三名おりまして、一人は青年、一人は同年代の少女、残る一人はかなり幼く見える少女です。その内少女二人はかなりの力量を有した武人のようで、残る青年は見たこともない材質の衣服を身に纏っていたそうです」

うむむ？

武人の少女二人はともかく、その青年は何やら危険な気がするぞ？情報の精度が命な細作が『見たこともない』等と曖昧な表現をせねばならないような衣服を纏った青年……厄介事を持ち込んで欲しくは無いものだ。

「その劉備とやらが公孫賛様を訪ねてきた理由は？」

「どうやら客将として自分達を遇して欲しいようです」

公孫賛様が呼ばれたわけではないのか。

「あと、百人ほど彼女達が率いてきた男達がいるんですが……」

「ほう、百人も……」

それは助かる。

今の時期、将もそうだが兵も一人でも多く欲しい所だ。

何せ昨年の秋に攻め込んできた北方異民族との戦いで軍が受けた損害は、まだ回復しきっていないのだから。

いや、本当にあの戦いは……びびった。

開戦前の俺は公孫賛様に少しでもいい所を見せてやるぜ、蛮族共めかかってこい、フッハー！

とか、調子こいていたんだが、実際戦いが始まって弓隊に一斉射撃を命じたら……全部かわされちゃったよ。

何あれ？

仙人が使うとかいう瞬間移動？

とか思ったのは俺だけではないだろう。

本当の所は、山なりに飛んでいく矢が頂点に達したあたりで既に連中回避行動に入ってやがって、矢が降り注いだ時には全員が安全圏内への退避が終わっていただけなんだが……あの機動力はやっぱ反則じゃね？

騎馬隊なら袁家にも昔あったけど、動きの良さというか反応速度や旋回のキレが段違いですよ。

全力疾走の大人と、ハイハイする赤ん坊くらい……。

で、一斉射を回避された俺が慌てふためいている所に、信じられないくらいの速度で突撃かましてくるわ、あわや一方的な蹂躪という危機に公孫賛様が白馬に乗って颯爽と助けにきてくれるわ（胸がきゅんとしちゃいましたが何か？）の目まぐるしい展開。

正直言って逃げ出したかったんだけど、公孫賛様の前でのこれ以上の恥の上塗りだけは避けたかった。

だから、何とか敵の隙を見つけて援護射撃をしようと企んだんだけど……無理だった。

一頭の獣の如く見事な連携をみせる異民族の騎馬隊に隙なんて微塵も見当たらなかったんだもん。

だから仕方なく、隙を見つける対象を公孫賛様の騎馬隊に変更して対処する事にしたんだよな。

異民族どもは有能だからこそ、公孫賛様の騎馬隊の隙を見逃さずにそこを積極的に攻め崩そうとして来ていたから、俺達弓隊は味方が

隙を見せる機を窺っては突出してくる敵の出鼻を挫く。

挫き続ける。

そうしたらいつの間にか敵が壊乱していて、戦闘は俺達の勝利に終わっていた。

異民族超怖い。

その認識を俺に植え付けた一戦だった。

……つと、話がそれたか。

結局その一戦で公孫賛様ご自慢の騎馬隊は再編の必要性に迫られ、現在幽州内で暴れている賊五千に対して討伐に向かわせられる兵力は各城の守備兵を除いた三千強といった所でしかない。

明らかな兵力不足だ。

そのため、現在の公孫賛軍は義勇兵の募集を行うなど、絶賛兵士募集中なわけで……。

「練度がどの程度かは知らないが、そこは調練で――」

「あの、その百人の事なんですが……」

言いづらそうに口籠る張？。

そんな彼女を促して聞き出した内容。

俺はそれが耳に入り、脳に達した段階で、部屋を足早に後にした。小走りの荀？ちゃんが俺に並ぶ。彼女の険しい表情を見て、彼女も俺と同じ推測に至ったのだと察しがついた。

二人が揃って辿り着いた推測。

間違っていないだろう。

だが、間違っていて欲しいと切に願う。

『劉備達が連れてきた百人は、どうやら彼女の私兵というわけでも、志願兵というわけでもないようです。配下の者に聞き込みをさせた所、彼らは小金を貰って付いて来ただけですぐに解散するらしいのです』

旧友に客将としての仕官を願う劉備。

彼女がわざわざ百人もの人間を雇った理由とは何か？

単なる見栄であれば、それで良い。

だが、

もしも、

もしも、俺達の推測通りだとしたら、

「それは、あまりにも……惨い……惨過ぎる仕打ちだ」

公孫賛様は耐えられるであろうか？

数年ぶりに会う学友が、客将としての己の地位を高めるためだけに――詐欺紛いの策を弄してくるという非情な現実に。

「きつと……耐えてしまうのだろうかあの人は」

人が良い、良過ぎると言っても良いほど御方だ。

まず間違いなく、学友の仕打ちに耐えた上で、それを笑って許してしまう。

……だが、耐えたからといって傷つかないわけではない。

幽州という知り合いが誰一人としていない辺境に送られ、頼れる家臣もいない中、俺達の様な客将の力を借りながら政務を執り行う苦しい毎日。

寂しかっただろう。

辛かっただろう。

苦しかっただろう。

そんな地獄のような日々に耐え続けた末に行きついた先が……学友による非道な仕打ちでは、傷つかないわけがない。

だから、

だから、俺は願う。

「俺の推測よ、ただの邪推であってくれ！」

人の善なる心を信じきれない、俺の下種な勘繰りであれ！！

そんな俺の想いは――

――当然の如く裏切られ、昨年の？の冬明けと同じく、現実という名の存在の趣味が人の希望を嘲笑う事であることを再確認させられて

しまった。

荀？side

今、謁見の間にいる私の目の前で茶番劇が繰り広げられている。それも退屈極まりないどころか、反吐が出そうなほど不快な茶番劇よ。

詐術を用いて高い地位と権力を得ようと画策した劉備一行と、それを見抜いた上で謁見し、彼女達の所業を苦笑しながら許す公孫賛様。

何て、何て見るに堪えない劇なのだろう。

でも私達のこの場での立場はあくまで客将。

ただのお客様だ。

公孫賛様がこの場でなされることに口を挟む権利は無いし、許可なく立ち去るのもまずい。

「だけど、友としての信義を蔑にする者に――」

公孫賛様が信義について論じられておられるけど、劉備達が果たしてどれだけその内容を理解しているのか疑問が残るわね。

何せ一太守に平然とタメ口で話しかける無礼かつ非常識な『天の御

遣い』に、友情を踏みにじるかのような行為をしておいて『他愛無い悪戯』がばれて怒られた程度の反省しか見せない脳ミソお花畑な劉備だ。

この公孫賛様のお言葉も、塾で聞く講義の一つとしてしか捉えていない可能性がある。

私としては、これが公孫賛様からの『もう二度と私を裏切るな』という最後通牒のように聞こえるのだけど気のせいかしら？

……まあ、それよりも今問題なのは、

「……陽が、天上の陽が……陰ってしまわれた」

私の間横でぶつくさ言いながら、感情が全て抜け落ちたかのような表情をしている元上司^{ほうぎ}だわ。

天上の陽は……公孫賛様の事よね？

それが陰る……あの苦笑の事かしら？

……いいえ、そんな単純な話ではないはず。きっと、こいつの事だから公孫賛様が今浮かべている苦笑の裏に隠された『何か』を見抜いてしまったのかもしれないわね。

恐らくそれは……出来たばかりの『心の傷』の様な物。

だとしたら、本格的にまずいわ。

公孫賛様をあれだけ崇拝していた女神馬鹿が劉備達をこのまま許すとは到底思えない。最悪この場で何かいらぬ事を口走って問題を起こすだろう。

……趙雲が関羽や張飛といった面子と意気投合している今の内に、

不敬ではあるけど、この馬鹿を連れて退散したほうが得策かしら？

そう私が本気で考え始めた時、

「そうだ、星とはちよつと立場が違うが、客将として私のもとで働いてくれている二人を紹介しよう」

公孫賛様がこちらへと目を向けた。

向けてしまった。

自然と劉備達の視線もこちらに集まる。

「あちらの可愛らしい少女が荀？で、ちよつと地味目な男が逢紀だ。二人ともすごく優秀な文官で——」

私達の紹介を続ける公孫賛様はお気づきにならない。

馬鹿の様子が普段とは違う事に。

そして——

彼女は——

犯してしまう——

「で、二人には桃香達がこちらに慣れるまで、面倒を見て欲しいんだが……頼めるか？」

——一つの過ちを。

過ちに対する報いはすぐに、形と——言葉となって現れる。

「失礼ながら、その任、お断りさせていただきます」

恭しく頭を下げながらも、一步として譲る気配を見せない馬鹿。

公孫賛様は、私達に『命令』するか、はっきりと『頼む』べきだったのだ……『頼めるか？』等と、判断を私達に委ねるような真似をせず。

そうすれば、このように馬鹿が拒否するような事は無かったはずだ。

「……っ……理由を聞いても良いか、逢紀」

「はい、構いません」

「ならば、聞こう。お前は何故桃香達の面倒を見る事を拒絶する？」

馬鹿の拒否に一時的に呆けていた公孫賛様はしかし、すぐに太守の顔となり、逢紀を問いただす。

彼女の態度には『好き嫌いで言っているなら、考慮に値しない』という考えが浮き出ている。

そして、それに対する逢紀の返答は、

「私が彼らの面倒を見たくない理由、それは――」

ある意味私達の度肝を抜いたが、

「彼らが『斬首』に値する、大罪人だからでございます」

実に彼に似つかわしい物でもあった。

第十二話 逢紀君拒否する（後書き）

フルボッコは次回。

天の御遣い達を斬首にさせる理由とは？
無礼だとか、ハムを騙したからという理由だけでは……ない、かな
？

第十三話 関羽さん凹む（前書き）

くっ、四分の三ボツコくらいになっちゃった。

第十三話 関羽さん凹む

関羽 side

「彼らが『斬首』に値する、大罪人だからでございます」

その一言に対して、思わず「は？」と間拔けな声を漏らしてしまった。

そしてすぐに、ふざけるなという強い怒りが胸の内を占める。

私達が大罪人だなど、言いがかりにもほどがある！

私や鈴々は今まで多くの庶人を賊の魔の手から救ってきたし、桃香様はそんな私達に大望を与えてくださった徳の高いお人だ。

今はご主人様と呼んでいる北郷殿も天の御使いとして、大望を果たさんとする私達の力になる事を約束してくれた好青年である。

そんな私達四人が大罪人扱いされる謂れなど何もないし、それどころか、朝廷や地方太守の無能の尻拭いをしてやっているのだから感謝されてもおかしくはないはずだ。

あまりに理不尽な言いがかりに怒りを抑えきれなかった私はつい小さい癖で青龍偃月刀を構えようとしたのだが、謁見の間に入る際に衛兵に預けた事を忘れていた。

仕方ない、こうなれば無手で……と思った私だったが、すぐにそんな考えは霧散する。

無礼な発言の主たる男の文官の瞳に、

「ッ！」

気圧されてしまったのだ。

——馬鹿な、この私が、関雲長がたかが文官如きに!?

委縮しそうな心を叱咤するが、彼の一見凡庸そうな瞳に宿る鬼人の如き気迫に対抗は出来なかった。

知らず知らずのうちに一步後ずさり、唾を飲み込む。

……待て、そう言えば公孫賛様はこの男を『ホウキ』と呼んでいなかったか？

さつと全身から血の気が引く。

『ホウキ』という名に『斬首』という言葉の組み合わせは、私にとある名を二つ名を思い出させたのだ。

——斬首の逢紀——

庶人曰く、その者官匪の天敵なり。

西に不正を犯す官吏あらば千里を駆け抜けその首を落とし、東に私腹を肥やす官吏あらば万難を排してその首を落とし私財を没収する。

まさか、目の前にいる男がその噂の主だというのだろうか？

だが、斬首の逢紀は袁紹に仕えていると聞く、それが何故公孫賛様の下にいる？

混乱する私だったが、この状況がまずいという事だけは察せられた。

もし、目の前にいる男が本物の逢紀なら、先ほどの『斬首』という

言葉もただの脅しでは済まないはずだ。何せ嘘か本当かは知らないが、落とした官吏の首から頭蓋骨を取り出し、それを器に酒を飲んだという物騒な噂まである男なのだから……。

また、先ほど私が言いがかりと判断し、激昂した大罪人の件も分かってなくなってきた。

斬首の逢紀は、物騒な男ではあっても讒言で人を貶めるような人間ではないというのも、広く知られている事なのだ。つまり、大罪人云々も彼なりの根拠があって口にした事となる。

一体どうすれば良いのかと戸惑う私の態度に、桃香様達も不安そうな表情を浮かべ始める。

そんな状況を動かしてくれたのは、公孫賛様だった。

「……逢紀。お前が私の友人とその連れを大罪人と断じるのは、ちゃんとした罪状と証拠があつてのことだろうな？」

「当然でございます、公孫賛様」

「……言っておくが、先ほどの私を騙そうとした件についてはもはや問答無用だぞ」

「はい。公孫賛様を謀ろうとした罪は既に公孫賛様ご自身が許された事。私も口を挟みはいたしません。それに天の御遣いを名乗る男の、一郡を預かる太守様へ向けるには不適切と思われる態度や言葉遣いの数々も、公孫賛様が述べられた友達の友達は友達であるという考えを鑑みて、無礼と断じるつもりはございません」

う、やはり、ご主人様のあの気安そうな言葉遣いはまずかったか？ご主人様もなるべく丁寧な言葉遣いを心掛けられていたようだが……元々身分意識が強くないのか、端々に微妙な物が混じっていた。

しかし、逢紀殿がいう我々の大罪は、そういった物ではないようだ。では、何が、と首を捻る私の疑問に答えるように、真剣な表情の二人のやりとりが続く。

「では、お前の言う彼女達の大罪とは何だ？」

「大小色々な罪がありますが……まずは、小さい物……いえ、説明しやすい物からいきましようか」

そう言った逢紀殿が視線を公孫賛様から外し、私達へと向け直す。彼の鋭い視線に捉えられた私は、つい身を固くする。

「まず一つ目は……騒乱罪ですね」

「騒乱罪？」

逢紀殿の言葉に、ご主人様が怪訝そうな顔をされた。

その名の通り徒党を組み、騒ぎを起こしたりして誰かを傷つけたり、脅迫したり、或いは公共の利益を害する罪……という騒乱罪の意味が分かっていないようではなく、何故自分達がそんな罪に問われているのか分からないといった感じだ。

当然私も心当たりが無いので、毅然とした態度をとろう背筋を伸ばす。

「俺達身に覚えが無いんだけど……」

「良くもぬけぬけとそのような事を……貴方がたは、公孫賛様の御膝もとたるこの街で百名もの人間を集めたでしょうが」

「そ、それはそうだけど、でも別に何処かの店を襲ったりしたわけじゃなくて、ただ城まで歩いてきただけだぞ」

「ご主人様の言う通りだよ。私達誰にも迷惑何てかけてないもん」

ご主人様や桃香様の反論に、逢紀殿が頭が痛いといった風に額に手を添える。

「本気で仰ってるのですか？ 太守様の兵にはとても見えない、みすばらしい兵隊紛いの格好をした……端的言えば、ボロいながらも武装した百人もの集団が城の内門目指して大通りを練り歩く。これを目撃した民達がどれだけ不安な思いを抱くか理解できないのですか？」

「えっと……義勇軍が来てくれたとか誤解」

「するより先に、世間で噂されている賊が街に侵入してきたと疑い、恐慌状態に陥りますよ。略奪行為等をしなくとも、武器を所持した大集団というのはそれだけで民の心を威圧しますし、義勇軍なら自分達が義勇軍である事を示す為に『義』の旗の一つでも掲げますしね」

「あ、あはは……」

「笑って誤魔化さないでいただきたい。公孫賛様への詐術の為に集めただけの人員であったから『義』の旗を掲げるわけにはいかなかったのは分かりますが、しかるべき場所に、事前に訪問に關しての連絡を入れおいていただければ、我々の方から民に事前説明なり、事後説明なりがしっかり出来たはずなのです。なのにそれが無かった為、民は盛大に混乱したあげく、事態の収拾に乗り出した警吏達も曖昧で不十分な説明しか行えず、様々な流言飛語が街を駆け巡り、それを耳にした民の一部が家財道具を纏めて街から逃げ出そうとする始末だったと……謁見の間に私が入る際配下から情報が来ましたよ」

うつ、そう言えば、城に向かっている最中に周りの民から向けられる視線にまでは、気を配っていなかったな。

それに、私達の姿を確認した門衛達が慌てて門を閉じようとしたのは逢紀殿が仰ったような誤解の結果だろう。

その後しばらく待たされたのも、城内で情報が錯綜したせいかもしれない。

「しかし、逢紀殿。混乱は既に静められているのだろうか？ 幸い死者も出なかった事だし今回は軽拳を諫めるだけで済ませても良いのではないか？」

言葉に詰まる私達に、助け船を出してくれたのは公孫賛様の客将である趙雲殿だった。

私は出された助け船にほっとして掴まろうとしたが、

「……良いでしょう。では次の罪です」

残念ながらその船はスルリと何処かへ去っていく。

「まあ次の罪は、罪というよりも社会的に不利益な行為に該当するかと思いますが……犯罪者の道へと民の背を押した件です」

「「……え？」」

ご主人様と桃香様が、呆けたような顔で絶句する。

そのまま動かないご主人様達の代わりに反論すべく、私は意を決して口を開く。

「……それはもしや、百人の民を騒乱罪に加担させたということでしょうか？」

これならまあ、逢紀殿の仰りたい事も分らないではないが……。

「まあ、それもあります。私が言いたいのは、今後の彼らがどういった生き方をするか、という事ですよ」

「彼らの今後ですか……既にお金は払っているので、解散して元の生活に戻るのでは？」

はあっ、と盛大なため息を突かれた。
微妙に傷つく。

凹んでいる私の疑問に答えてくれたのは、逢紀殿ではなくその横で無言を貫いていた荀？殿だった。

「あんた達本当に馬鹿ね。確かにほとんどの人間は普通の生活に戻るかもしれないわ。でも、一部の人間は必ず犯罪に走るわよ」

「な！ どうして！」

「城に付いて行くだけでお金が貰えるなんて上手い話、何か裏があるって疑う奴が出て来るに決まってるじゃない。そういった連中が後々あんた達が公孫賛様の下で客将として高い地位に就いた事を知れば、今回の件の裏側にだってすぐ察しはつくわ。あんた達が詐術という不正を用いてその地位を得たんだって」

「彼女の言う通りです。そして、貴方がたの非道な行いを知った彼らの一部はこう思うでしょう『あいつらが上手くやれたのなら、俺達だって』と」

違う。

彼らはそんな事は考えない。

……等と私達は反論できなかった。

何せ彼らとは昨日今日知り合ったばかりどころか、金の切れ目が縁の切れ目という関係でしかないのだから。

むしろ、今回のような怪しい儲け話に乗る様な連中は、それだけ金に困っているか、犯罪に加担する事への忌避感が薄い可能性が高いので、誤った方向に走り易いと言える。

「実際、私が今まで断罪してきた官吏達が不正に手を染めたきつかけの大半も『上司や同僚が甘い汁を吸うのを見ていて、つい自分も……』という物でしたよ。そこから徐々に徐々に泥沼へと浸かっていってしまったのです」

「そうです……か……」

「ま、今回あんた達が取った馬鹿な行動は、民の範となるべき官の側に立とうとする人間のやる事ではなかったわね」

苟？殿の容赦ない言葉が私達の胸を貫いた。

ご主人様や桃香様は既にガクリとうなだれており、普段は能天気な鈴々まで私の服の裾を引っ張って「なあ愛紗、鈴々達悪者なのか？」と不安そうな顔で聞いて来る。

私にはそんな鈴々にかける言葉すら持ち合わせていなかった。

「では次の罪ですが」

既に精神的に打ちのめされている私達に、更なる逢紀殿の追撃が加わる。

「嘘や流言を用いて民心を惑わし、己の権勢を強め、利益を得ようとした罪ですね」

「えっと……それはどういう……？」

弱々しい桃香様の疑問に、逢紀殿が淡々と答える。

「そこの男が天の御使いだなんて称している事ですよ」

「そ、そんな……ご主人様は……本当に……」

「そうなんですか、北郷殿？ 貴方は劉備殿の仰る通り、本当に天から遣わされたのですか？」

「えっと……そういうことに……なってます」

「なってますとはどういう事でしょう？ もっとはつきり、天の御遣いなのか、そうではないのか仰ってください。曖昧なまま誤魔化せるとは思わない事ですよ」

責めるような逢紀殿の問いに、ご主人様は非常に気まずげに眉を垂れさせる。

「正直言うと、分からない。桃香達はそうだって言ってくれてるけど、俺自身にはそういう自覚はあんまりないし……俺の生まれた世界が、こことは違う事だけは確かなんだけど、神様みたいな何かからここで何かをしるとか言われたわけでもなくて……」

「……つまり、本人に御遣いたる自覚は無いと」

「で、でもご主人様がこことは違う天の世界から来たのはきつと間違いないよ。この服――」

「見た事もない材質の服ですね。ですが、それが何か？」

「……えっと、これが証拠に」

「なりません。見た事が無い程度で、証拠になどなるわけがないでしょう。西の彼方にあると言われる国々には私達の国に無いような摩訶不思議な物が沢山あると聞きます。これがそれらの品の一つだという可能性も捨てきれません」

ああ、とうとう桃香様が膝をつかれてしまった。

何とかお助けできないかと私も無い知恵を絞る。

「その……ご主人様が天の御遣いかどうかは別として、嘘や流言を飛ばすくらいで斬首はちよつと……」

もう少し、軽い刑罰で済まないかという私の後ろ向きな発言は、鼻で笑われた。

逢紀殿が、黙って聞いていた公孫賛様へと顔を向ける。

「公孫賛様にお尋ねしますが、領内でもし、不老不死の靈藥を求め
てはるか昔に東方へと旅立った『徐福』を名乗る人物が現れたりし
たら、太守としてどうしますか？」

「それは……恐らく、捕らえて斬首だろうな。民心に要らぬ動揺は
与えたくないからな」

ですよねえ、と頷いた逢紀殿が再び私へと顔を向ける。

その瞳が、もう反論は無いだろうなと確認して来ていたので、私は
コクリと頭を垂れた。

確かに、領地を治める側の人間からすれば徐福も天の御遣いも胡散
臭いという意味で大差ないだろうし、そういった輩を排除せねばな
らないという理屈も分かる。

「えっと、今ので三つ目でしたか。では残り半分ですね」

その逢紀殿の発言に私達四人は絶望させられた。

まだ。

まだ半分も残っているのか。

あと、三つの罪で私達は裁かれねばならないのか。

いつの間にか私達四人は震えながら寄り添うようにして集まってい
た。

「先ほど、北郷殿はこことは違う世界で生まれたと仰っていました
よね」

「ああ、そうだよ……」

「つまり、漢の生まれではないと」

「……それは間違いないけど……？」

それがどうかしたのかと、怯えた表情を見せるご主人様。
それに対し、逢紀殿は舞台役者の様な派手で大仰な動作で「ああ、
何て事だ！」と驚きを表現した後、本気で困り果てたかのように顔を
しかめて、桃香様に、こう告げた。

「困りますなあ、劉備殿……防衛の要衝たる太守の城のしかも謁見
の間にまで……異国の民を、そう『異民族』を連れ込むなんて!!」

逢紀殿が大声でそう告げた途端、

ゴウッ!!

と、凄まじい量の殺気が、四方八方から私達に押し寄せてくる!

「ヒイツ!」

「イヤアッ!」

私ですら息を呑むその膨大な量の殺気に、ご主人様と桃香様が悲鳴
を上げ、私に抱きついてきた。

「止せ! お前ら、止めろ!」

公孫賛様の怒鳴るような命令でようやく殺気が消えるが、謁見の間のあちらこちらから非好意的な視線が注がれ続ける。

恐らく、先ほどの殺気や視線の主は、謁見の間に見えないよう配されている衛兵たちの物だろう。

彼らは、漢の北方を護る幽州の精兵だ。異民族に対する感情が好意的な物ではないのは当然だろうが、まさかこれほどまでとは。

「すみませんねえ、ここにいる連中の中には身内を異民族に殺された人間も多くて」

まったくもって申し訳なさそうな口調ではない逢紀殿の謝罪に、私達は何も言えず、唇を噛みしめる気概すらなかった。

「まあ、我らが漢も全ての異民族と敵対しているわけではありませんが。国土防衛上重責を担う役職にある太守の前に、出自不明の異民族を無断で連れてこられては流石に……罪に問いたくもなりませんよ」

ギロリと鋭くなる逢紀殿の目つきに、桃香様が「そ、その、私、そんなつもりじゃあ」とかすれた声音で何かを言っているが、まともな反論になりそうになかった。

ご主人様に至っては、恐らく生まれて初めて向けられたのであろう『純粋なる殺気』にガクガクと震えるだけで、視線すら床に固定してしまっていた。

そんな二人の情けない姿に満足するそぶりもなく、逢紀殿が「五つ目……」と口を開く。

「これが最も重い罪状なのですが……」

とわざわざ前置きまでされた罪状は――

「皇帝陛下と漢王朝に対する謀反――反逆罪です」

シンッ。

と謁見の間全体が静まりかえった。

それだけ。

それだけ、重い罪なのだ――反逆罪は。

公孫賛様、趙雲殿もこればかりは迂闊に発言できないと口を噤み、荀？殿はこの展開も織り込み済みとばかりに平然とした態度で続きを待つ。

一方私達の陣営はと言えば、誰もかれも何を言われているのか分からないといった表情で呆けるだけで、もはや言葉もなかった。

そんな中、逢紀殿だけが何処か面白そうに唇の端を歪めて、説明を続ける。

「だって、北郷殿を天の御遣いとして仰いでいるんですから、これは当然ですよええ。何せ、天ですよ、天。我が皇帝陛下が何故『天子様』と呼ばれているのか、まさか知らないとは言いませんよねえ？」

ッ！！

心臓を鷲掴みにされた気分だった。

背筋にも槍が突き刺されたかのような痛みに似た感覚が走る。

「周代、周公旦によって唱えられた『天帝がその子として王を認め王位は家系によって継承されていく。王家が徳を失えば新たな家系が天命により定まる』という『天人相関説』が、この地における基本思想です。つまり、天帝の子である天子様以外の者が『天』を称すれば……」

現在の皇帝や、朝廷に対し、徳を失ったお前達に自分がとって代わってやるぞという謀反の宣言に他ならない！

ましてや桃香様は現在の皇室と同じ『劉』姓であり、中山靖王劉勝の末裔を称しておられる。世が世なら王として何処かの地に封じられていてもおかしくない高貴なお血筋。そんな桃香様が天の御遣いを担ぎ出せば、現在皇位についておられる陛下に対し、篡奪を目論んでいると疑われても仕方がない。

その事に思い至った私は悲鳴にならない悲鳴をあげかけるが、何とかそれを噛み殺す。

今、重要なのは私達に叛意が無い事を示す事だ。

「ま、待ってくれ！ 違うんだ！」

私と同じ考えを抱いたらしい、ご主人様が震える体に鞭を打つようにして反論する。

「俺や桃香達にはそんなつもりなかったんだ！ ただ、この乱世をどうにかしよう――」

「あゝ北郷殿。公式の場で今の世を乱世などと呼ぶのは止めた方が身のためですよ。思いっきり当代陛下の治世を批判している事になりますから」

「ッ！ だから、俺達が言いたいのもそうじゃなくて、俺達は謀反何て大それたことを考えていないんだ！」

必死にそれだけ言い切ったご主人様。

だが、逢紀殿はそんなご主人様の言葉にやれやれと肩を竦めるだけだった。

「まあ、北郷殿がそうまで仰るなら私は信じましょう」

「ほ、本当か！？」

「ええ、あくまで私は……ただ」

「ただ？」

「貴方や劉備殿の『お噂』を耳にした各郡の太守や現在反乱を起こしている農民達がどう思い、どのような行動に出るかまでは、私の預かる所ではありませんね」

「そ、それってどういうことだ？」

ご主人様の疑問に、逢紀殿はあっさり答える。

「現在反乱を各地で起こしている農民達。彼らだって馬鹿じゃない。各地で好き勝手に暴れ回った所で反乱などすぐに鎮圧されてしまう

事を知っている。だから、彼らは必死に集まろう、集まろうとするのですが集団を形成する際に必要な『核』が彼らには欠けているんです。つまり――」

「お、俺達がその『核』に担ぎ出されるかもしれないってことか？」

「ええ、貴方達の意志など関係なく、ね」

「じゃあ、各郡の太守達は……」

「袁家の情報網によると、最近朝廷で州牧制度の正式導入が決まったそうです。また、各州の州牧位に就く方々も劉姓の御方数人や九卿格の重臣数人が内定しているのですが……幾つか、席に空きがあるそうです」

「そ、それが俺達とどういう関係が」

「簡単な事です。太守達は州牧になりたい。州牧になる為に、地方の農民反乱の鎮圧なんて地味な功よりもっと派手な功が欲しい。例えば……天の御遣いを称する者とそれを担ぐ劉姓の者による謀反を鎮圧するといった、ね」

ね、と茶目っ気たつぷりな表情で言われた私達は、魂を抜かれた気分だった。

官、賊問わず、私達の存在を利用しようと動き出してきかねない危険な現状に、もはやどうして良いかも分からないのだ。

ご主人様は、頭を抱えて呻き、桃香様は絶望的な表情を浮かべてただただ首を横に振るだけ。鈴々もあまり話の内容は分かっているようだったが、私達が纏う重苦しい空気を感じたのか涙目だ。

公孫賛様は私達に同情するかのような視線を向けてくれているが、趙雲殿は苦虫を噛み潰したような顔で、荀？殿は片眉を跳ね上げた険しい顔つきだ。

逢紀殿は……逢紀殿の顔だけは、直視できなかった。

今の私には、彼があので咎人を裁くと言われている閻魔大王に思えて仕方が無いのだ。

「あ、そうそう、最後に残っていた罪状何ですがね。劉備殿や関羽殿は随分長い間各地を放浪されていたようですが――」

止めろ！

いや、止めてくれ！

お願いだから、もう止めて、許して！

私達が悪かったからもう責めないで！

桃香様がそう言っているのか？

いや、違う、私だ。折れかけた私の心が悲鳴をあげているのだ。無様に命乞いするかのごとく、ただただ懇願しているのだ。相手の憐みに縋れるよう、何とも情けない態で。

だが、そんな私の想いは届かず、閻魔が、どうしてもよさげ最後の罪状を告げる。

「ちゃんと本籍地の役所に、人頭税払ってますか？ 毎年、百二十
銭」

払ってない。

苟？ side

この男の敵に回るのだけは止めよう。

私は横を歩く、馬鹿を見つめながらそう心に決意したわ。

「それにしても、あんたあれで良かったの？」

「あれとは何だい、荀？ちゃん？」

普段通りのヘラヘラとした地味顔の男の人を食ったような態度に、私はため息をつく。

「劉備達の首を刎ねないで良かったのかって聞いているのよ」

その後、結局は公孫賛様の取りなしによって劉備達への断罪は曖昧なまま終わりを告げた。

その事をこの男が快く思っているはずはないのだが、ぱっと見上機嫌そうなので判断に困る。

「まあ、仕方が無いんじゃないかな？ この地の太守はあくまで公孫賛様だから。あの方が罪に問わないと仰れば、俺が勝手に首を刎ねるわけにはいかないよ」

「でも、反逆罪は、首謀者を庇ったり匿ったりするだけでも……」

「それに関しては劉備殿達が北郷殿を『天の御遣い』と称する事を止めると申し出てきたしな……ご主人様は固定のようだけど」

そう言って、歩みを止めない馬鹿だったが、私の疑念はますます深まるばかりだった。

この男がたった『あれっぽっちの』軽い憂さ晴らしで、完全に気を晴らしたとは思えない。

それだけ、こいつにとって公孫賛様とは大切な存在だったのだから。

私がそんな疑念を抱いているのを知ってか知らずか、ずんずんと馬鹿は歩を進め、とうとう執務室の前までたどり着いた。

そして、扉の取っ手に手をかけて――

「俺は思っんですけどね」

「何よ？」

「窮鼠猫を噛む……でも、猫は案外鼠が噛みつこうと飛び掛かってくるのを心待ちにしているのかもしれないね」

「何だよ？」

——顔だけ振り向いて、言う。

「だって、反撃してきた雑魚を思いっきり叩き潰す方が、快感がでかそうじゃないですか」

私はそんなことをほざく馬鹿の濁りの無い笑顔を見て、思う。

『絶対に』この男の敵に回るのだけは止めよう。

第十三話 関羽さん凹む（後書き）

罪はとりあえず六つ。

まあ、罪というより、作者の主観的にそれは駄目だろって奴が六つ。

一つ目は騒乱罪——この時代にあったかどうか知らないけど、普通正規兵以外の武装集団が百人も纏まって街中歩いたらパニックの一つや二つ、起きると思う。

二つ目は、罪とは言えないかもしれないけど、民に悪い見本見せやがって、て事。

三つ目は、流言飛語。萌将伝で徐福の話が出てきた時思った、何で一刀はぶっ殺されなかったんだろう？

四つ目は、異民族。良く考えれば、一刀は大和民族じゃん。ほいほいと国の要職に就いている人間に会わせて良いのか？

五つ目は、まあ、順当に反逆罪。何故原作で誰も突っ込まない？

六つめは、ある意味ギャグ。でも、人頭税は本当にあるので劉備や関羽の脱税疑惑は濃厚。税の免除の条件である兵役に就いている最中でもない、ただのプーだもんあいつら。

とまあ、六つ罪をあげてみましたが、こんなの罪じゃねえという意見や、もっと他にもこんな罪が、という意見がありましたら感想へどうぞ。

第十四話 逢紀君困る（前書き）

黄巾編の導入部

第十四話 逢紀君困る

逢紀 side

人の噂も七十五日。

まあ、簡単に言えば、人々の間に回る噂なんてものは、時が経てば煙のように消えてなくなるってことだ。

だから、あまり噂何て気にしない方が良い。

下手に騒げば騒いだ分だけ噂が逆に広まり、痛い目を見る。

そう思っていた昔の俺、いっぺん死んでこい！

「こら！ いい加減引き籠もるのを止めて出てきなさい！ チ○コ元上司！」

「やだいやだいい！！ あんな噂が出回る外の世界何かに誰が出ていくもんか！！」

部屋の外で騒ぐ苟？ちゃんの呼びかけを拒絶しながら、俺は寝台の上で頭からすっぽり布団を被って丸くなる。

もしこんな俺の姿を見て「大の男が真昼間から……」とか言う奴がいたら出てこい。俺と同じ目にあわせてやる。

そうすれば、俺の気持ちを理解――

「何よ！ 前からあった物騒な二つ名が、ちよっと増えて進化しただけじゃない！」

「ちよっと！？ あれがちよっとだと！？」

「そうよ！ 『断罪の首狩り官吏』とか『笑う鬼畜審問官逢紀』なんて――」

いやああああああああっ！！
止めて！

もう止めてあげて！

逢紀君の生命力はもう皆無よ！

あの劉備一行との出会いから早一月。

その間俺は、將軍よりちよい下の上級武官格の客将として迎え入れられた劉備達に張？を監視として付けつつ、真面目に政務に励んでいたのだが……つい、十日ほど前にとある問題が発覚した。

謁見の間での出来事しよけいの顛末が、何処からどう漏れたのか知らないがいつの間にやら市井にまで噂として広まっていたのだ。

それだけなら俺としてはどうでも良かった。

いや、緘口令を敷いてもらっていたはずのあの件が漏れたのは問題ではあるのだが、その問題の解決は専門家が頭を悩ませるべきことであり客将でしかない俺にとっては管轄外だ。

俺が頭を悩ませているのは、その噂をもみ消すのを怠った為に至ってしまった結果と、人から人へと伝わるごとに内容が物騒な方向へと変貌を遂げ続けた噂が、実際にあの時起こった出来事とはかなり乖離してしまった事だ。

……いや、本当にありえん内容なんだよ。

俺が罪の数だけ相手の指をへし折ったとか――

あまりの恐怖に涙を流す幼女ちようひを見て興奮し、洛陽にまで届きそうな哄笑を響かせたとか――

劉備達の首をその場で一度斬り落とし、頭部と胴体を絹糸で縫い合わせてから死霊術を使って思うがままに操っているのだとか――

……何故に啄郡の民はこんな噂を信じたのさ？

俺ってそんなに信用ない？

そんなに悪逆非道に見える？

もしかして、俺が気付いていなかったただけで今までも……？

そんな思いに囚われ鬱になった俺の引き籠もり生活五日目の昼が、
今まさにこの時である。

「本当にしっかりしないさいよ！ 袁家の看板に泥を塗る気！」

くっ、そこを突かれると辛い。

……よし。

俺も男だ。

主家である袁家に迷惑をかけるくらいなら――

「泣き喚いて命乞いする劉備達を燃え盛る炎で熱した鉄板の上に裸足で立たせて『お前らの悲鳴はどんな声色だあっ!? げひゃひゃひゃああああああっ!』とか叫んだっていう最新の噂はまだこの城内だけの物だから、安心して出てきなさい!」

色々間違いあり過ぎじゃね、それ!?

……ん? 主家? 袁家? 何それ?
引き籠もり辞める理由になるの?
泥?

塗りたければ良いんじゃないかな?

苟? ちゃんの気配が扉から遠ざかってから一刻後、俺はのそのそと寝台から這い出し、扉を四分の一ほど開けた。
別に引き籠もりを止めたわけではない。

ただ、扉の前に置かれているだろう昼食と、本日文の仕事用書類を回収するだけだ。

「つてか、荀？ちゃん実は俺をここから出す気ないんじゃないか？目障りな奴はここに隔離してやる気満々何じゃ？　はははっ、まさかな。ここに来る度に新しい俺の噂をお披露目してくるけど、まさか、そんな………止そう。『計画通り（ニヤリ）』とか笑う荀？ちゃんの姿が思い浮かびそうで怖い。それよりご飯ご飯……今日のご飯は……麦粥のみか。段々質素になって来たな」

引き籠もりの癖に生意気言っていると思われるかもしれないが、俺の発言は別に食事内容に文句をつけているわけではない。

ただ……憂いているだけだ。

幽洲の、河北四州の、ひいては漢の未来を。

「黄巾党とか言ったか？　連中が暴れ出してからたったの二月で、こうまで城内の食糧事情が悪化するとはな」

劉備達と出会う一月ほど前に、袁紹様が治めていない冀州のとある郡で黄巾党と名乗る賊の集団が現れた。

その報告を聞いた時、俺はただ「また新しい賊が現れたか」としか思わず特に注意を向けていなかった。黄巾党出現の少し後に田豊から送られてきた書簡にも特に連中について懸念しているような様子は無かったので、気にもしなかったと言っても良い。

しかし、黄巾党はその郡を治めていた無能極まりない悪徳太守をあつさりと討ったばかりか、近隣の賊徒を糾合して瞬く間に勢力を拡大し、気付けばその影響力は河北四州全土に及ぶようになっていたのだ。

「このままいけば、黄巾党の活動が河北四州から、漢全土に飛び火するのは時間の問題だな」

そうなる前に、奴らを叩きつぶし、騒ぎを鎮静化させたいのだが……：そうそう事は上手く運ばない。

何せ連中は河北の賊徒がほぼ全て集まっただけあり、とにかく数が多い。

各郡の太守が各個に討伐を行おうとしても、圧倒的なまでの数の差で返り討ちにあうのが目に見えている。

じゃあ、太守達が連携してと考えるのが普通だが、残念な事に現状それは不可能だ。

何故なら、連中がでかい図体を有効活用するようにして、万に近い軍勢が行軍可能な街道の幾つかを封鎖しやがったからである。

「百単位の軍勢なら行軍できそうな小さな街道もあるにはあるが……」

万に近い軍勢で行軍しようとしたらまず間違いなく軍列が縦長のひよろひよろとした物になるだろう。

そこをもし、黄巾党に突かれてもしたら目も当てられない惨状となるはず。

「むしろ、それが狙いか？」

公孫賛様が情報交換の為に近隣太守の下へ派遣した使者が帰ってこない。

これは多分、俺が先ほと言ったような小さな街道を通ろうとして、伏せられていた黄巾党の賊徒に討たれたのだろう。

「奴らの狙いはともかく……奴らの正体が、首謀者が見えてこないのはどういう事だ？」

普通賊徒の親玉と言えばコソ泥などとは違い、高らかに自身の名を天下に叫ぶものである。

悪党のくせに生意気ではあるが、面子の問題らしい。

「幾つかに分けられた集団のまとめ役……將軍格みたいな連中の名前は分かって来たんだがな」

波才とか、馬元義とか。

しかし、首謀者だけの名前はどうしても分からない。

公孫賛様が以前それを調べるべく、黄巾党の主力が集まっていると思しき場所に人を送り込んだのだが……数日後帰って来たそいつは何故か「すげえ……」「可愛いかった」「ほああああああああっ！」等と意味不明な言動を繰り返すだけで役に立たず、あろうことが数日後には黄巾片手に出奔しやがった。

ぐうううううっ。

あれこれと考えると腹が盛大に鳴ってしまった。

「とりあえず、食おう」

寝台に腰掛け、匙で麦粥を掬って口へと運ぶ。

「……塩味がしないのは、いざという時の為の節約か」

さっきも言ったが、ほとんどの街道は既に黄巾党の手に落ちたと考

えて良い。

その為、遠い中央や河南から物資が届かないのは勿論の事、河北を中心に回っている行商人達もこの街に姿を現さないし、朝一で青物を売りに来るはずの近隣の農民の数も激減した。

「このままじゃあ、物資を大量に消費するだけの各街はジリ貧だねえ」

そうぼやいた所で黄巾党は消えて無くならないし、おかずの数も増えない。

「……今日食った分と、明日食う分位はしっかり仕事をしますか」

食い終えた麦粥の食器を部屋の外に出し、俺は執務机へと向かい仕事を開始する。

「……これは駄目。ここは……下手すりゃ木材の備蓄が切れるからそちらの確認をして欲しい、と。……よし、こっちは大丈夫」

まあ仕事といっても苟？ちゃんが作成した書類の駄目だしが主なんだけどね。

だって、俺が自分で何かを無から作り出すとか、非効率的なんだから。仕方ないよね。

情けないと言わないで……これは、そう、適材適所なのだから。

一刻ほど駄目だしを続けた俺は、次に公務関連ではなく私的な書類に目を通しだす。

「……袁家からの書簡は無しか。街道が封鎖された以上当然と言えば当然だな。無理をすれば何とかなるとは思うが……」

一面にただひたすら「帰ってこい」という言葉『だけ』が乱舞する田豊からの書簡を見なくて済むようになったのは幸いだな、うん。それにしても、あいついつからあんなに心を病んだような書簡を送ってくるようになったんだろう？

……確か、そう、俺が公孫めがみ賛様の素晴らしさを広めようと、彼女の魅力を返書に書きまくった辺りだったな。

という事は……やっぱり、あれか、職場環境の格差が原因か？

まあ、あっちは頭痛の種にしかない袁紹様の御守で辛いんだろ
うな。そんな所に「どうだ、俺の職場の主はすげえんだぞ」的な返書が来れば、心の一つや二つ、病むのも仕方ないだろう。

「まあ、街道の治安が悪化しまくりで帰れない？の事はさておき……問題は」

俺は手にしていた竹簡へと視線を落とす。

そこには、張？が調べ上げた劉備達一行の動向が書き記されていた。それもかなり詳細にである。朝何を食べて、昼誰と会って、夜いつごろ寝たのかまで、はつきりとだ。

武人としては超一流と評するに値する関羽や張飛相手に良くここまで調べられたものだ、張？及び彼女の配下の手腕に脱帽する。

「今の所……特に問題行動は取っていないか」

二、三これはどうよ？

という物もあるが許容の範囲内ではある。

まあ、当然だろう。

あれだけ脅し紛いの警告をしたのだから。

ただ、彼女達が問題行動を取っていないからといって、問題自体が無いわけではない。

どうにも例の物騒な噂が民の間に広まったせいで、副次的に北郷一刀が天の御遣いかもしれないという認識までもが啄郡全体に浸透していつてしまったのだ。

これに対し劉備達は必死に否定して回っているのだが、人間は基本的に信じたい事を信じようとする生き物だ。本人達が否定した所で「謙遜しているのだ」とか誤解されたり「官吏達の追及を逃れる為に仕方なく身分を隠しておられるのだ」と鋭い所を突かれたりして、噂が広まるのを止め切れていない。

このままでは、黄巾党の活動が漢全土に広まるのが先か、天の御使いの正体が漢全土に広まるのが先か……。

どちらにせよ嫌過ぎる未来予想図に俺は手にしていた竹簡を置く。

眉間に寄ってしまった皺をほぐしていると、窓から見える外の景色が、今が夕暮れ時である事を教えてくれた。

「気分転換に外にでも出るかな？」

引き籠もりだって、何も一切部屋から出ないわけではない。

厠や風呂に行く時だって、部屋からは出るのだ。

なあに、誰かに会っても無視するか、急いで部屋に戻れば良いだけの事だ。

そんな誰に向けたのかも分からない言い訳を心の中でしつつ、俺は

扉を開けて――

「おや？ 珍しくお出かけですか？」

――一抱えもある大きな徳利を手にした趙雲といきなり鉢合わせした。

如何にもこれから一杯やりに行きますという態度の彼女の背後には、

「ん？ 何だ、逢紀、お前も一緒に飲むか？」

女神様がいたわけで――

「飲みます。むしろ飲ませてください！ 口移しゲフンゴフンッ！
口移しで！！」

「何故言い直した!？」

「はっはっは、愛されておりますな白蓮殿。なに、逢紀殿がどうしても口移しをお望みなら、この趙子龍が代わりに――」

「黙れ元ケバ女! 貴様は手酌で一人で飲んでろ!」

「ひ、酷過ぎではございませぬか私の扱いが!!」

「お、落ち着け二人とも、そもそも私は別に嫌だとは……」

「「……え?」」

「あ……」

――俺は五日間に及ぶ引き籠もり生活に終止符を打った。

第十四話 逢紀君困る（後書き）

次回は飲みながら三人がお話します。

第十五話 逢紀君飲む（前書き）

ハム信者よ！ 今こそ立ち上がる時である！

ジーク・ハム！

オール・ハイル・ハム！

ハーム！ ハーム！ ハーム！

第十五話 逢紀君飲む

逢紀 side

……俺もう死んでも良いや。

とうの昔に陽が落ちた時分、城内の庭にある薄暗い東屋でそんな事を思いながら俺は杯を口元へと運ぶ。

趙雲秘蔵の揚州産米酒の品の良い香りが鼻をくすぐり、舌の上で甘露が踊った。

「……こおらあつ、ちゃんと聞いているのかあつ、ほうきいいいっ」

「勿論でございますとも女神様!!」

この会話だけでも状況は分かってもらえるだろう。

実は俺、酔っぱらった公孫賛様に絡まれているんだ。

しかも、単なる会話的な絡みだけでなく……肉体的にも。

具体的に言えば、左手で杯を仰ぐ公孫賛様の右腕が俺の首へと回されていて、ほど良く赤みが差したご尊顔なんて俺の左肩に半ば乗りがかっている。ちょっと俺が顔を横に向けどもしたら、あれだ、唇同士が不慮の事故を起こしかねない距離だ。

お、おおおお、おまけにその、何だ、胸が、ちょっと、こう、あれだ、俺の腕に……デヘリ。

「……むう。ほうき」

「何ですか女神様？」

不意に公孫賛様の声に陰が混じるが、不用意に顔を動かさない俺は、正面でチラチラとこちらに視線を送ってきては一人寂しそうに酒を飲む趙雲を見つつ返事をする。

「わたしはあっ……公孫しゃんだ」

「……」

相槌を打たなかったのは、あれだ。

呂律の回っていない公孫賛様のお声に、胸がきゅんきゅんしてたからだ。

「まにゃは……ぱいれんだ」

「……」

「わかってるか？　ぱいれんだじょ」

だじょおおおおおおおおおおお！？

何この可愛い生き物？

お持ち帰り？

お持ち帰りして良いの？

「……酒の力を借りて真名を預けようとするから、そうなるのです」

何やら趙雲がボソボソ独り言を言っていたが、俺の耳には届かない。何故なら今の俺の耳は酔っぱらった公孫賛様の愛らしいお言葉を拾うのに必死だからな。

しばらくの間自分の真名を連呼されていた公孫賛様が、不意にくたりと全身から力を抜き、あろうことか俺の膝を枕代わりに横になっ

てしまわれた。

脳内では第二次女神様祭りが繰り広げられていた俺だが、膝の上に乗る公孫賛様の横顔に陰の気を見てとって気を引き締め直す。

正面の趙雲へと視線だけで確認を取ると、彼女ははっきりと頷いた。

どうやら今夜のささやかな酒宴は、この陰の気を払う目的で趙雲が開いたようだ。

「公孫賛様、何か嫌なことでもございましたか？」
「うーん？」

煩わしげに呻いた公孫賛様であったが、やはり胸につかえていた物があつたのか、口先をとがらせながら語りだした。

「にゃあ……ほうき」

「はい」

「私は……むのようにゃのか？」

「はあ？」

多分、無能なのかという問いなのだろうが……。

「公孫賛様が無能ならば、この国の九割九分九厘の官吏達は辞表を書かねばなりませんね」

これは世辞ではない。本心だ。

官匪がどうのこうのではなく、どれだけ清廉潔白で有能な官吏であろうと、文官武官を問わずその大半は公孫賛様に遠く及ばない。

だが、公孫賛様は俺の言葉をただの慰めと取ったらしく、相変わらず不貞腐れたような態度を取り続ける。

「でもにゃあ……民達が」

「民が、どうかいたしましたか？」

「……私よりも……桃香達を……好いてるんだ」

「……」

「この前も――」

公孫賛様の話の内容を要約するところだ。

ここ最近、客将である劉備一行の名望が急速に高まりつつある。

それは何も、天の御遣い云々という噂が広まっただけでなく、彼女たちを迎え入れてから行われた数度の賊討伐における活躍が兵を介して民にも認知されてきたからのようだ。

特に街に住む子供達などは劉備や北郷を慕い、たびたび遊んでもらっているようで、その光景を見た大人達まで彼女達を人徳者として敬うようになっていく。

口さがない者達の間では、いっその事公孫賛様に代わって劉備が太守となった方が啄郡の為であるときえ噂されているらしい。

公孫賛様の話を聞き終わった俺は、暗澹たるため息をついた。

ため息の理由は単純だ。

今回の一件、解決策が一切ないからである。

前回とは違い今回は劉備達にこれといった罪は無く、無闇やたらに劉備達や民を処断すれば、確実に公孫賛様の名に傷が付き、民心が離れてしまうだろう。

だからと言って、このまま放置するのもまずい。要らぬ火種は可能な限り消しておかねば、気付かぬ内に業火へと変貌を遂げかねない

のだから。

さてさて、どうしたものやら……と悩みつつも、俺はひとまず膝の上でくすくすんと半泣き状態にある公孫賛様を慰める事にした。

「公孫賛様。まずご理解いただきたい事は、貴女様が劉備殿や北郷殿に劣ってなどいないという事です」

これまた偽らざる俺の本心である。

二人の兵の統率力、知力、武力等を比較すれば自ずと全てにおいて公孫賛様に軍配が上がるのだから。

まず兵の統率力だが、公孫賛様は一万の軍勢を率いてもしっかりとその手綱を握れる。しかし劉備や北郷は自分一人では、千人ほどですでにまともな指揮はとれない。

彼女達の統率力ではせいぜい百人隊程度の隊長が関の山だ。賊の討伐における活躍と言うのも、全て配下である関羽や張飛の個人的武勇からくる突破力や士気の高さによるものであり、指揮能力の賜物とは言い難い。

まあ兵の統率に関しては、兵学に関する机上の理解度だけではなく、実戦経験がかなり物を言うので兵を率いるのは初めてらしい劉備達と比べればこの結果は当然ともいえた。

次に知力だが、これもまたまたあっさり公孫賛様が上だとはっきり言えた。

北郷の方は文字が読めないだけで、それなりの理解力があり、発想力、計算力に関してはあの荀？ちゃんすら瞠目したほどである。だが……太守に成れるほどかと聞かれれば首を捻らざる負えない。

なぜなら彼には圧倒的なまでに論語等の『学問的知識』や生活面における『一般常識』が足りないのだ。これではいくら才能があっても、優秀とは呼び難い。

また、劉備は……本当に盧植塾出身なのか、疑いたくなる程度のおつむであった。

経済学の基礎である需要と供給の概念すら理解していないと知った時の俺の驚きを察して欲しい。

昼食を奢るという約束をして張飛からこっそり色々聞きだした所、彼女達が公孫賛様に仕掛けた詐術についても北郷や関羽が詳細に説明するまで良く分かっていなかったらしく理解力にも乏しそうだ。盧植が何故に彼女に太鼓判を押したのか、丸で分からない。流浪の時期が長くて頭の回転や知識が錆付いたにしても酷過ぎる。

最後に武力だが……これは詳しく語るまでもない。

趙雲や関羽、張飛といった生粋の武人には及ばない公孫賛様だが、下級武官と中級武官の間程度の技量しかない劉備や、一般兵に毛が生えたくらいの北郷では比べる事すらおこがましい。

そう言った旨を俺が懇切丁寧に諭した結果、公孫賛様の表情はやや和らいだが、それでも幾らかの陰が残っていた。

「……子供がにやあ……慕っているによは」

そう漏らした公孫賛様の表情は、かなり暗い。

恐らく、能力の優劣以上に、民に慕われているかどうかがこの人にとって重要なのだろう。

だからこそ、俺は断言せねばならない。

貴女は劉備以上に民に慕われていると。

一切の虚心無く、真実そう思うが故に。

「公孫賛様。何故劉備殿達が、子供達と遊べたと思いますか？」

「んんん？ それは桃香が……ころもに……慕われちえるかららりよ？」

「私が申し上げたいのは、慕う慕わない以前の話です」

「……？」

「……はあつ。良いですか。幽州の他の郡では、よほど裕福な家庭の子供しか『遊ぶ』何て贅沢な真似はできません」

「はあつ？ ころもは遊ぶもによらろ？」

「いいえ、違います。子供は……子供も、立派な労働力です。ただでさえ労働力不足に悩む農村は元より、他の郡では、街中に住む者達も子供を昼間から遊ばせておく余裕なんてありません」

「……」

「では、何故啄郡では子供を遊ばせていられるのか？」

公孫賛様はお答えにならない。

それもそうだろう。

謙虚な御方だ。

自分が太守だから等と、豪語するなんてありえない。

だから。

だからこそ、俺が言うのだ。

「貴女が啄郡の民をお救いになったからですよ」

「ッ！？　だが、それは」

不意に酔いから覚めたように否定しようとする公孫賛様の唇に、俺は人差し指を押し当てて制する。

「私や荀？がこの街に初めて訪れた時、大通りにはある程度の活気がありました。しかし、見かける民は皆大人か年寄りばかり、たまに見かける子供は皆何かしらの仕事や家の手伝いの最中でした。公孫賛様がこちらに赴任してきた折は、恐らくもっと酷い有様だったのでしょうか？」

「……ああ……皆、生きる希望を何処かに置き忘れたかのような顔つきで、毎日毎日、賊による押し込みや人攫いによる女子供の誘拐に怯えていた。昼夜を問わず門戸を閉ざしていた家なんてざらで、開いている店の数は微々たるものだったよ」

「それが今や、大通りには活気が満ち溢れ、一つ路地に入れば子供達の笑い声がこだまする……」

全ては。

全ては、公孫賛様のおかげなのである。

俺は知っている。

俺の膝の上に頭を乗せるこの少女が、暗雲に覆われた啄郡の中でただ一人何一つ諦める事無く、軍を率いて自ら剣を振るって賊を討伐し、筆を取り睡眠時間を削ってまで内政に励んだからこそ、今の啄郡があるのだ。

彼女が趙雲を客将として迎え入れ、袁家に頭を下げる形で俺達を借り受けるなんて恥辱に耐えたからこそ、啄郡に住まう者達の、子供達の笑顔があるのだ。

「民達も知っています。誰が昨年秋に襲来した異民族を追い返したのかを」

「……」

「民達も分かっています。何故自分達が飢えずに今年の冬を越せたのかを」

「……逢紀」

「民達も理解しています。誰のおかげで、この街に希望が蘇ったのかを」

「わ、私はっ」

俺はただ、公孫賛様の髪を一撫でして、続ける。

「子供達は割と直感で目の前の人間が悪人であるかどうかを判断できます。だから、劉備殿達を慕うのは当然でしょう。彼女達は紛れもなく善人なのだから。ですが、子供の親や周りにいる大人達は、ぱっと見善人でも中身がそうでない人間がいる事を良く知っています。そんな彼らが何故、子供達と遊ぶ劉備殿や北郷殿を人攫いの手先と疑わず、信頼して見守っているのか？」

「それは、天の——」

「違います。彼らは天が自分達を救ってくれない事を……自分達が一番苦しかった時に何もしてくれなかった事を知っています。ですから、天の御遣いという声望だけではあても容易く胸襟は開きません」

「だったら……？」

眉をしかめて不思議がる公孫賛様に俺は告げた。

「劉備殿達が……『公孫賛様のご友人』だからですよ」

何を言っているのか分からない。

一瞬、そんな呆けた表情見せた公孫賛様だったが、すぐにその瞳に大粒の涙が溢れ出す。

ようやく理解したのだろう。

自分がどれだけ、民に慕われているのかを。

「自分達をお救いくださった公孫賛様のご友人だったからこそ、民は劉備殿達を最初から何ら疑わず、警戒も抱かず受け入れたのです」

その結果、民達の信頼をしっかりと得たのは劉備達の誠実な人柄であろが、きっかけは間違いなく公孫賛様の今までの実績である。もし、ここが公孫賛様の治める地でなければ、あるいは公孫賛様が悪政を敷いていれば、こうも簡単に劉備達が民と打ち解ける事は無

かったはずである。

だから俺は、何のためらいもなく公孫賛様に言うのだ。

——貴女の行いは間違っていない。

——貴女の善政に民は感謝している。

——貴女は民に慕われているのだ。

「一部の口さがない者達だって、本気で言っているわけではありませんよ。本気ならば、噂を揉み消して、陰でこそこそ策動し——」

膝上で涙を流し、泣き声を懸命に押し殺す少女にはもはや言葉は届かないだろう。

いや、そもそもこれ以上言葉を重ねる意味が無い。

もう、彼女は理解すべき事を理解したのだから。

俺は黙って彼女の頭を撫でた。

ずっと沈黙を貫いていた趙雲が徳利の口をこちらに向けてきたので、空の杯を差し出す。

トクトクトクと、酒が一気に満たされた。

俺は一度だけそれを天上の月に掲げ、一息に飲み干す。

やはり、旨い。

泣きつかれたらしい公孫賛様が眠りに付き「……白蓮殿は酔われた時の記憶が残りますから……明日が見物です」などとあくどい顔をして趙雲が彼女を寝室へ連れて行き、飲み会はお開きとなった。

俺もやや千鳥足気味になりながらも寝室へと戻り、寝台へと身を沈めた。

眠気はすぐにやってくる。

「……また、あの二人と旨い酒を飲みたいものだ」

そんな日がいつか来るだろうか？

来て欲しいと思う。

そして、叶う事ならば、そんな日々が続け良い。

無理だと分かっている願いだからこそ、より強く願ってしまった俺は苦い思いを僅かに胸に秘め、眠りへと落ちた。

名望を高める劉備達への対策は明日に後回しにして――

そして翌日――

「公孫賛様！ 出て来てください！ 政務のお時間です！」
「ほ、逢紀！ ち、違うんだ！！ 昨日のアレは酔っていたからで
！！ 私には簡単に身体を異性に預けるような、膝枕をしてもらうよ
うな女じゃないんだ！！ 忘れてくれええええええええっ！！」

——公孫賛様が、引き籠もりになられた。

第十五話 逢紀君飲む（後書き）

劉備と北郷のアンチ気味な部分に関して

指揮能力——人を率いるって言葉で言う以上に難しいぜよ。実際黄巾党とかとの戦いでも兵を率いて前線で戦ってたのは関羽と張飛だけだし、本陣で軍師達の言う通りに命令してただけの劉備や北郷は多分それほどでもない。

知力——北郷は頭悪くないと思うけど、色々足らなくて失敗していると思う。劉備は……本当に、何だろうアレ？ 原作で需要と供給について、北郷に質問しているシーンは、本当に私塾を出たのか疑わせる。別の私塾を出たはわわやあわわが読破した書籍の名前や数を考えると……。

武力はそのまんま、原作基準。

子供達の遊ぶ余裕やその時の人攫い等による危険性、労働力云々は、時代情勢を鑑みればそういうものだろうという作者の推測。
あまり間違っではないと思う。

劉備達があっさり民に慕われた理由は、原作ではただ劉備達の人徳と関羽が断じているが、実際はハムの頑張りにある事は疑いの余地が無いはず。

人徳だけで昨日今日来たばかりの他所者があそこまでちやほやされるのはおかしいという作者の偏見も混じってるかも。

第十六話 苟?ちゃん見送る(前書き)

今回も微アンチ

第十六話 荀？ちゃん見送る

荀？side

ようやく重い腰を上げて、黄巾党討伐に向かった数万の官軍が、あっさりと蹴散らされ全滅の憂き目にあった。

この一報は瞬く間に漢全土に広まり、結果として「官軍恐れるに足らず」と意気込んだ各地の賊徒が一斉に黄巾党を名乗って蜂起する事となった。

幽州啄郡にも勿論この一報は届き、公孫賛様などは官軍の不甲斐なさに憤慨なされたが、官軍なんかに露ほどの期待もしていなかった私やチ○コ元上司はむしろこの事態を喜んだわ。

何故なら、官軍を蹴散らした黄巾党の一部が勢いに乗って豊かな中原辺りに雪崩れ込んだおかげで、各地で寸断されていた幽州の街道の一部が解放されたのだから。

これで、幽州他郡の太守や他州の太守達との連携が可能となるし、滞っていた物流も蘇る。賊の横行のせいで備蓄していた麦を失い、飢饉状態にあった各地の村々や街もかろうじて一息つけるはずだわ。

そう、胸を撫で下ろしていたのもつかの間――

「六千か……」

「ええ、六千よ……」

チ○コ元上司と共に城壁の上から見下ろした荒野には、六千人にも及ぶ義勇兵が雑然と集まって出撃の号令を待っていた。

十日ほど前に、朝廷から黄巾党討伐を各太守に命じる使者が訪れ、公孫賛様はその命令を受諾された。

当然でしょうね。これは、自分達の土地の問題でもあるのだから。

でも、本当の問題はそこからだったのよ。

劉備一行の存在を危険視した一部の者達に唆された公孫様が、独立の機会を与えるという名目で彼女達を啄郡から出す事を決められたのだ。

馬鹿な話だわ。

首輪たいぎと鎖おんさえあれば飼い殺せたであろう猛獣を、わざわざ野に解き放つなんて。

おまけに、独立と言っても自前の兵力を持たない事に悩む劉備達一行に、彼女達に割と好意的な趙雲が要らぬ助け船を出して、街中で義勇兵を募る権利を公孫賛様が正式に認める羽目になってしまった。更に、人が良い公孫賛様は兵糧と武具の準備まで奴らの代わりにやってやる始末。

文官武官を問わず、城内の官吏は皆涙目になっているわ。

そして、劉備一行の出発日までに集まった兵は、街の者だけでなく義勇兵募集の噂を聞きつけて駆け付けた近隣の村の者達を含んだ六千人もの大所帯であったのだ。

それを見下ろしながら、私達は頬を引き攣らせる。

「いやあ、北郷殿や劉備殿の人徳がこれほどのものとは、驚きですな」

そんなお気楽発言をしたのは、私達の横で同じように義勇兵たちを眺めていた趙雲だった。

私は深いため息をつく。

生粋の武官である彼女からすれば、少々想定したより多くの兵が集まったが、兵が多いに越した事は無い……という考えが頭に浮かんでいるんでしょうけど、私達文官からすれば目の前の光景は悪夢と評するほかないわ。

街中の血気盛んな乱暴者や食い詰め者はともかく、農村の働き手までごっそり持って行かれるなんて、来年の収穫高の減少を考えると胃と頭がズキズキする。

麦の収穫は既に終わったが、これから面倒極まりない脱穀をしなければならぬし、秋になればまた畑を耕し冬前には種まきがある。これが遅れると、収穫量が目に見えて激減するのだが、それまでに黄巾党の反乱が鎮圧される可能性は……まあ、はっきり言ってない。

つまり、来年は不作決定というわけよ。

こうなってくると、人の良い公孫贄様が義勇兵への食糧や武具の供出を約束したのが逆に功をそうしてくる。なぜならば、そうする事により一時的に正規軍の兵站到負担はかかるが、その分だけ確実に義勇兵たちの生存率は高まり、乱の鎮圧後に啄郡に生還できる兵、元農民の数も自然と多くなるからだ。

農民不足で麦が不作でも、気候上問題がなければ帰って来た農民達に成長速度が速い豆なり何なりをひたすら作らせて、飢え死にだけ

は防ぐ事が出来るかもしれない……田畑の疲弊という犠牲は出るが、無理矢理にでもそう思い込む事により心の平穏を保った私だったが、幾らかの苦い思いは消し去る事が出来なかった。啄郡内の農政に深く関わっていた分、私がこの光景に抱く憎しみに似た感情も割り増しされているのかもしれない。

「……それにしても、これは酷い光景だわ」

「ん？ 何故ですか？ 中々壮観な眺めではありませぬか？」

「……腰に鉈を差しただけ、錆付いたボロボロの甲冑を着込んだだけ、痩せ馬の背中に乗っておたおたするだけ……そんな連中を見て、壮観と言える貴女の神経が私は羨ましいわ」

「むう……ですが、武具はこれから支給されるのでしょうか？」

「ええ、とりあえず武器庫から掻き集めた物をね」

でもね、と私は続ける。

「武具というのも所詮は消耗品よ。矢は勿論の事、剣だって鎧の上から人を叩けば簡単に曲がるし、槍だって打ち合っていれば自然と折れる物」

「まあ、確かにそうですね」

「公孫賛様のご厚意により、武具の支給こそできた劉備達だけど……果たして武具の補給はどうかしらね？」

「いや、それは……きつと商人やら名士、豪族らに話をつけて」

そう反論する趙雲に、更なる反論で返したのはチ○コ元上司だった。

「話をつけるなら、義勇兵の募集中にでもやり始めておけば良かったのです」

「まさか……やっておられないのか？」

「はい。兵糧や武具はある程度公孫賛様から貰えるからと、兵站の受領手続きと義勇兵を集めることだけに集中していたようです」

趙雲が言葉を失って愕然とした。

彼女もまさかそこまで劉備達に手拔かりがあるとは思ってもいなかったのだろう。

もともと、劉備達が商人やらの下へお願いに行っても無駄だったはずよ。

海千山千の彼らから物資を引き出すには、武官寄りの考えしか出来ない彼女達は駆け引きの類がお粗末すぎる。適当にあしらわれて追いつめられるのが関の山だわ。

黄巾党討伐、治安の回復を大義に掲げても無駄。名士や豪族は自衛のために武具を手放さないだろうし、儲け時の武器商人なんかは支払い能力もない義勇軍なんて鼻で笑うはず。

「多分、今も彼女達は武具の補給については問題視していないでしょうね。せいぜい、多過ぎる人数を見て兵糧の消費が激しそうだ、どうしよう、くらいの危機感しか持っていないかと」

「……うむうっ」

チ○コ元上司の言葉を聞いている内に顔色を悪くした趙雲は顎に手を当てて唸りだす。

「……そう言えば、兵糧の方は」

「当初の予定が千人を三月養える分でしたからね。六千人となると、半月しかもちません」

「半月……まっすぐ行軍したとしても幽州を出た辺りで底を尽きますな。そちらの補給はどうお考えなのだろう、劉備殿は」

「聞きに行ってみますか？」

「ええ」

頷いた趙雲を連れてチ○コ元上司が城壁を降り始めたので私もそれに続く。

そして、開け放たれたままの城門をくぐって外に出た私達は、劉備達の姿を探す。

むさ苦しい男どもの中にあって、彼女達存在は目立つはずだたちここに向けると、案の定すぐに見つかった。

ただ、予想外だったのわ。あのお気楽四人組の傍に、私と同じくらいの背恰好をした二人組の少女がいて、

「はわわに……あわわ……」

彼女達の姿を確認したチ○コ元上司の表情が、複雑な歪みを見せた事だ。

「お、あそこに居られたか——ングッ」

チ○コ元上司は駆け出そうとした趙雲の口を咄嗟に塞いで、義勇軍の中へと引きずり込む。

私も嫌々ながらそれに続く。

不意に口を塞がれた趙雲は意外な事に碌な抵抗も見せず「そんな、人前で」とか「まだ心の準備が」とかもごもご何やら言っていたが、チ○コ元上司にそれを気に留める余裕はなさそうだった。

人垣の間から見える劉備達四人組とちんまい二人組の会話を盗み聞きる。

「あ、あのですね、私たち荊州にある水鏡塾——」

「力の無い人たちが悲しむのが許せなくて――」

少々理想に傾き気味ではあるが、それを貫かんと南の果てから北の果てまで旅してきた二人の決意は本物とみて良いわね……噛み気味な口調は弁士として失格だけど。

同じ事を思ったのか、或いは別の何かを感じ取ったのかチ○コ元上司が苦笑をこぼしていた。

その苦笑が凍りついたのは、

「だからあの……わ、私たちを戦列の端にお加えください！」
「お願いします！」

と二人が懇願した瞬間だった。

「……」

悲痛な表情が彼の顔を覆ったが、何かを口に出す事は無かった。ただただ、少女二人が劉備達に仕官する様を見届けているようだ。

二人の仕官は関羽の反対を北郷が抑える形で認められた。

その後、二人から真名を預けられてほのぼのとした空気が少しばかり漂うが、すぐに真剣な表情で今後の方策について話し始めた。

そして、小規模な黄巾党部隊を殲滅しつつ名を挙げる事と、兵糧の補給は各地の村や街の富豪から寄付を募るか、敵部隊の物資を鹵獲する事に決まったみたい。

各地で寄付を募ると諸葛亮とかいう少女が言った時、チ○コ元上司の肩がピクンと震えたのは、恐らく私と同じ危惧を抱いたからだろう。

諸葛亮自身も自分で提案しながらどこか後ろめたそうな暗い顔なのは、きっと彼女も提案した策の欠点や実行した際の弊害、悪影響に気付いているからでしょうね。

「……寄付。綺麗な言葉で着飾っても、要は恐喝じゃない」

無論、各村へ寄付を募りに行く劉備達にはそんなつもりなどないだろう。

彼女達が持つ優しさは、紛れもなく本物よ。民に無理をさせてまで、兵糧を工面させようとは考えないはずだわ。

でも、寄付を募られた側はどう思うかしら？

ある日突然義勇軍を名乗る六千もの『武装集団』がやって来て、糧食の寄付を願ってくる。

目の前の代表者はいかにも人徳溢れる御仁だが、村の傍に布陣している義勇兵たちの中には明らかな無頼漢や食い詰め者が混じっている。

もし、そんな者達に向かって「食料は一切渡さない」と言ったらどうなるか？

目の前の御仁は許してくれるだろうが、背後の連中は？
怒り狂って賊徒に変貌しないか？

暴走する者たちを目の前の御仁達はしっかり抑えられるのか？

或いは夜になって、無頼漢や食い詰め者達だけ陣を抜け出し、この村を襲いに戻ってこないか？

……考えるだけで恐ろしい。

飢えの苦しみや、恐怖が人を狂わせる事をつい最近身をもって知った河北の民だからこそ、今は義勇軍を名乗っている彼らが、後々暴挙に出ないとは信じられないはずよ。実際、その苦しみに耐えかねた者達が今は黄巾党と名乗ってかつての同胞たる農民達を苦しめているのだから。

「……村の安全の為に最低一食分……いいえ、多分一日分は出すわね」

六千の三倍。

つまり一万八千食。

地方の各村の村民の平均を二百人と見積もった場合、三十日分の食料が消える事となるわね。

日単位で食事量の調整と切り詰めをやってようやく飢えをしのげているような村にとっては、大打撃どころの話ではない。

いや、大きな村でもそれは同じよ。何処も食料に余裕のある所なんか無い。余裕が無いからこそ農民達は反乱を起こし、この世が乱世と化しているのだから。

確実に、口減らしとして山に置き去りにされて殺される子供か、大きな街に身売りする娘が何人も出てくるわね。

「……早い段階で、劉備達が敵部隊とぶつかって物資を鹵獲する事を祈るしかないわね」

諸葛亮も間違いなく心の中でそれを祈っているだろう。

気付いていても、他の策を提案できない、置かれた現状の酷さがほかの選択肢をを許してくれない……軍師としては辛いわね。

今後の方策がとりあえず纏まって、和気藹々とした雰囲気劉備一行に漂う中、チ○コ元上司がぐったりとした趙雲を引きずるようにして城門へと踵を返した。

私もそれに続く。

「ねえ、チ○コ元上司」

「んゝなんだい、荀？ちゃん」

「あの二人、あんたの後輩なんでしょう？」

「そうだよ。あだ名ははわわとあわわ。荀？ちゃんと同じ天才で――」

「良いの？」

「……」

「あんな吹けば飛ぶような弱小勢力に仕官させて良いの？ 下手をすれば、あっさり全滅して死ぬかもしれないわよ。それどころか、獣達の慰み者に――」

更に言い募ろうとした私をチ○コ元上司は手で制する。

そして、城門の下までたどり着いた時、一度だけ振り返って言った。

「伏して眠りについてた龍は起き上がり、雛であった鳳は羽を生え揃えて飛び立った」

もはや二人は巢から飛び立ったのだと、彼は言う。

自らの意思で、自らの翼で飛ばたいで、飛び立った。そんな二人に自分が先輩風吹かせてあだこうだ、アレは止めろコレをやれと指図するのはおこがましく、無粋なのだ。

分かる。

言いたい事は良く分かる。

一人前となった相手に賢しらに口出しするのは、相手の意志を軽んじ蔑にすると同じだって事くらい、私にだって分かるわよ。

……でもね。

だったら。

だったら、何であんたはそんな不格好で痛々しい笑みを――

一刻後、武具を義勇兵たちに配りを終えた劉備一行は何処へともな

く出陣していった。

それを最後まで見送ったチ○コ元上司……いや、逢紀は趙雲へと視線を向けた。

「じゃあ、そろそろ私達も行きましようか？」

「うむ、そうしよう」

領いた趙雲の合図で城壁の上で旗が振られ、義勇軍とはかなり離れた場所に布陣していた八千の啄郡正規兵が城門前に姿を現す。

行軍は一糸乱れず、整列後はざわめき一つ起こらない。

さきほどまでここに雑然と陣取っていたただの義勇軍と、正規軍の違いがはっきり分かる光景だ。

公孫賛軍は各城には最低限の守備兵だけを残し、あちこちから掻き集めてきた兵隊を公孫賛様と私が率いる一万と、趙雲と逢紀が率いる八千に振り分けてから、二手に分かれ黄巾党を殲滅する事が先頃の朝議で決まっていたのだ。

これは戦力分散の愚を犯してでも、可能な限り早期に黄巾党の脅威を取り除くことが肝要だと判断が下されたためよ。

啄郡内の黄巾党を討伐した後は、公孫賛様と私の軍が他の幽州太守と連携を図り幽州内の黄巾党を滅ぼしつつ、幽州での公孫賛様の地位を盤石なものとし、趙雲と逢紀の軍が他州まで足を延ばして漢全土の安寧を取り戻しながら公孫賛軍の名前を売る事になっている。

慣れない他州での遠征を強いられる趙雲・逢紀軍には多大な負担がかかるはず。

「おおおっと……よいしょ」

どんくさそうに馬に跨った逢紀。

私はさあ出発だと意気込む趙雲を尻目に彼に声をかける。

「……ちゃんと生きて戻ってきなさいよ。あんたが死ぬと、田豊が悲しむわ」

「ええっ、よりによって田豊？」

こいつ、前から思ってたけど、田豊の何処が不満なんだろう？
私の好みとは違うけど、彼女もかなり美人なのに……。

「せめて顔良さん辺りなら、生きて帰って来ようって思えるんだけどなあ」

「顔良だって悲しむわよ」

「良し、やる気出てきた。あと、文醜さんやついでに袁紹様も悲しんでくれると……」

「文醜も悲しむわね。袁紹様は……微妙ね」

あの人は下手したら、出向中の私達の存在すら覚えていないかもしれない。

「公孫賛様は？」

「絶対泣くわね、あの人なら」

こう言っておけば、絶対に喜び我を忘れるだろう。

そう思っていた私は、次の言葉に意表を突かれた。

「じゃあ、荀？ちゃんは？ 悲しんでくれる？」

……私？

とっさに馬上の逢紀の顔を確認すると、何やらにやにや品の無い笑みを浮かべている。

これはあれね。

私が顔を真っ赤にして「悲しむわけ無いじゃない！」とか怒鳴る展開を期待しているわね。

それでこいつは「ええっ、そんなあゝ」っておどけた態度をとって旅立つ気だ。

そんなふざけた考えを、別れを、私は許さない。

だから、はっきりこう言っやるのだ。

「泣くわね。あんたが死んだら」

一瞬ポカンとして、すぐにしてやられたという顔つきになった逢紀に私はさらに言っやる。

「やり返したかったら、せいぜいこの乱を生き延びて、無い知恵を絞る事ね」

逢紀は困ったように頭を掻きながらも――しっかりと頷いたのだった。

第十六話 荀？ちゃん見送る（後書き）

アンチ気味な部分に対して

義勇兵に関して――これはアンチというよりも、ああ、こいつらのせいであって感じです。理由は前々から書いていた通り、農村の働き手があああつ！ という奴。

これは多分何ですが、劉備勢には許緒みたいな農村・農民出身者がいなくて農村における働き手の重要性や、本当の意味での農民の気持ちや苦しみがあまり分かっていないのではないかと。農民の気持ち云々に関しては後々そう思える行動を取るのですその時アンチしたいと思います。

武具の消耗――あの世界だって武器が一切壊れないわけじゃあるまい。張遼が部分的に得物を改造されて文句言った時「耐久性が変わるわけでもないのに」的な事を言われていた気がする（記憶曖昧）

支援者の募集――原作でも義勇兵集め始めてからの一週間、無駄にしてたぜあいつら。だいたいの三国志物（恋姫じゃない本家）でも劉備は義勇軍つくる前に支援者確保に動くのが先。偶然助けた馬商人の富豪とか。

村での寄付集め――いやいやいや、農村にそんな余裕ないから！
反乱したくなるくらい生活は切羽詰まってるから！

第十七話 逢紀君討伐する（前書き）

まあ、とりあえず一回くらいまじめに黄巾党とぶつかっておきましようというお話。

盛り上がらないとかは、気にしない方向で。

第十七話 逢紀君討伐する

逢紀 side

「斥候より報告！」

少しばかり興奮した様子の伝令が軍議の最中の天幕に姿を現したのは、俺達が出陣してから八日目の朝の事であった。

俺や趙雲及び公孫賛様の臣下である上級武官数名を前に伝令が報告したのは、敵黄巾党軍発見の報だった。

「……御苦労、下がれ」

趙雲の言葉と共に伝令は天幕から姿を消し、俺達にもたらされた情報元を元に軍議を再開する。

「一万二千……とうとう万越えの軍勢と戦う事になりそうですね」

「ここ数日我らが相手をしてきたのは、多くて二千程度の小勢ばかりゆえに、特に大きな損害も出さずにすみましたが……」

「自軍より五割増しの相手ならば、苦戦は必至か」

心持表情を歪ませる上級武官達を尻目に、兵数の差だけが全てではないと知っている俺はもたらされた他の情報の分析にかかる。

敵黄巾党軍一万二千が布陣しているのはここから南西に三十里ほど離れた所にある、小さな山々に囲まれた狭い窪地らしい。

多分、山を隠れ蓑に官軍や諸侯軍の目を誤魔化し略奪に励んでいるのだろう。

それに四方を山に囲まれた窪地に布陣していれば、もし敵が襲撃して来ても山中を行軍してきた軍勢の陣形は乱れに乱れているはずだから迎撃は容易い。

難があるとしたら火攻めに弱いといった所か？

だが火攻めは周囲に村落がある場合使えないしな。

地図を確認した所、山の周辺には無いが、南の山から続く森の先には四つほど村がある。火攻めをすれば間違いなくその村々に被害が行くだろう。これでは公孫賛軍の評判を著しく傷つけかねない。火攻めは却下だな。

じゃあ、どうするか……まあ、地形を利用しようとする辺りはまんざら馬鹿でもなさそうだが、あつさりこちらの斥候に見つかっている点を考えれば、付け入る隙もなくはなさそうだ。

よし、その隙を見つけるべく張？に偵察に行ってもらおう。

彼女なら今から出発しても、昼を過ぎたくらいには戻ってこれるだろう。

そう考えた俺は、特に今回の軍議では発言する事もなく趙雲の解散の号令を待った。

軍議解散から三刻後、俺は偵察から戻った張？から自分の天幕で報告を受けていた。

この三刻の間、馬での移動に山間踏破、敵陣偵察、陣内潜入等をぶっ通しでやっていただろう張？だが、報告を続ける彼女の仮面の奥からは疲労といったものが感じられない。

言い方は悪いが、まさに化け物である。

「……つまり、何ですか？ 連中は軍を三つに分けていて、細長い楕円形の形をした窪地の両端と真ん中にそれぞれ布陣している？」
「はい。正確に言うと、軍を三つに分けたわけではなく、元々別の集団だった三つの部隊がただ同じ窪地に好き勝手布陣しているといった具合ですが」

それは……まあ、何ともまた、烏合の衆という言葉がよく似合いそうな状況だな。

俺と同じ気持ちなのか、仮面で素顔や表情を隠しているはずの張？も苦笑しているように感じた。

「敵陣から浚って拷問にかけた敵兵から聞きだした所、真ん中の集団は兵役経験のある元農民や太守の圧政に耐えかねた現役兵からなる五千、両端の集団はそれぞれ元々賊徒だった連中や無頼漢の四千と、ここ最近の飢饉で喰うに困って仕方なく反乱を起こした農民三千のようです」

なるほど。

それぞれの集団は全く性質が違うから、とりあえず黄巾の旗の下に合流したは良いものの上手く一つに纏まれず、結果的にバラバラに行動する事になったという所か。

「……敵の練度はどうですか？」

「兵隊上りがこの軍より少し劣る程度、無頼漢達は個々の戦闘力がありますが連携力は皆無、農民達は結束してこそいますが雑兵と言っているでしょう」

「物見はどうなってますか？」

「杜撰、という他ありません。それぞれの集団が、自分達が布陣している場所のすぐ傍にある山の中に物見を派遣しているのですが……」

：まともに物見が機能しているのは中央だけです。無頼漢達は物見であるにも拘らず酒を飲みたいだけ飲み、賭け事に興じていますし、農民達は何処に物見を配置すれば良いのか理解していないようで警戒網が穴だらけでした。どちらとも、御命令あらば私達の力で軍が通れるほど穴を大きくして見せます」

なるほど、だとすると警戒の緩い左右のどちらかから襲撃をかけるべきですかね。

成功すれば、地理的に考えて敵の集団がほぼ二つ遊兵になるし楽な戦闘となるだろう。

さて……役立たずな物見の排除は張？がやってくれるらしいけど、仕掛けるのは左右どちらにしよう……。

「崩しやすいのは無頼漢ですが、総合的な戦闘力を考えると兵数と武器が少なく飢えて脆弱な農民達の方が叩きやすいかと」

張？の助言はもつともだな。

農民達の存在は明らかに弱点であり、急所だ。

でも、と俺は顎に手を添えて考える。

もつと、もつと大きな隙は、弱点は無いのか？

それに、攻撃を開始する時間帯はどうする？ 夜襲か？

だが、夜間の山間行軍は難しいし、朝駆けしようにも、山を越えるとあつては日の出とともに攻撃とはいかなくなる。

色々考えた末に、ふと一つの可能性に思い至る。

「張？」

「はい」

「無頼漢どもの酒はどれほどありましたか？」

そんな俺の問いに、張？は「何処から略奪してきたのかは知りませんが」と前置きをして答えた。

「毎晩遅くまで宴会をしても、尽きぬほどでございました」

趙雲 side

黄巾党軍発見の報の翌日、まだ朝の気配が十分残る中、

「蹴散らせえええええっ!!」

腹の底から捻りだした号令と共に、私は軍の先頭に立ち、敵陣を易々と斬り裂いて行く。

こう言うとまるで私達の軍が桁外れの強さを持っているように聞こえるが、実はさにあらず。

ただ、敵が完全に油断していただけた。

「はああっ!!」

槍を一閃、二閃させると、みすばらしい天幕から慌てて飛び出してきた寝ぼけ眼の賊徒達の首筋から鮮血が吹き出して行く。

「て、敵しゅー」

そう叫ぼうとした賊徒の頭を、公孫賛様からお預かりした兵の一人があっさり剣でかち割った。

脳漿が飛び散り、それを見た賊徒の一部がみつともない悲鳴を上げながら逃げ出した。

一人が逃げ出せば、それを見た他の者の頭にも逃走という選択肢がすぐに浮かび、それは高い確率で実行に移される。

「に、逃げろおおおっ！ 官軍の襲撃だああああっ！」

「戦っても無駄だアアアッ！ こっちの倍はいるぞ！！」

蜘蛛の子を散らすように逃げていく賊徒の無防備な背を見送るほど私は優しくない。

だが、追撃に移るにしてもまずはこちらの陣形を整えるのが先だ。

「それにしても、逢紀殿の仰られた通りとなったな……」

昨日の夕暮時に私の天幕を訪れた彼の語った策がこうまで見事に成功するとは。

『……敵軍の実情は分かりましたが……何故無頼漢側から朝駆けの形で攻めるべきなのか、お聞かせ願えるかな？』

『人とはそう簡単に昔の生活を、長年かけて身体に染みついた生活習慣を変える事は出来ません』

『ふむ、確かに。それで？』

『農民は蠟燭や油の節約の為に夜眠るのが早く、畑仕事をする為に朝目覚めるのも早い。兵士は状況により変わりますが平時は農民と似たようなものです』

『……』

『ですが、賊上がりや無頼漢はこの逆で、夜は仕事ぬすみや酒宴ばかざわぎをしたりで遅く、朝は夜が遅い事もあり寝たいだけ寝る。無論、幾人かの例外はおりましたようが』

『つまり、朝駆けの時刻が少々遅くなっても、無頼漢側ならば問題ないという事ですか？』

『はい。どれほどの人数が眠ったままかは行ってみねば分かりませんが、眠りから覚めてそう時間の経っていない人間の身体は冷たく

固いので碌に動きませんから、どちらにせよ叩きつぶすのは容易でしょう。逆に農民側から攻めた場合は』

『元が弱くともそれなりに身体が温まっていってしっかり武装している可能性が高いか』

『その通りです』

そう逢紀殿は昨夕頷いておられたが、正直言って私はそうも簡単に事が運ぶものだろうかと疑っていた。

だが、結果を見て見ればご覧のとおりという奴だ。

私達が山を下りる勢いに任せたまま碌な陣形も取らずに突撃した先では、目覚めたばかりといった態で鎧も付けず武器も帯びずに朝食の準備をする数名の黄巾賊が、一体何が起こったのか理解できないと言わんばかりの呆けた表情で出迎えてくれた。

彼らの首をこちらの兵が一瞬で次々と斬り裂き、未だ高軒をかいしている愚物や「うるせえぞ！ 朝から騒ぐんじゃねえ！」等と見当違いな怒鳴りをあげている者達にも、すぐに後を追わせてやった。

こちらの兵八千が全部山から下りてきた辺りでようやく敵陣全体が異常事態を悟ったようなので、私はそこで初めて先ほどの号令を下したのだ。

「趙雲將軍！ 陣内にて逃げ遅れた黄巾賊どもの掃討は予定通り逢紀殿が千の兵で行われるそうです！」

「そうか！ ならば我々も予定い通り横陣で逃げた連中を追うぞ！」
「はっ！」

私の副官をやってくれている上級武官が瞬く間に七千の兵で横陣を敷いてくれたので、私はそれを率いて無様に背中を見せて逃げ続ける敵およそ二千強を追撃にかかる。

追撃の速度は中々だが、陣形を崩さないようにしているこちらとは違い、思うがままに走って逃げる黄巾賊に追いつけるほどではない。だが、これで良いのだ。

こうなる事は、事前に逢紀殿から聞かされていたいのだから。

『奇襲を受けた無頼漢達は懸命に逃げるでしょう……友軍のいる、黄巾の旗の下へ』

無頼漢達の陣が襲撃を受けた事を悟り、すぐさま救援に向かおうとして陣形を整えていた現役兵中心の黄巾賊部隊はしかし、救援対象であるはずの無頼漢達が統率をなくして恐慌状態のまま走り込んでくるとは予想外だったのだろう。

「た、助けてくれええっ！」

「くっ！ 邪魔だ馬鹿野郎！ 突っ込んでくるな！ 陣形が乱れる！」

整然と退却して来てくれたならまだしも、我先にと飛び込んでくる敗残兵を受け止めるのは至難の業である。

「そこを退いてくれ！」

「来るな！ 陣形が——」

「おい、早く行け！！！」

あちらこちらで人間がぶつかり合い、押しつぶし合う。せっかく敷かれた陣形の一部がズタズタに引き裂かれ、その効力が

減衰した。

そして、無頼漢どもの突入に遅れる事少しして、未だ陣形を再生していない黄巾賊どもの下へ私達追撃軍が殺到する。

次の瞬間起こった事を言葉にすれば、こうだ。

――鎧袖一触。

黄巾賊どもは為す術無く、公孫賛軍の兵士達の槍に、剣に、その身を貫かれ、斬り伏せられていく。

「ふっ、ただでさえこちらより練度の低い『軍』が『集団』に成り下があれば、これも当然の結果か」

そう呟きつつも、私は休むことなく槍を振るい続ける。

正確には数えていないが、もう五、六十人は仕留めただろう。

返り血を浴びて喜ぶ趣味は無いので、服などは綺麗なままだが、流

石に臭いまでは……屠った相手の死の香りまでは避ける術が無かった。

その香りを本能か何かで嗅ぎ取ったであろう雑兵どもは、一歩二歩と後ずさる。

「雑魚に用は無い！ 黄巾の将よ！ 勇あらば、この趙子龍の前に出てくるが良い！」

そう叫ぶと、私の前に大刀を構えた一人の敵が立ちふさがったので、

「我こそは馬——」

「邪魔だあああああっ！！」

絶妙な一撃で喉を抉り、排除した。

まったく、ただのデカブツ雑兵が私の前に立つなど百年早い。
立つならせめて将並みの力量を備えてからにして欲しいものだ。

さて、今度こそは将が出て来て欲しいと思い、周囲を見渡したのだ
が……どうやらこの周辺には将はいなかったようだ。

誰も前に出て来ようとはしない。

それどころか、顔を真っ青にして及び腰になる連中ばかりだ。

「將軍がやられたああああああっ！！」

「駄目だ！ 逃げろおおおっ！」

何処かからか、そんな叫びが上がる。

どうやら、私以外の誰かが先に敵将を討ってしまったらしい。
残念だ。

逃げ出す黄巾賊を追いつつ、私はこの戦いがもはや終わりを告げた事を悟った。

今相手にしている無頼漢、兵隊上りの黄巾賊の数も、最初の半分以下。

こちらの被害はぱっと見、五百から千。しかも、斬敵の掃討を終えたらしい逢紀率いる千が後ろから合流しようとしてきている。負けるわけが無い。

元農民の三千？

無頼漢達が襲撃された事を知っても、救援に行くかその場で防備を固めるか、それとも自分達だけで逃げるのかという判断も出来ずにあたふたとした挙句、今になってようやくこちらに向かいだした有象無象など私達の相手にもならない。

逃げ出した連中と正面からぶつかって、徒に混乱し、蹴散らされるのが関の山だ。

そんな私の予想……と言うより逢紀殿の事前の読みはすぐに、実現するのであった。

第十七話 逢紀君討伐する（後書き）

逢紀君だって軍師として無能なわけではありません。

一部の連中が規格外過ぎるので、存在がかすんでしまうだけなので、という事を何気なくアピールしたかった。

次回は、星回収の為のお話。

第十八話 趙雲さん招く（前書き）

話が長くなりそうなので、二話に分ける事にしました。

第十八話 趙雲さん招く

趙雲side

戦闘が実際に終わったのは昼を少し過ぎたくらいだった。

しかし、戦後処理という面倒な作業が残っている為、私達は夕方になっても戦場となった窪地から離れられないでいた。

設営された陣の中、軍議用の天幕の中では私の目の前で逢紀殿と数名の武官が色々話し合っていた。

私は話し合いに参加したりはしない。自分の向き不向きくらいは理解しているつもりだ。

私がこの場にいるのはあくまで、彼らが話し合って出した結論に対して、この軍の大將として許可を出すか出さないか判断する為だけである。

「ええ、逃走したと思しき敵兵三千への追撃は、この地を治める太守に連絡を取って任せた方が良いでしょう。私達が追うのは無理です。今回捕らえた捕虜の事もありますし、長引けば兵糧に不安があります」

「かしこまりました。この地の太守には伝令を送るということ」

「逢紀殿、捕虜の問題は如何でしょう？ 一度啄郡に連れて行きますか？」

「捕虜の数は三千八百でしたか？ かなり多いですね。連れ帰れない事はありませんが……」

「捕虜の大半は元農民です、出陣前に文官どもが嘆いておった農村の働き手になりますぞ」

「元々の啄郡の農民が不満を抱いたりしませんかね？ 何で反乱を起こした罪人と一緒に働かなくちゃいけないんだって具合に」

「……む、むう、では、彼らの処遇はとりあえず連れて帰って公孫賛様にも伝令を送って意見を求めた後に決めましょうか？」

「はい、それなら良いでしょう」

「ですな。最悪鉾山にでも放り込めば良いですし」

「お、お待ちください、鉾山での労働は命懸けの過酷な重労働で……」

「まあ、仕方ありませんよ。彼らが反乱や略奪といった罪を犯したのは事実ですし。下手に温情を与えてもそれを知った他の黄巾連中がつけ上がるだけです。また、彼らを庇いだてするような行動を郡全体で取れば、中央の連中が間違いなく嘴を突っ込んで来て要らぬ嫌疑をかけてくる可能性もあります」

「……分かりました」

次々と処理されていく案件。

その中心にいる逢紀殿は滅多に自分から「こうしよう」といった意見は出されない。ただ、「ここはまずい」とか「ここはどうなんだろう？」と述べるだけ。

しかし、武官達から出された案件は確実に処理されて行く。実に不思議な光景だ。

そんな不思議な光景を生み出している現況が、今回の戦いにおけるある意味最大の功労者だというのだからますますもって面白い。

……いや、それよりも。

私は一度頭を軽く振って、要らぬ雑念をすべて捨て去る。

……そろそろ決断の時が近づいてきている。

何の決断か？

言うまでもない。

私が今後、どこに誰に仕えるかという決断だ。

もはや漢王朝は王朝としての力も権威もその大半を失ったと見て良い。今日の戦闘で叩きつぶした相手がそのことを如実に示している。

ただの賊の横行ではない。

ただの兵士の反乱ではない。

ただの農民の一揆ではない。

それら全てが同時に起こっているのだ。

これでは漢王朝の寿命は幾ばくの猶予もあるまい。

ならば早い内に己の主を定め、その方を天下の新たな主にすべく奮闘することこそ武人の為すべき事。

だが、その仕えるべき主と言うのが問題だ。

胸の内に何人かの候補はあるが、未だに誰にすべきか心が定まらない。

その事に対する相談を、私は目の前の逢紀殿にしてみようと思っている。

決断に他者の……しかも、いずれ敵対しかねない相手の意見を入れるのは少々情けないが、過ちを見抜く彼の才に頼れば、少なくとも私は後悔するような道を選ぶ事は無い……そんな気がする。

たとえば彼とは別の旗を仰ぐような関係になろうとも、笑って再会できるような気がするのだ。

意を決して、一段落ついたらと疲れた息を吐く逢紀殿に私は声をかける。

「逢紀殿」

「はい、何でしょう趙雲殿？」

「その、今晚、私の天幕に足をお運び願えないだろうか……お一人で」

ピキッ！

何故か空気が凍ったような気がした。

訝しく思い周囲を見渡すが、特に変わった所は無い。

ああ、いや、変わった所はあった。上級武官達がピタリと動きを止めている。置物の如く微動だにしない姿は呼吸すらしていないのではと疑わせる。

まあ、どうでも良いが。

「えっと……何故？」

「お話があるのです——」

一瞬、凍っていた空気が溶け出し、

「——『私と逢紀殿の将来の関係』にも関わる、大事な、大事なお話が」

すぐに再び凍りつく。

いや、今度は実際に天幕の温度が下がったのではないかと思えるほ

どの寒気がおまけで付いてきた。

私がブルリと身体を一度震わせると、この寒気の中何故かダラダラと汗を流している逢紀殿がひきつった笑みを浮かべる。

「……そのお話と言うのは、これからの軍の行動に関係」

「しません。先ほども言いましたが、至極私的な物です」

「え、えっと、それは私でなければなりませんか？」

「無論です。逢紀殿以外考えられませんし、意味がありません」

彼の才能が必要なことから、当然だろう。

「う、そ、その、付き添いを一人――」

「それは困ります」

「何故!？」

「……お察しいただきたい。余人がいますと口にしづらい話なのです」

相談相手である逢紀殿以外の人間に、私が自分一人では仕える主人決められない軟弱者だと知られるのは御免である。

「くっ、ならばせめて、天幕の外、見える範囲に人がいる場所で」

「逢紀殿はそんなにまでして女に恥^{わたし}をかかせたいのですか？」

もし風に乗って声が誰かに届いたらどうするおつもりなのだろう？

ガクリと項垂れた逢紀殿が観念するように「……分かりました。今晩そちらに伺います」と言ってくれたので、私もようやく胸を撫で下ろす事が出来た。

「……趙雲將軍、そろそろこちらの仕事も一段落つきますし、一度

天幕に戻られて、お休みになつては如何でしょうか？」

「そうか、なら少し休ませてもらおう」

腰に帯びていた剣を鞘から抜き出して丹念に手入れをしていた副官の提案に、私は素直に乗る。

流石に今朝は暴れ過ぎた。

逢紀殿に相談している最中眠ったりしないよう、今の内に仮眠をとっておこう。

……それにしても、公孫賛軍の将兵は良く鍛えられているな。私がかれほど疲労を感じているというのに、彼らはブンブンと剣やら槍の素振りをする余裕すらあるのだ。

まあ、天幕の中であるような事ではないがな。

先ほどから逢紀殿の身体を何度もかすめかけているし……止めさせた方が良いか？

そう思いつつも私は一人天幕を後にした。

『お、落ちつこう、諸君。これは何かの誤解だ。もしくは、はわわの罨だ』

『公孫賛様だけでは飽き足らず、趙雲將軍までその毒牙にかけると

は……』

『苟？殿に認められているというだけでも殺意が湧くの……』

『そもそもこいつのせいで、趙雲將軍の露出度が下がって、それに伴い調練を受ける兵士のやる気が激減したのだ』

『責任を取らせる良い機会ですな』

『ね、ねえ待とうよ、いや、待って、皆！ 俺、僕達は同じ死線にくぐり抜けた仲間じゃないか！ 仲間同士争うなんて――』

『黙れこの裏切り者が！』

『さてさて、どうやって処理したものか……』

『こんなのはどうです？ 我が軍に敵の間者が潜んでいて、それを逢紀殿が見抜かれ直接捕縛の指揮を取られたが』

『思わぬ反撃にあい、命を散らすと……異議なし！！』

『く、くそうこうなったら水鏡流護身術の真髓を見せてくれる――
って剣をあっさり奪わないで、あ、いたっ、竹簡投げるな！ 駄目
だって、指の関節増やさないで！ 墨を耳に流し込むなんてそんな
！ 耳が駄目なら目はどうかとかそういう問題じゃ――っああ
ああああああああああああああ！！』

何やら後方の天幕が騒がしかったが、夕焼けに染まり血が滲んだかの様な色をした紅雲に目を奪われていた私は特に気にする事は無かった。

第十八話 趙雲さん招く（後書き）

次話で相談。

第十九話 斬蝶語らう（前書き）

ちよつと、時間がかかった上に、読みにくいかもしれません。
申し訳ない。

第十九話 斬蝶語らう

逢紀 side

うううつ、お目目が痛いよう。

耳も何だかジクジクしてて気持ち悪い。

拳句の果てに指の関節数が増えて……一、二、三……ふうつ、大丈夫だったか……それぞれの指の関節は三で揃ってる。

「良かった良かった……って親指の関節数は確かっ!？」

とんでもない事実の発覚に一瞬顔面を蒼白にした俺だったが、すぐに顔色を戻す。

現実逃避という類稀な技能の賜物という奴だ。

伊達に袁家で、袁紹様の下で苦勞を積み重ねてきたわけではないのだよ。

「あの糞武官どもめ、顔と名前はしっかり覚えたからな。帰ったら公孫賛様に――」

あ、チクッたら趙雲の呼び出しまでばれるか。

変な誤解はされたくないし、今のは無しの方で。

復讐の念を募らせながら具体的な復讐計画を練り上げていると、いつの間にやら趙雲の天幕にたどり着いてしまっていた。

陽が落ちてから大分立つというのに、この天幕の周辺には無数の篝火が置かれている為昼のように明るい。

そんな風に明るく照らし出された天幕周辺に人影は一つも無し。一軍を率いる将の寝所とは思えないほどの不用心さだ。

「まあ、彼女の実力を考えれば刺客の十や二十はあっさり返り討ちにしようだしな。大丈夫か」

ちなみに俺の天幕は見張りの兵を普通の将の三倍ほど置いて貰ってガッチガチに防備を固めている。

だって、暗殺者とか超怖いもん。

もし襲われたら瞬殺される自信あるぞ、俺。
あわわより弱い暗殺者だったら話は別だが。

「……なんて、馬鹿な事考えている暇は無いか」

もう手を伸ばせば天幕の入り口に手が届く距離だ。

急ぎ心を落ち着け、この先に待っている何かに対して気を引き締めなければならぬ。

待っている何か。

その何かが武官達が勘ぐったような色事めいたものでないことぐらい察しはついている。もっと殺伐とした、面倒くさい相談ごとの類だろう。

あの時の決意に満ちた、それでいて何処か頼りない趙雲の瞳を目の当たりにしてそれが見抜けないようでは軍師失格である。

と言っても、実際に何を相談されるのか見抜けない辺りが、超一流軍師にならない俺の限界でもある。

そんな事を思い込みながらも、「趙雲殿、入りますよ」と声をかけ「どうぞ」と返答を受けてから俺は一度唾を呑みこんで、ゆっくり

と天幕の入り口を潜った。

数本の蠟燭が照らし出す薄暗い天幕の中にはほとんど物が無かった。簡素な寝台と一抱えほどの行李が置いてあるだけで、机や椅子の類は見当たらない。どうやらここは趙雲にとって、ただ寝る為だけの場所らしい。

そう考えると本来ならば男として心臓の鼓動の一つでも跳ね上げさせるべきなのかもしれないが、そうしてしまうと何か自分の負けの様な気がしてしまったので堪える。

「何も無い所で申し訳ありませんな。そこらに適当に座ってください。私は茶など用意してきますゆえ」

そう言った趙雲があつという間に天幕から出てしまったので、仕方なく天幕の中央付近に腰を下ろす。床布を敷いただけのゴツゴツとした地面は決して座り心地の良い物ではなかったが尻が痛くなるほどでもない。

そのまま黙って待っていると程なくして趙雲が茶器を乗せた盆を抱えて戻って来た。

俺と対面になる場所に腰を下ろした彼女は不慣れ丸出しの危なっかしい手つきで二人分の茶を淹れ、片方の湯呑みを俺の手元へと押し出してきた。

「……」

「……」

話し合いに備え、喉を潤しておこうと湯呑みを口元へと運び軽く傾けた。

「……ッ!？」

まあ、当然の如く渋くて飲めたものではなかったが、吐き出すのは我慢して湯呑みを置く。

対面では俺と同じ状況に陥ったらしき趙雲がその端麗な顔を歪ませて、湯呑みを置き、その場の気まずい空気を誤魔化すようにして咳ばらいをした。

「今宵逢紀殿をお呼び立てしたのは、とある相談を受けて欲しかったのです」

「……ほう、相談ですか」

酒好きを公言してはばからないあの趙子龍が茶を出すほどの、重要な相談事とは……？

「いえ、正確に物申せば、私の質問に答えて欲しかったと言うべきですか」

「まあ、私で答えられる事柄なら……」

俺が承諾の意を込めて頷いたのを見た趙雲の肩から力が抜ける。第一関門を突破したと感じたのだろう。

「では、率直にお尋ね申します」

「はい」

目に見えて瞳の奥に決意を宿した趙雲が問う。

「この乱世を静め、新たに天下を治めるに相応しい器の持ち主はどなたであると逢紀殿はお考えか？」

……。

………。

………なるほど。

なるほど……なるほどな。

うん、彼女の質問とやらは良く分かった。

良く分かった以上、俺は答えねばならない。

渋さの塊である茶の残りを一気に飲み干して、俺はただ一言こう告げる。

「お前、嘘ついてんじゃねえぞコラ」

趙雲 side

いきなりの暴言に、私は思わず「は？」と間拔けな声を漏らしてしまった。

乱世だ新しい天下だという言葉を不敬と詰られる覚悟はあった。質問の裏に隠された私の懦弱な精神を嗤われる覚悟もあった。最悪話をはぐらかされてしまう覚悟だってあった。

だが、質問しただけでいきなり嘘つき呼ばわりされる覚悟は無かった。

ゆえに私は若干焦りながら質問を重ねる。

「う、嘘つきとはどういう意味ですか？」

「そのまんまの意味だボケ」

またも暴言。

普段、私や公孫賛様に見せる取り済ましたような態度とは違い、荀？殿に相対した時に見せるざつくばらんで遠慮のない態度。

彼が急にそんな態度となったのは、恐らく本気で、そう本気で、客将としての互いの立場抜きに一個人として私と向き合おうとしてく

れているからなのだと思う。

ならば、彼の態度や発言にも必ず意味があるはずだ。
まずはそれを引き出さねば。

「……私がどんな嘘をついていると仰られるのか？」

私のあからさまな怒気に、逢紀殿は鼻で笑って答える。

「だってお前、全然『率直』に尋ねてないだろう——」

「いえ、そんなことは——」

「——お前が『本当』に訊きたい事を」

「ッ!？」

思わず息を呑む私に、逢紀殿は淡々と告げる。

「その反応。案外自覚が無かったのかな。だが、今の俺の発言で確実に気付いたはずだ。お前が訊きたいのは『どなた』が天下を治めるに相応しいかではなく、自分の胸に宿る『誰か』が天下を治めるに相応しいか否か、だろう？」

心臓を掴まれた気分だ。

いや、掴み潰されかける気分と言っても良いかもしれない。

鼓動が不規則になったかのように呼吸が苦しくなり、冷や汗が背中を流れ落ちる。

そして、そんな私に逢紀殿は容赦なく、

「ついでに言ってやろうか」

とどめの一撃を放たれた。

「お前の胸の宿るのは――中山靖王劉勝が末裔、劉備殿だ」

「ッ……そ、それは」

「おっと、誤魔化しは無しだぞ。彼女達の義勇軍旗揚げの際にお前が出した助け舟を知っている人間なら、誰だってその程度の事思いつくし、疑う余地などない」

そこまで言われては下手な否定や誤魔化しなど出来るはずもなく、私は黙って頷き、その後とつとつと何故私が彼女を己が主君にすべきか迷っているのかを話した。

初めて謁見の間で劉備殿を見た時、もしかするとこの方ならば我が槍を捧げるに相応しい王器をお持ちなのかもしれないと思った。

理屈で言えば、関羽殿や張飛殿の様な豪傑を従えておられたからであり、理屈抜きで言えば単純に本能が、武人としての勘が働いたからである。

だが、私のそんな思いは早々に砕かれてしまった。

今日の前にいる逢紀殿の手によって、実にあっさりと、だ。

逢紀殿が挙げた劉備殿達の罪を耳にした私は即座に気持ちを切り替え、彼女達を啄郡における危険人物として注意を向ける事になったの

だ。

しかし、そんな私の態度はその後の劉備殿達の戦場での活躍や街での振る舞いを見るにつけ、徐々に緩和されていく事となる。

いや、緩和どころの話ではない。

戦場における関羽殿と張飛殿の豪雄振りや、民草と語らう劉備殿や北郷殿の慈愛に満ちた表情は確実に私の心を惹き付け始め、いつしか、やはり劉備殿こそ我が主に相応しき御方なのではと思うようになっていたのだ。

それでも私の迷いや、躊躇いが消え去らなかった原因は、彼女達が犯した大罪……ではなく、私がかつて共に旅をしたとある二人と比較してもなおこの世で最も優秀な文官と思える荀？殿と、私がこの世で最も恐れる文官である逢紀殿のお二人が、あの四人組を歯牙にもかけなかったからである。

特に私にとっては、逢紀殿が彼女達に対して好意的な態度を一切取らなかったのが大きい理由だ。

逢紀殿は私にとって特別な御仁である。

これは別に男女の機微や色事めいた感情は関係ない。そもそも私は彼に対してはつきりと『そうだ』と言えるような感情を抱いているわけではない。普段私が取る態度を見て誤解する人間も多いが、あれは私にとって単なる親愛の情の域を出ない。多分、親愛の情を抱いた異性が逢紀殿ではなく北郷殿であっても私は似たような態度で相手をからかい、ふざけあっていただろう。

私が逢紀殿を特別と評するのは、ひとえに彼が私の抱えていた悩みを幾つか解消してくれたからである。

例えばそう、今着ているこの私の地味な服だ。

彼に指摘されるまで、私は己が身を美しく着飾る事に一種のこだわりを持っていたのだが、そのこだわりを捨てる事によって改善された事がある。

それは訓練中の兵士達の態度や、頻繁に接していた上級武官達の態度である。

……はつきり言えば、鼻の下を伸ばさなくなった。

これは別に笑い話ではない。

客将として公孫賛様に仕え始めてからずっと、私は彼らの中では「情欲を誘う美しいだけの女武将」でしかなかったのだ。それが、彼の勧めた服を着ただけで妙な色眼鏡で見られる事も無くなり「非常に有能で美しい女武将」となれたのだ。

この違いは、武人としての誇りを持つ私にはとても大きなものだった。

また、逢紀殿の意見を私が取り入れた事を知ると、今まで私に私の強い客将という壁を感じて近づいてこなかった文官数名が献策に訪れるようにもなった。

そう言った諸々の理由から、私の中でその存在を大きくしている逢紀殿が、劉備殿達に非好意的な感情を抱いているというのは私にとって無視できない事である。

ゆえにこの場を借りて、劉備殿がこの天下を治めるに相応しい器を有しているかどうか、逢紀殿にお尋ね申し上げたいのだ……という旨を、若干後半部分は濁しつつ尋ねた。

「……なるほど」

そう頷いた逢紀殿はしかし、すぐに答えはくれなかった。瞑目し、何事かを考えながら手の中の湯呑みを弄ぶ。

ただ待つだけしか出来ない私の喉は渴きに渴くが、手元の渋すぎる茶を飲む気も起きず彼が口を開くのを漫然と待つばかり。

……どんな答えが返ってくるのだろうか？

多分、否定的な物が返ってくるのだろくな、と予想する。

逢紀殿は劉備殿達を嫌っているのだし、それは当然。

それでも私が彼に尋ねたのは返答の中に幾分でも客観的な意見があればと――

コトン。

不意に響いた音に驚けば、逢紀殿が湯呑みを盆に戻した所だった。彼はそのままゆっくりと口を開き――

「乱世を静め、新たな天の主となる器量、劉備殿にもあると思うぞ。まず間違いない」

——思わず私が唾然とするような事を言っただけだ。

「……あの、その……本当に？」

「おいおい、お前もあると思ったからこそ俺に尋ねたんじゃないのかよ」

「いや、まあそれはそうなのですが……」

「もしかすると俺が彼女達の事を嫌っているから、否定的な事を言うと思ってたか？」

「……」

「見くびるなよ趙子龍。俺は己の好悪の情に惑わされて評価を誤るほど馬鹿じゃあない。嫌っていようが憎んでいようが、優秀な奴には優秀だと言うし、天才には天才と言う。それがはわわだろうがあわわだろうが毒舌猫耳であろうが脳味噌お花畑であろうがな」

険しい目つきで私を睨むようにしてそう言い切った逢紀殿に、私は己の浅慮を恥じるばかりで何も言い返せなかった。

俯いて言葉をなくす私に逢紀殿は少しばかりばつが悪くなったのか、口調を弱めて語りだす。

「王に必要な物は三つ。王個人の器量、仁徳、そして配下の質だ」
「……」

それには私も同意見、と言うよりそれこそまさに私の持論だったので頷く。

「この三つの内、劉備殿は既に二つを……仁徳と質の高い配下を備えている。個人の器量に関してはまだせいぜい下の上といった所だ

が、その所の所は本人に自覚もあるようだし、それを磨こうとしてもしてはいるようだ」

「で、ですが、劉備殿は白蓮殿を騙すような真似を一度なさって……」

「一度も道を過たずに王になった人間を俺は知らない」

気がつけば何故か逢紀殿が劉備殿を擁護し、私が彼女を否定するような立場に回っていた。

どうしてこうなった？

「では、では逢紀殿は劉備殿が天下を取られるとお考えなのですか！？」

思わず詰め寄りかけた私だったが、逢紀殿が右手を掲げてそれを制する。

「そうは言っていない」

「??」

もはや混乱の極致に至りかけている私に、逢紀殿はやや疲れたような表情をなさった。

「良いか、俺が言っているのはあくまで素質の話だ。実際に王になれるか否かではない」

「は、はあ……」

「確かに劉備殿には王としての素質があるが、彼女以外の人間に王としての素質が無いわけではないんだ。いや、むしろ彼女よりも王としての素質に恵まれた人間がこの漢の大地にはいる」

「それは白蓮殿の事ですか？」

「……劉備殿より優れているかどうかはさておき、素質の持ち主である事は確かだな。だが、俺が言っているのはあの方の事ではない。曹操殿の事だ」

曹操？

曹操と言うと、あの陳留の？

街の噂で聞いた彼女の風聞が確かなら、個人としての器量、仁徳、配下の質の三つを余すところなく揃えているようだが……。

「では劉備殿よりも彼女こそが天下の主に対応しいとお考えなの？」

「そうも言っていない」

も、もう何が何だか……。

混乱して頭を抱える私に、逢紀殿は困った表情をして頬を掻く。

「……先に言っておけば良かったな」

「……何をでしょうか？」

「俺には、誰が天下を取る事が最善なのかは分からないという事だ」

「……」

「俺に分かるのは、誰ぞが王となった時に起こる弊害、欠点ぐらいだ」

「……」

もはや完全に聞きの状態に入った私に、逢紀殿は淡々と語り続ける。

「劉備殿が王となる場合は、王の素質を持つ他の人間に比べ歩み出す時期が遅すぎたせいで、王へと至る道で必ず自分より強大な敵を何度も打倒さねばならないという壁にぶつかるだろう。さすれば例え王となろうと、残されたのは激戦により疲弊し切った国土と民だけだ」

「……」

「公孫賛様の場合は、忠臣の少なさのせいで国が上手く機能しないだろうし、曹操殿の場合は……彼女は才能を愛しすぎている。凡人には凡人なりに活躍出来る場はあるのに、才能を重視し過ぎる彼女にはそれが分からない。この広大な漢の大地を一部の才能豊かな者達だけで切り盛りするのは事実上不可能だ。必ずあちこちで凡人の手を借りねばならない。そして、凡人を愛さない彼女にそれを上手くやれと言うのは酷だろう。いや、そもそも彼女が王となった場合の一番の問題は後継者だ。彼女の周りに有能と呼べる男の影は無く、このままでは継嗣を産む事は無いだろう。それではまた国が割れる」

「……」

「最後に我が主袁紹様だが……この方はまあ、色々と欠点の多い方だ。見栄っ張りだし、我儘だし、高笑いは煩いし……例え王に成ってもそこら辺は変わらないだろうな。臣下はその穴埋めに苦しむだろうよ」

袁紹殿の時だけ少し茶目っ気を含ませて語った逢紀殿。

そして、各人が王に成った場合の弊害を並べたて終えた彼は、

「だからさ、結局俺達臣下側の人間が、仕えるべき主を定めるのに重要な基準ってのは――」

苦笑しながら、こう、告げる。

「誰が王に『相応しいか』ではなく、誰を王に『したいか』何じゃないか？」

重要なのは評価ではなく、好悪の情だと彼は言う。

好きか嫌いか、単純明快な基準で主を決めろと。

世に言う大義や道理ではなく、自分の好みで判断しろと。

選考対象の人間すべてが王の素質を持っているなら、確かにそれも一つの方法か……。

「俺が袁家に仕官したのはたまたま、そう、ただの偶然だ。だがな、俺は袁家が好きだ。家柄と財力しか取り柄が無いと馬鹿にされる袁家が好きだ。何故かと問われれば、そこに俺が好きな人たちが集まっているからだ。」

むかつくほどに男前な幼馴染の田豊が俺は好きだ。

お見合いだ何だと馬鹿を言いながら歴代太守の暴政で伴侶や恋人を殺された者や、働き手を失った一家の子女達の暮らしが立つよう奔走する沮授爺さんが好きだ。

賭博が大好きな駄目人間の癖に、飢える民の為に強行軍の買い出しだってやってのけてくれる文醜さんが好きだ。

暴力なんて嫌いなくせに、自分の心を傷つけてまで誰かを護ろうとする顔良さんが好きだ。

人として欠けた物が多く、歪な性格をしているのに、民を慈しみこの俺をとりたててくれた袁紹様が俺は好きだ。

だから俺は、もし事起こらば全力で袁家を、袁紹様を至高の座へと導くだろうよ。何のためらいもなく。ただひたすらに、な」

そう言い切ると、逢紀殿はもはやこれ以上語る事は無いと判断したのか、立ちあがってこちらに背を向ける。

そしてそのまま、私に何かを言わせる暇さえ与えず、天幕を去って行かれた。

呆然と彼の背中を見送った後、私はその場でただずっと座り込んでいた。

一体、どれ程の時をそうして過ごしていたのだろうか？

気付けば、蠟燭は全て燃え尽き、天幕の中を闇が覆っていた。

私はただ一人、その闇の中で思考の海に潜る。

……私は劉備殿を王にしたいのか？

かもしれない。

……私は劉備殿が好きなのか？

多分、そう。

……では、いざという時には逢紀殿の様な一途な顔で己の主に尽くせるのか？

分からない……。

劉備殿に惹かれているのは確かだ。

彼女が王に相応しい器を有しているという考えも確かだ。

だが――

「劉備殿の横で槍を振るう自分の姿が、どうしても思い浮かばない」

何故だ？

彼女の両横には関羽殿と張飛殿が既にいるからか？

そうかもしれない。だが、それだけではない気もする。

何かが、そう、何かが足りないのだ。

北郷殿を足してみた。

だが、駄目だ。

軍師志望だったらしい二人の少女も足してみた。

でもやはり駄目だ。

何となく、白蓮殿を足してみた。

……意外と良い感じになった。

試しに荀？殿も足してみた。

より自然になった気がする。

思い切って逢紀殿も足してみた。

……完璧に近づいた実感があつた。

「もしかや……？」

恐る恐る。

本当にためらいながらも。

私は――

「……ッ！」

――劉備殿達を抜いてみた！

残されたのは、私と白蓮殿、荀？殿に逢紀殿。

……劉備殿達を抜く前と変わらず、完璧に近い気がした。

「……ふ、ふふふっ」

何だ。

簡単な事じゃないか。

私は何を悩んでいたのだろう。

そうだ。

私は劉備殿達よりも、逢紀殿達の方が好きなんだ。

啄郡が最も苦しかった時期を共に手を携えて乗り越えたあの三人が、私は大好きでたまらないんだ。

万人を慈しみ、万人に慕われる劉備殿よりも、千人の為に我が身を削ってこられた白蓮殿が好きだ。

忠節を理由に己が闘う理由まで主に預けてしまった関羽殿や張飛殿より、自分で考え、策を練り、それを実行するためには毒舌すら含ませて主に説く荀？殿が好きだ。

飛び抜けた発想力を持つ北郷殿や、天才と謳われた軍師の少女たちよりも、地べたで必死にもがく様に生きる逢紀殿が好きだ。

「理想よりも愛した現実があったとは……何だかんだと悩みながら、私は心の奥底ではそれに気付いていたんだろうな」

だからこそ、劉備殿達に義勇兵を募る許可を白蓮殿が与えた後に、北郷殿から受けた誘いを私は蹴ったのだろう。

「惜しむらくは、この黄巾党討伐が終わってしまえば、荀？殿や逢紀殿は確実に白蓮殿の下を去ると言う事か……」

つまりは、私を含めた四人が、同じ旗を仰ぐ事は二度とないという事だ。

いや、待てよ……。

「……或いは、袁紹陣営と、公孫賛陣営どちらかの陣営が相手を降せば」

顎に手をやりあり得るかもしれない最善の未来に思いをはせた私は、

「この乱が終わったら、とりあえず？にでも行ってみるか……」

そう呟くのだった。

第十九話 斬蝶語らう（後書き）

ぶっちゃけ、群雄割拠の諸侯には大なり小なり王としての器があつて、それと同じように欠点もあるんだから、最終的に好き嫌いで仕える主を選んでも良いんじゃないかなという、作者の意見。欠点の小さい人間選べよと言う異論は認める。

原作でも趙雲は劉備、曹操、孫策を比べた時、結局君主の能力より自分の好みを優先してたし。そして、今作では好き嫌いで選ぶなら劉備達よりハムや逢紀君だろうとも思った。

次話はとうとう霸王様登場。

一刀達への微アンチ？もあるかも。

第二十話 逢紀君、馬に揺られる（前書き）

かなり遅くなった上、ちょい短いです。

話が上手くまとまらなかったで、霸王様は次回に持ち越し。

第二十話 逢紀君、馬に揺られる

逢紀 side

趙雲からの呼び出しを喰らったあの夜から早一月。

一度啄郡に戻って捕虜の引き渡しやら、物資の補給やらを終えた俺達は幽州内の黄巾党にもはや碌な戦力が残っていない事を知り、当初の予定を少し変えて幽州外への遠征を開始した。

遠征の目的地は青州。

当初の予定では俺や荀？ちゃんの実在もあり袁紹軍と何とか合流して冀州を叩くはずだったんだが、街道の封鎖が解けた為徐々に入ってくるようになった細作達の情報から、冀州の現在の情勢を鑑みて急遽変更となったのだ。

……ん？

急遽予定が変更するような冀州の現在の情勢が知りたいかい？

まあ、あれだよ。

一言で言うと、こうだ――

——真・田豊無双。

……何かね、凄いらしいよ、アイツ。

いや、何が凄いつて訊かれても困るんだけどさ。

冀州内の黄巾党討伐に乗り出した袁紹軍三万五千を使って、鎌で雑草を刈るかのごとく黄巾党を殲滅しまくっているらしい。

総大将の袁紹様や、袁家の二枚看板である文醜さん、顔良さんを差し置いて一軍師の活躍が轟くって……本当にアイツ、どんだけ暴れ回ってやがるんだか……。

袁紹軍と接触し直接田豊の姿を確認してきた細作の話だと、アイツ

は何やら黒い瘴気のような物を口から吐き出しつつ、呪念の籠った瞳を輝かせ、ケタケタと無気味な笑いを漏らしながら黄巾党を狩り尽くす策を練り上げていたらしい。

……どうしてそうなった？

多分、あの最悪に近いとも言える職場環境でほぼ一年をかけて溜めに溜めまくった怒りやら憤懣、不満の類が大爆発を起こしてしまったんだろうが、それにしてもアイツの精神崩壊ぶりは異常だ。

細作により詳しい報告を求めた所、何故か非難がましい目を俺に向けてながら、

『僕とアイツの再会を邪魔するような輩はあああああっ！！ 忌々しき泥棒猫やらポツと出の女神なんぞとのアイツの蜜月を引き延ばすような糞蟲どもは滅殺だああああっ！！』

と田豊が叫んでいたと報告してきた。

……いや、本当に、一体全体、アイツの身に何が起こったんだ？

一晩考えて見たが、結局アイツの変貌の原因が良く分からなかった。なので、袁紹軍との合流は断念する事となった。

そして翌日の軍議で、冀州をほぼ平定した袁紹軍が次に目指しているのは并州であることを知り、俺達は青州を目指す事となったのである。

触らぬ何とやらの崇りなしの精神だ。

——そんなこんなで青州に到着してからおよそ半月。

千単位の小規模な黄巾党軍を蹴散らしながら行軍を続けていた俺達遠征軍は、敵軍の本拠地とも呼べる陣地がこの青州に築かれている事を知り、そこを目指す事となった。

「……冀州から追い出された黄巾党どもが青州に逃げ出したという事ですかな？」

「ま、そういう事だね。逃げ出したといっても保有する戦力は十万を下らないらしいし、まともにぶつかるのは愚策だな」

パカラ、パカラ、と馬に揺られながら、俺と趙雲は雑談とも軍議ともとれる会話を続ける。

ちなみにあの晩以降俺は趙雲に対して公の場において以外はタメ口で話す事となった。俺があえてそうしているわけではない、趙雲が何故かそう望んだからだ。

「そう言えば、お聞きになりましたかな？」

そんな趙雲が昼の日差しに目を細めながら話題を変える。

「劉備殿率いる義勇軍が結構な活躍をなさっておられるそうですよ」
「ああ、そうみたいだな」

「何でも自軍よりも多い敵軍を策をもって破ったとか」

「まあ、はわわとあわわがいれば、練度不足の義勇軍でも倍くらいの賊を打ち破れるだろう。無論、自軍の被害に目を瞑ればの話だが」

何だかんだであそこは人材が揃ってるよな。

毒舌大好き苟？ちゃんや賭け事大好き文醜さんみたいに、変な欠点とかも少なさそうな人材が。

足りないのは糧食や装備だが、それも打ち破った敵軍から鹵獲して、今すぐどうこうという話ではなくなっただろう。

「では、その劉備殿達が、あの曹操殿の軍勢と合流したという話は？」

「知ってるよ」

こっそり劉備達の義勇軍に張？の配下を数名紛れ込ませているし、そこら辺はばっちり把握している。

べ、別に、はわわとあわわを心配して護衛代わりに送り込んだわけじゃないんだからね！ 勘違いしないでよ！！ フンッ！！

「劉備殿達が曹操殿と合流したのに何か不満があるのか、趙雲？」

「いえ、不満というわけではないのですがな……」

少しばかり言い淀む趙雲。

実は彼女が言いたいであろうことにあらかじめ予想は付いているが…

…。

困ったように眉をひそめた趙雲が心持声を抑えて口を開く。

「……このままでは、劉備殿達は肉の壁扱いされてしまうのではないでしようか？」

「まあ、そうだろうな。劉備殿達が心配か？」

「あの方たちも確かに心配ですが、それより義勇兵……啄郡の民達が心配です」

「……なるほど。実際に肉の壁として消耗を強いられるのは彼らだからな」

「その事を劉備殿達は如何お考えなのか……」

多分、何も考えていない。

考えている事があるとしたらせいぜい、精兵たる曹操殿の軍勢を参考にして指揮などを学ぼうとか、その強大な武力に便乗して手柄をあげようとかその程度の事だろう。

いざ、戦いの時になって肉の壁となる事を強いられ、憤激する連中の姿が容易に思い浮かぶ。

……はわわとあわわ辺りは気付いていても良さそうだが……あの二人も何だかんだ言ってまだ幼く人生経験が足りない。相手の悪意や打算を全て看破できるわけもないし、よしんば看破できても単独で小さな手柄をあげるよりは共同でも大きな手柄を、と割り切るかもしれないな。

劉備軍……というより、そこに所属する啄郡出身の義勇兵達の行く末を案じていると、前方から数騎の騎兵が駆け寄ってくるのが見えた。

黄巾党の陣地に向けて放った斥候が帰って来たのだ。

彼らがもたらした報告は、俺達にとって吉報とも凶報とも呼べるものであった。

「劉備殿達に先を越されましたな……」

「のようだな」

俺達が攻略せんとしていた黄巾党の陣地に対して、劉備軍と曹操軍が既に攻撃を開始したらしい。

敵本隊が離れている隙を狙っての行動なのでまず間違はなく陣地の攻略は成功するだろう。

「趙雲、あそこ……」

「どうやら火計を用いたようすな」

遙か遠く、地平線の向こうに幾筋かの黒い煙が見て取れた。

「どうする？ 多分俺達がつく頃には全部終わってるぞ」

「でしような。ですが、ここまで来て何もせず反転というのも間抜けな話です」

「じゃあ、不要とは思うがとりあえず勝敗の確認をしに行こうか。ついでにかの高名な曹孟徳殿にご挨拶もしておこう」

「ふむ、それは結構ですが敵の本隊が陣地の異変に気付き戻って来ていたらどうしますかな？」

「その辺は大丈夫だ。先ほど正規の斥候の他に、俺の手勢を敵本隊の動向を調べる為に放ったから何かあればすぐに報告に戻ってくる。予想以上に敵の行軍速度が速ければ狼煙を用いて危機だけでも知らせる手はずにもなっているしな」

では、そういう事で行軍を続けること凡そ一刻。

先ほどの斥候とは別の斥候が戻って来て、劉備軍と曹操軍がこちらに向かっている事を報告してきた。

斥候に更に詳しく話を聞くと、戦闘自体は火計を用いた劉備、曹操の連合軍の勝利であつさり幕を閉じたらしいが、やはり劉備軍は俺や趙雲の懸念通り肉の壁扱いされてかなりの出血を強いられたらしい。

まあ、兵の消耗に関して戦をやる以上避けては通れぬ道なので、あまり気にしてもしょうがない。
それより……。

俺は馬上で一人考えこむ。

彼女達がこちらに向かつてきているのは、俺達の存在を知ったからだろうか？

——いや、多分そうではなく、敵本隊から離れる方向に続く街道を行軍しようとしただけだろう。

では、俺達の存在に未だ気付いてはいないのか？

——微妙だ。曹操軍が噂に違わぬ練度を誇っているなら、相手の放った斥候がこちらに気付いていてもおかしくは無い。

こちらから先に使者を出しておくか？

——むううっ、義勇軍である劉備達だけなら放っておくんだが……向こうは太守である曹操本人が率いているのだし、面倒ではあるがこっちが先に使者を出して挨拶をしておくのが礼儀か。変な所で気に障って機嫌を損ねられても困るし、公孫賛軍は礼儀知らずだなどという風評を流されたら目も当てられない。

ある程度の考えがまとまった俺は、趙雲にその考えを伝え、使者の

選抜に取り掛かった。

その際、ふと些細な疑問が頭をよぎったが、あまりにも些細な物だったので俺はそれを特に気に留める事も無く、頭の隅へと追いやる。

まあ、本当にどうでもいいよな――

――俺の予想以上の早さで、彼女達が戦後処理の『諸々』を終えた事なんて。

俺は戦闘が終わって随分と経つというのに未だ勢いを衰えさせない
……否、戦闘を終えてから何故かますます勢いを強めている地平線
の黒煙に首を捻りながらも、のんびりと馬の上で揺られ続けた。

第二十話 逢紀君、馬に揺られる（後書き）

黄巾党の本拠地が何処にあるかとか、各戦いを何処でやったかとかそういう情報が原作では描かれてなかったので、今作では青州にさせてもらいました。

曹操とかは、自分の領地付近をあっという間に平定して、遠征して来ているのだとお考えください。

作者的に劉備達が曹操と手を組んだ事は間違いではないと思う。

ただ、その際にデメリットに関する事をもうちょっと色々深く考えておこうよとも思った。一軍を率いる身、義勇兵達の命を預かる身なんだからさ。

次回、作者がどういうアンチをやりたいかは、勘が良い人は分かっただと思います。

ただ、一方的に相手をなじったり非難したりという展開ではないので、そこら辺は期待しないでください。

第二十一話 逢紀君謁見する？（前書き）

更新遅くなって申し訳ありませんでした。

どうにも夏はパソコン前に陣取るのがしんどくて……。

すみません、アンチ及び霸王様の逢紀君への詳細な評価は次話へ持ち越しです。

第二十一話 逢紀君謁見する？

逢紀 side

だ、誰か、助けてくれ！！

このままでは、この俺、逢元図の命運が尽きてしまう！！

俺の必死の救助要請はしかし猿轡により、誰にも届かない。

仕方なく口ではなく全身を用いて要請しようとしても、粗縄により全身ぐるぐる巻きにされている以上イモムシの様な変態的動きしかとれず結局無意味に終わる。

くそうっ！

くそうっ！！

何でこんな事に！！

憤懣を抑えつける俺は瞳を閉じて、ほんの少し前の出来事を思い出し始めた――

曹操・劉備連合軍との合流は陽が沈み切る寸前に終えた。

それからすぐに野営の準備と黄巾党本隊接近に備えて斥候を放つといった諸々の作業に取り掛かり、それらをすべて終えて一息ついた

のが先刻の事だ。

そして現在、万を超える数の篝火が三つの軍の野営地を明るく照らし出す中、俺と趙雲は少数の護衛を引き連れ曹操軍の野営地を目指して歩いている。

今回の訪問目的は単なる挨拶だけでなく、彼女達が昼間に行ったであろう戦闘の詳細報告を受ける為でもある。

戦闘の詳細報告など、例え黄巾党討伐という同じ志をもつ相手とはいえ他所の諸侯軍にわざわざ知らせる理由はないので拒まれるかとも思ったが、割とあっさり受け入れられた。

恐らく曹操殿からすれば俺達が持つ情報、幽州の近況などを知りたいのだろう。

まあ、そこら辺はお互い様という事で情報の等価交換で行く事になるはずだ。

渡しているいい情報と、そうではない情報は既に選別し終わっており、趙雲にも伝えているので会談ではまず俺が口を出す事にはならないだろう。

……うん、多分大丈夫。問題ない。

わざわざそう心の中で自分に言い聞かせるような真似をするのは、何か猛烈に嫌な予感がするからであり首筋やら背中やらで走りまわっている悪寒を吹き飛ばす為だ。

むう、本当にさっきから何なんだろうね、この感覚は？

黄巾党が近づいてきているのか？

いや、だったら斥候から報告が来ているはずだし……？

そんなこんなで首を傾げていると、いつの間にやら曹操軍の野営地

に辿り着いていた。

軽く周囲を見渡してみても、昼の戦闘とその後の行軍による疲労は窺えるが負傷兵の姿はほとんど見当たらない。基本重傷者は一か所に集めて治療するので見かけないのは当然だが、軽傷の兵すら見かけないのだから昼の戦闘において曹操軍は圧倒的有利な状況で戦局を進めたのだろう。

これは趙雲の懸念通り劉備軍が盾扱いされたかなと思いつながらも、俺達の来訪の知らせを受けた曹操軍の文官の案内に従い歩を進めるとやがて一際大きな天幕に着いた。ここで護衛の兵とはお別れだ。

……妙な悪寒はまだ拭えないけど、とりえず今は目の前の会談だな。軽く眉間を揉み解し、心機一転、公孫賛軍の客将として恥ずかしくない態度を心掛ける。

案内役の文官が先に天幕へと入り、俺達の来訪を告げた。その後再び現れた文官に従い天幕の中へと入り込む。風が通らない天幕内部独特のむっとした熱気が身体を包み込んできた。

天幕内には簡易の玉座の様な物があるだけで、袁家のように無駄な装飾品はない。

何故なら必要がないからだ。

武骨を良しとしているわけではない。

ただ、その玉座に腰掛ける人物が自然と放つ華やかな空気と、それに相反するかのごとき雄々しき覇気だけで、来訪者の耳目を開かせるには十分なのだ。

曹操軍独自の他者を圧する雰囲気思わず俺と趙雲が息を呑んでい

ると、左右に数名の文官を控えさせている玉座の主が、美しい金髪の巻き毛を誇る少女が身に纏う覇気に相応しい余裕を見せつけるようにして立ち上がり、皮肉気に歪めた口を開いた。

「戦に間に合わず残念だったわね、公孫家の将達よ。ようこそ、我が天幕へ。私が陳留の太守、曹孟徳――」

「華琳様！ 公孫賛軍の連中が喧嘩を売りに来たというのは本当ですか！？」

「ちょ、姉者落ちつけ！ 誤解だ！ 公孫賛軍の連中は挨拶に来ただけで――」

ドン――！

「へ？」

物凄い速度で天幕に突入してきたらしき何かに思いつき背を押される俺。

いや、押されるなんて可愛げのあるものじゃない。

突き飛ばされる、或いはふき飛ばされるが正しい表現だろう。

もし突き飛ばされたのが俺ではなく趙雲だったなら、一、二歩よめくだけか、そもそも突き飛ばしそのものを避けていたのだろうが、あいにく俺にそこまでの運動神経は無い。

「おっとつとととととって!？」

前のめりになりつつも、フラフラと揺れ、確実に前進していった俺の前には挨拶の腰を折られやや呆然とした表情を浮かべる美少女が――

……っ、いかん、このままぶつかっては外交問題に!？

俺は懸命に体勢を立て直そうと努力するが、どうにもならなかった。グラリ。

致命的なまでに前のめりになってしまった俺の未来は、前方への転倒へと固定される。

くっ、ならばせめて目の前の少女とぶつからないようにするしか!

身体を強引に捻り、真正面ではなく斜め右に向かって倒れるよう方向転換を図る。

しかし、天はそんな俺のあがきを嘲笑うかのごとき、悪逆非道な未来を用意しやがった。

「え?。」

「なっ!?!」

俺がそのまま真正面に倒れるだろうと踏んだらしき金髪巻き毛少女が、衝突回避のために一歩横にずれたのだがその方向というのが、俺が修正した方向と同じで――

まあ、この後の展開は大体想像がつくと思うので割愛する。

あえてそれでも説明するなら、とある勇猛な姉妹とその主たる死神に徹底的にボコにされたあげく、簀巻きにされてしまったのだ。

……致命的だったのはやっぱりあれだな。もにゅもにゅとい揉んでしまった後「ちよつと物足りない感触だな……」とか素直な感想を口にしてしまったところだろう。

あの発言を口にするまではお互いに不幸な事故で済ませれたかもしれない。

俺にしては迂闊な発言だったと後悔している。

だが、本当に物足りなかったのだ!

手からこぼれ落ちるほどの大きさもなく、かと言って一部の変態どもが泣いて喜ぶほどの小ささでもない。じゃあ、手にすっぽり収まるくらいの調度良さかと言えば、それにはやや足りない。

微妙な胸。

残念な胸。

一応胸。

かろうじて胸。

胸（苦笑）。

あの時の物足らなさを俺が思いだし内心溜息をつく傍ら、曹操殿と趙雲の戦闘詳細を含めた情報の交換という会談は終わりの時に近づいていた。

一応俺もこんな格好ではあるが、二人の話くらいはちゃんと聞いていたのさ。

……発言権は立場的にも、物理的にも無かったけどな。

「なるほど。劉備軍を肉の壁と、時間稼ぎの捨て駒として利用しつつ火計をもって敵の士気をくじいたと」

「あら、人聞きが悪いわね。私はただ彼女達の実力に対応しい活躍の場を与えただけよ。もっとも」

「兵が率いる将の実力に見合っていなかったゆえに、肉の壁となつてしまったと？ 物は言い様ですな」

「言い様は大事よ。蔑にすれば足元を掬われかねないわ」

遠目に見る分には和やかな会談。

近づいて聞き耳を立てれば、陰気な腹の探り合いと皮肉の応酬。

そんな胃が痛くなるような時間はようやく終わりを告げた。

「では、本日はこの辺で」

「あら、少し待ちなさい。客人に茶の一杯も御馳走しなかったとなれば、私の名が廃るわ。秋蘭」

「はっ、少々お待ちください」

曹操殿に真名を呼ばれた夏侯淵將軍が天幕から出て行ったかと思えば、すぐに茶器を手にして戻って来た。そして手際良く茶を淹れていく。

ちなみに俺を突きとばした悪の元凶たる猪はこの場にいない。俺に制裁を加えて満足顔だった所を、ある程度冷静さを取り戻した曹操殿の叱責を受けて泣きながらどこかに走り去ってってしまったからである。

「どうぞ」

供された茶に二人は黙って手を伸ばす。

俺の前にもちよこんと茶が置かれたが、このような状態でどうやって飲めと？

せめて猿轡だけでも何とかしてほしいなと夏侯淵將軍に目で合図を送るが……物の見事に黙殺された。

まだ先ほどの事故を根に持っているらしい。目の奥で何やら冷氣すら感じる気迫が渦巻いている。彼女の外見とかは非常に俺好みなのにいきなり好感度『嫌悪』状態だなんて……グスン。

しばらく無言でありながらも和やかな……訂正、一部を除き和やかな時間が流れた。

その流れを断ち切ったのは、趙雲よりも先に茶を飲み干してしまった曹操殿だった。

「それにしても……」

彼女の覇気が滲み出るかのようなキリリとした瞳が俺を捉える。

そして、傍に控えていた夏侯淵將軍に顎で指図して、俺の戒めを解かせた。

久しぶりの自由に肩をぐるぐる回して固まった筋肉をほぐす俺に、やや気の抜けたため息をつく曹操殿。

「貴方、本当にあの逢紀なの？」

「あの、というのが、どの、逢紀を指しているのか分かりませんが？」

「……斬首の逢紀かと訊いているのよ。袁家の知の四柱のね」

「斬首の逢紀は確かに私ですが……知の四柱？」

何それ、聞いた事無い。

俺の表情から心の内を読んだらしい曹操殿が呆れたように肩を竦めた。

「呼び名なんてものは案外本人には伝わっていないものだけど、情報の有用性を知る文官ならもう少し気にした方が良いわね」

「はあ……」

「袁家の武の二枚看板、文醜と顔良は元からそれなりに名が通っていたけれど、多少見る目がある者ならここ一、二年で急速にその名を広めた知の四柱に注目しているはずよ」

そう言った曹操殿は親指以外を伸ばした右手をこちらに向かって掲

げた。

まず人差し指を折る。

「『王佐の才』と謳われし知略の持ち主にして、世の天才を嘲笑う真なる天才、苟？」

王佐の才、か。

格好良いなあ。あの猫耳にはもったいないくらいだ。

『猫耳軍師』で充分だろ。

次に中指を折る。

「豊かな人脈を持ち、深慮遠望たる事神仙を越える清廉の士『冀州の老樹』、沮授」

いや、あれはただのお見合い爺だろ。

続いて薬指を折る。

「果断なる処刑人。血塗られた文官。官匪の天敵。その瞳は全ての罪を暴きだし、咎人の首を切り落とす……『斬首の逢紀』」

よ、良かった。

この様子だと、啄郡で流れた悪評も他州までは広まっていらないらしい。

斬首の逢紀に関してもかなり物騒ではあるが、まあまだましな方だ。いやあ、良かった良かった。本当に良かった。

ほっと胸を撫で下ろす俺。

そんな俺を他所に、

「そして最後に――」

曹操殿が残されていた小指を、折った。

「『死神田豊』」

……。

………。

………。

何だろう。

続きというか、俺達みたいな補足説明が一切ないけど、田豊に対して世間がどういった評価を下しているのか良く分かる二つ名だ。良く分かり過ぎて反応に困るほどに、良く分か——

「またの名を『撲殺軍師田豊ちゃー』」

「聞いちや駄目だ聞いちや駄目だ聞いちや駄目だ聞
いちや駄目だ聞いちや駄目だ聞いちや駄目だ聞いち
や駄目だ聞いちやあ……駄目だああああッ!!」

目を閉じ、耳を両手で塞ぎ、蹲りながら絶叫し、全力で外部から侵入してくる情報を強制排除する。

お、俺は聞いていない！

何も聞いていないからな！

何も聞いていないから、あの男前が一つの策で血の雨を降らせ、十の策で血の池を作り、百の策で血の海を生み出した何て噂は知らないぞ！！

最前線で指揮をとりつつ、近づいてきた賊どもの頭を竹簡で叩き割ったとかいう活躍ぶりも知らん！！

曹操軍の間で『水鏡流護身術……恐るべし』何て微妙に誤解の混じった認識が広まっている事も存じませんとも！！

第二十一話 逢紀君謁見する？（後書き）

いかん、ハム分不足で本気で指と頭が動かない。

逢紀君が主人公体質の内の一つ、ラッキースケベを発動、でも相手は選ぶべき。

霸王様の胸部に関する論述に対する異議は認める。

次回は……早くて日曜ですね。

遅くなると本気でいつになるか分かりません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3562t/>

恋姫無双～地味は愛すべき個性～

2011年7月20日00時04分発行